

文學博士
吉澤義則撰

校本物
類稱呼
諸國方言索引

立命館出版部

例 言

一、本書は、方言辭彙作製にいたる過程として、越谷吾山輯諸國方言集『物類稱呼』の總索引を試みたものである。

一、物類稱呼は、全國の方言を天地・人倫・動物・生植・器用・衣食・言語等に分類解説したもので、方言研究者の座右に無かるべからざる書物である。

一、本書は、分つて本文篇及び索引篇の二篇とする。

一、本文篇は、物類稱呼の全文を収めたものである。

一、抑、物類稱呼には、二種の刊本がある。共に「安永四乙未正月」といふ刊記であるが、刊行書肆が一は「江都書林大坂屋平三郎伊南甚助」とし、二は「江都書林 須原屋市兵衛同善五郎」となつてゐる。(他に、全然刊行書肆名の記載なきものと、寛政十二年河内屋源七刊『和歌連俳諸國方言』と改題したものと、その後刷の前川文榮堂藏版とあるものなどがあるが、いづれも第二種版の後刷に過ぎない)。前者は所謂初刊本であり、後者は吾山が初刊本の誤謬や不滿の點を、板木を改めずに済む範圍に於て、出来る限り、自ら訂正増補した補訂本と思はれる。それは左記對照表によつてもわかることと思ふ。

(卷五)

大坂屋刊本

〔四丁ノ裏〕正親町一位公通卿の狂歌にさみせんといしかはゆし
なども詠し給へば。か。は。ゆ。し。と。云。か。た。よ。ろ。し。か。ら。ん。や。

須原屋刊本

正親町一位公通卿の狂歌にさみせんといしかはゆし
なども詠し給へり。

〔十二丁ノ裏〕出羽の尾花にてはせを翁の發句にも

〔二十丁ノ表〕をゝくといへとたゝくや雪の門

太。婢。

出羽の尾花澤にてはせを翁の發句にも

をゝくといへとたゝくや雪の門

去。來。

一、本書は、須原屋刊本を本文と爲し、大坂屋刊本との相違を一々頭註に示しておいた。但し原著者吾山が補訂した箇所凡そ四百箇所のうち、句讀點の補訂箇所のみは頭註することを省略した。尙ほ底本とした須原屋刊本は編者の藏本であり、頭註に用ひた大坂屋刊本は東京帝室博物館藏本である（岩崎文庫藏本は一見異本のやうに見えるが、この書は、後人が大坂屋刊本・須原屋刊本の二本を混綴したまでのものである）。

一、曩に日本古典全集四期本に收載せられたのは大坂屋刊本である。

一、索引篇は、五十音順索引と地名別索引との二章から成つてゐる。共に排列は大體發音假名遣順に據つた。又その第一段は方言語を、第二段は本文篇檢出の頁數を、第三段は本文篇一頁の「上」段乃至「下」段を示した。第四段（括弧内）は舊刊本（大坂屋刊本・須原屋刊本共通）の卷數・丁數及びその二丁の「表」「裏」を示した。

一、本書刊行に就いては小川壽一氏を煩はした事が非常に多かつた。茲に記して謝意を表す。

昭和八年九月

編 者 識

物類稱呼諸國方言索引 本文篇

物類稱呼

目次

卷一

天地

北辰	一上
北斗	一上
昂	一上
參	一上
風	一上
夏雲	三上
虹	三下
液雨	三下
雪	三下
霜	三下
水柱	三下
凍	四上
水	四上
泥	四上
水口	四上

目次

人倫

原	四上
土堤	四上
岸險	四下
谷	四下
岩窟	四下
穴	四下
四會	四下
小路	四下
河岸	四下
閭房	五上
庇	五上
地震	五上
石	五上
日南	五上
神無月	五上
晦日	五下
父	五下
母	五下
兄	六上
姊	六下
夫	六下

妻	小兒	息女	乳母	寡	妾	遊女	夜發	鹿酌奴	奴	陰陽師	梓巫	氏子	盜賊	乞人	屠兒	警	眉	腹	膝	尻	陰
六下	七上	七下	七下	八上	八上	八上	一〇上	一〇上	一上	一上	一上	一下	一下	一下	一下	二下	三上	三上	三上	三上	三下

卷二

動物

跟	鯉	鰻	馬	牛	野猪	狐	猫	鼠	鼯鼠	蝙蝠	蠹鼠	川童	雕鳩	刀鴨	鵲	鵲	鵲	魚狗	鵲
一三下	一三下	一三下	一四上	一四上	一四上	一四下	一四下	一五下	一五下	一六上	一六上	一六上	一七上	一七上	一七上	一七上	一七上	一七下	一八上

信天翁	秧雞	鷓鴣	鶺鴒	畫眉鳥	百舌鳥	繡眼兒	布穀鳥	蚊母鳥	杜鵑	燕	斑鳩	木啄鳥	鷓鴣	鷓鴣	鷓鴣	鷓鴣	鯉	鯉	鯉	棘蠶魚	烏鰂魚
一八上	一八上	一八上	一八下	一八下	一八下	一九上	一九上	一九上	一九上	一九下	一九下	一九下	一〇上	一〇上	一〇下	一〇下	一一上	一一上	一一上	一二上	一二上

比目魚	鞋底魚	幾須古	阿古	藻魚	目張	笠子魚	伊佐木	鮎魚女	保字保字	方頭魚	石鰻魚	鰻	鰻	丁斑魚	鮫魚	王鮪	鰻	松魚	河豚	鰻	鰻
一二上	一二下	一二下	一二下	一二下	一二下	一二上	一二上	一二上	一二上	一二上	一二下	一二下	一二下	一二下	一二下	一二下	一二下	一二下	一二下	一二下	一二下

生
植

蠅	髻	蛭	兜	飛	水	鼓	馬	蜈	蟾	蝦	蟠
蛄	蟲	蟲	蟲	蛾	黽	蟲	陵	蚣	蜆	蟆	蚺
三九下	三九上	三九上	三八下	三八下	三八下	三八上	三八上	三八上	三八上	二七下	二七下

米	秣	蜀黍	玉蜀黍	紅豆	綠豆	豌豆
.....						
四〇上	四〇下	四〇下	四〇下	四〇下	四一上	四一上

萊菔	四一上
菘	四一上
韭	四一下
冬葱	四一下
野蒜	四一下
蒜	四二上
芋	四二上
佛掌薯	四二上
黃獨	四二下
零餘子	四二下
甘藷	四二下
齊	四二下
紫萁	四三上
鼠麴草	四三上
火焙	四三上
蠶豆	四三上
刀豆	四三下
眉兒豆	四三下
黎豆	四三下
莧	四三下
萱艸	四四上
蘭蒿	四四上

獨活	四四上
迷穀	四四上
番椒	四四上
荷蒿	四四下
土筆	四四下
冬瓜	四四下
南瓜	四五上
越瓜	四五上
菜瓜	四五上
絲瓜	四五上
甜瓜	四五下
西瓜	四五下
錦荔枝	四五下
馨梨	四六上
栝蒌	四六上
桔梗	四六上
防風	四六上
澤瀉	四六上
麥門冬	四六下
石蒜	四六下
酸模	四六下
酢漿草	四六下

白前	四七上
大蓼	四七上
立葵	四七上
葇荑	四七上
鼓子花	四七上
繖摺艸	四七上
白頭翁	四七下
兔絲	四七下
三稜	四八上
玉樓春	四八上
石道遙	四八上
連錢草	四八上
烏鳳花	四八上
鑊箕草	四八下
鹿蹄草	四八下
羊乳	四八下
淫羊藿	四八下
薄荷	四八下
沙參	四八下
大戟	四八下
澤	四八下
鴨跖艸	四九上

菰漫根	四九上
銀菜	四九上
升麻	四九下
遠志	四九下
天麻	四九下
龍牙	四九下
免葵	四九下
景天	四九下
獨頭蘭	五〇上
荅	五〇上
浮薺	五〇下
石龍芮	五一上
眼子菜	五一上
菰	五一上
燕子花	五一上
牛面艸	五一下
綿棗兒	五一下
蘿摩	五一下
羊蹄	五一下
蘭菊	五二上
聚八仙	五二上
車前	五二上

海金沙	五二上
薑	五二上
碎米菜	五二下
錢藤	五二下
燕麥	五二下
天南星	五三上
藁吾	五三上
續斷	五三上
卷柏	五三上
有通	五三上
紫羅傘	五三上
水仙	五三上
蔓萸	五三上
西番蓮	五三下
薏苡	五三下
日向葵	五三下
紫金牛	五三下
鳳尾生	五三下
海仙花	五三下
南天燭	五三下
玉紫	五四上
茶蘿	五四上

郁子	五四上
天仙花	五四下
合子草	五四下
堅香子	五四下
辛夷	五五上
笑靨花	五五上
雪絨花	五五上
八手木	五五上
莽艸	五五上
木樨	五五下
曼陀羅花	五五下
五味	五五下
蕨蕒	五六上
山茶科	五六上
柃	五六上
合歡木	五六下
吉利子樹	五六下
蚊子木	五六下
橡實	五七上
小梅	五七上
八朔梅	五七上
寒紅梅	五七下

卷四

器用

水楊	五七下
白楊	五七下
接骨木	五七下
楠木	五七下
山椒	五八上
枸橘	五八上
樟	五八上
欖	五八上
枸骨	五八上
釣樟	五八上
李	五八下
柚	五八下
筍	五八下
柴	五八下
櫓	五九上
菌茸	五九下
松毬	五九下

屋豪	六〇上
紙手	六〇上
稻拔	六〇上
連枷	六〇下
碓	六〇下
枴	六〇下
篩	六一上
案山子	六一上
膝	六一下
機躡	六一下
杼	六一下
尺	六二上
綿筒	六二上
柰櫟	六二上
新	六二上
鋸	六二上
算盤	六二上
杠秤	六二下
錢	六二下
簪	六二下
梳	六二下
猪口	六三下

盆	六三下
組板	六三下
招鉢	六三下
摺粉木	六三下
糖昇	六四上
鐵灸	六四上
飯櫃	六四上
煙筒	六四上
煙盒	六四下
釜	六四下
鍋	六五上
杓	六五下
茶碗	六五下
鑿	六五下
湯鑊	六五下
土瓶	六六上
提燈	六六上
行燈	六六上
燈檠	六六下
發燭	六六下
衣架	六七上
步障	六七上

剃刀	六七上
櫛	六七上
櫛	六七上
蟬鬢掃	六七下
簪	六七下
竹筵	六七下
人偶	六七下
紙摺	六八上
穀阿	六八上
桶	六八上
鹽	六八下
簞	六八下
蓑	六九上
苞	六九上
木鉢	六九上
杵	六九上
梯	六九上
甌	六九下
漏斗	六九下
履	六九下
草履	六九下
櫛	七〇上

衣・食

供饗	七〇下
財布	七〇下
巾着	七一上
羽織	七一上
袴	七一上
頭巾	七一上
腰帶	七一上
襦半	七一下
襖鼻褌	七一下
襖衣	七二上
雨衣	七二上
飯	七二下
小豆粥	七三上
奈良茶	七四上
雜炊	七四上
牡丹餅	七五上
團子	七五下
煎餅	七六上
白雪膳	七六上
滑飴	七六上
糰米	七六上

卷五

言語

炒	七六上
菜飯漬	七六下
酒	七六下
大いなる事	七八上
多いと云事	七八下
わざといふ事	七八下
所の仕來といふ詞	七九上
見よといふ事	七九上
勞して苦しむこと	七九下
いかにしてもと云事	七九下
女色の事	七九下
呵らるゝといふ事	八〇上
よひとよといふ事	八〇下
方外なる物	八〇下
かはいらしいと云詞	八一上
あぢなし	八一上
情なきといふ詞	八一下
しぐむといふ事	八一下
久しきといふ事	八一下

あるまじき事をするといふ詞	八二上
他をさしていふ詞	八二上
自をさしていふ詞	八二下
穴のあいたといふ事	八二下
おそろし	八二下
こゝろなく	八三上
あそこ・こゝ	八三上
あのやうに・このやうに	八三上
出る	八三下
よいと云事	八三下
わるいといふ事	八三下
すてると云事	八四下
負ふと云事	八四下
東へ西へといふ事	八四下
右へ左へといふ事	八五上
つかはせといふ詞	八五上
くるゝといふ事	八五上
なに事じやといふ事	八五下
たのみなきといふ詞	八五下
ある時にと云事	八五下
くたびれといふ事	八六上
打擲すといふ事	八六上

ゆるやかに坐する事	八六上
かりそめと云詞	八六下
やをら	八六下
急にといふ事	八七上
目さむる	八七上
明日・明後日といふ事	八七上
雨降らんとして日和になりたるを	八七上
日和の定らぬを	八七上
羞明といふ事	八七下
あたらしいといふ事	八七下
うつぶくと云事	八七下
律義なる人	八七下
太義なといふ事	八八上
なぜと云事	八八上
脇へ退といふ事	八八上
しらぬといふ事	八八下
互に人を雇ひつゝ、やとはつれつする事	八九上
たづぬるといふ事	八九上
めてたきと云詞	八九上
嫁といふ事	八九下
夕	八九下
他人を馳走する事	九〇上

醜き女を譏る詞	九〇上
おめきさげふと云詞	九〇上
咳をせく	九〇上
めいわくといふ事	九〇下
道路のぬかり	九〇下
跨といふ事	九〇下
水にものを浸す事	九〇下
なぶる	九一上
されたはふるゝ事	九一上
さうじや・かうじやと云を	九一上
物に驚くこと	九一上
養生	九一下
正直	九一下
いつはりうそ	九一下
やくだいもなしといふを	九一下
いかやうにもといふを	九一下
是ほどいふ詞	九二上
はなはだしきといふ詞	九二上
物を借るといふ事	九二上
ぎしむ	九二下
直にといふ事	九二下
他と連立行を	九二下

際	九二下
外の事	九三上
物に候の生したるを	九三上
焦臭を	九三上
おろかにあさましきを	九三上
月水	九三下
物事輕率に騒しき事	九三下
残りなくと云詞	九三下
たび／＼といふ事	九四上
ねんごろなる事	九四上
いろ／＼といふ事	九四上
居るといふ事	九四上
八道	九四上
十六むさし	九四上
石投	九四下
かくれんぼ	九四下
鬼わたし	九四下
他の呼に答る語	九四下
助語	九五上

(1) 諸國方言
言ノ四
字ナシ

物類稱呼諸國方言序

二條のおとゝの筑波集に草の名も所によりてかはるなりといふ句に救済法師にはの芦もいせの濱蒹と附しにもとづきて諸國の方言の物ひとつにして名の數々なるたぐひを採り選ひて五の卷とはなしけらしそもくいにしへを去る事遙にしてそのいふ所も彼にうつりこれにはかりて本語を失ひたるも世に多かるへし中にも都會の人物は萬國の言語にわたりてをのづから訛すくなししかはあれど漢土の言語に泥みて却て上古の遺風を忘るゝにひとしく邊鄙の人は一郡一邑の方語にして且てにはあしく訛おほしされども實素樸に應じてまことに古代の遺言をうしなはず大凡我朝六十餘州のうちにては山城と近江又美濃と尾張これらの國を境ひて西のかたつくしの果まで人みな直音にして平聲おほし北は越後信濃東にいたりては常陸をよみ奥羽の國々すへて拗音にして上聲多きは是風土水氣のしからしむるなればあながちに褒貶すべきにも非ず畿内にも俗語あれば東西の邊國にも雅言ありて是非がたししかしながら正音を得たるは花洛に過べからずとぞ今こゝにあらはす趣は其事の清濁にさのみ拘はるにもあらずたゞ他郷を知らざるの兒童に戸を出ずして略萬物に異名ある事をさとしめて遠方より來れる友の詞を笑はしむる罪をまぬかれしめんがために編て物類稱呼となつくる事になんなりぬ

安永乙未孟春日

江都日本橋室方越谷吾山識



物類稱呼凡例

一此書あつめて五冊となし天地、人倫、草木、氣形、器用、衣食、言語、等を七門にわかつは、簡易にして採り索めやすきを要とす。それが中に天地と言語と器用衣類の如きまゝ交へ出すもの有。もとより街談巷説を、聞るにしたがひてしるし侍れば、管見不堪の誤多からむのみ。又其國にて如此稱すとは、國中凡の義にあらず。一國は勿論一邑のうちにては品物の名異なるもの也。具に録する事あたはず

一諸品の和訓は源順の和名鈔及漢語抄、本朝印行の諸家本等にて譲りて悉に誌さず。聊是は識者のために非ず、專聲素なを又所々註釋をくはふ

一引用る所の書の目には「(〇)編者云、今種字の便宜上。」を以てこれに代用した。(一)をもふけて是をわかつ、又方言の讀法には「一」をもつて知らしむ。たとへば花鳥風月くはちやうふうけつ如

此の類ひなり。余是に准ず

一諸國ともに中品以上の人物は言語あやまらず。音聲自然と和合して能通用す。故に爰に洩す事多し

一此編に著す所は唯民俗要用の事のみをしるす。廣大なる國郡無盡の言語、いくばくの歲月を経るとも大成する事難し。殊更短才をもちからず、をそらくは蠡海の譏もあらんかし

物類稱呼凡例畢

物類稱呼卷之一

江都 越谷吾山秀眞 編輯

天 地

北辰 ほくしん（北極と稱するものをなし。うごかぬ星なり）○上總國にて。ひとつのほし 又 番のほしと稱す

北斗 ほくと（うごく星なり）○東國にて。七曜のほしと稱す。又 四三の星ともいふ

昂 ほう（すばる星と云、二十八宿の内也）○東國にて。九ようの星と云、江戸にては。むつら星といふ

參 しん（からすきほしと云、二十八宿の内也）○中星の横につらなりたる三の星を江戸にて。三光といひ 又 三ツ星といふ。關西にて。親になひ星と云。東國にて。三ちやうの星と呼。武藏の國葛西にて。さんかほしといふ

風 かぜ○畿内及中國の船人のことばに、西北の風を。あなぜと稱す。二月の風を。をに北といふ。三月の風を。へばりちと云。四月末の方より吹風を。あぶらまぜと云。五月の南風を。あらはといふ。六月末の風を。しらはへと

いふ。土用中の北風を。土用あいといふ。七月末の風を。おくりまぜと云。八月の風を。あをきたといふ。九月の風を。はま西といふ。十月の風を。ほしの入ちといふ。十一月十二月の頃吹風を。大西と云○西國にても南風を。はへと云東南の風を。をしやへと云○北國にては東風を。あゆの風といふ。西北の風を。よりけと云。北風を。ひとつあゆと云。東北の風を。ぢあゆと云。丑の方より吹風を。まあゆと云。南風を。ぢくだりと云○江戸にては東南の風を。いなさといふ。東北の風を。ならいと云（つくばならいといふあり）西北の風を。はがちと云。東風を。下總ぢちといふ。未申の方より吹風を。富士南と云○伊勢ノ國鳥羽、或は伊豆國の船詞に、二月十五日前後に一七日ほど、いかにもやはらかに吹く風を。ねはん西風といふ（但し年毎に吹にもあらず）三月土用少し前より南風吹。あぶらまじといふ。四月よき日和にて南風吹。おほせといふ。五月梅雨に入て吹南風を。くろはへといふ。梅雨半に吹風を。あらはへと云。梅雨晴る頃より吹南風を。しらはへと云。六月土用半過より北東の風一七日程吹年有。さいと云（六月十六七日伊勢の御祭禮有、出家も參事也。故に御祭といふ也）六月中旬東風吹年

(1)をは

あり。ほんごちと云。それ過てより南風吹をくれまじといふ。八月の風を。あをきたと云。(はじめは雨にそひて吹、後はよくはれて北風吹なり)又。雁わたしたとも云。十月中旬に吹く北東の風を。星の出入といふ(夜明にすばる星西に入時吹也)又大風には二月吹を。貝よせと云(正月の節より四十八夜前後の西風也)三四月東南の風吹を。なたねづゆと云。四五月吹東南の風を。たけのこづゆといふ。八月に吹風を。野分^{ノノ}といふ(正月の節より二百十日め前後にふくなり)十月西風吹。神わたしたと云(霜月の荒といふは、廿三日より晦日までの間に荒るとしあり)○近江國湖水にて、風の定らぬ事を。論義といふ。日和風を。といてと云。湖上の風を。根わたしたと云。秋冬の風を。日あらしといふ。春夏の風を。やませ風、又。ながせ風、又。せた嵐など云○播磨邊、又四國にて、春南風にて雨を催す風を。やうずと云○越後にて東風を。だしといふ。西北の風を。しもにしといふ。西南の風を。ひかたといふ

今按に、西北の風を名づけて「あなせ」といふは「あなじ」の轉語也【後拾遺】に

へあなじ吹瀬戸のしほ合に船出してはやくそ過るさやかた

(2)東南ノ風

谷ノ風以陰以雨と有。谷風は則東風也。しかあれば異國にて東風にて雨降ると見えたり。又東武にて。はやてと云。爲家卿の歌に

夫木

へ浪しらむ沖のはやてやつよからし生田かいそによす

る釣舟

【舊事紀】疾風と有。是也。又八月の風を暴風と云。歌連俳ともに野分と詠。陸奥にて鮭下風とよぶ、此頃より鮭の魚を捕といへり

夏雲 なつのくも ○江戸にて。坂東太郎と云(坂東太郎といふ大河あり)大坂にて。丹波太郎と云。播磨にて。岩ぐもといふ。九州にて。比古太郎と云(比古ノ山ハ西國の大山なり)近江及越前にて。信濃太郎と云。加賀にて。いたちぐもといふ。安房にて。岸雲と云

今案に、これらの異名夏雲のたつ方角をさしていひ 又其形によりてなづく

夫木

へ水無月になりぬと見へぬおほそらにあやしき峯の雲

の色か

と詠し給ふ【古文前集】四時詩云、春、水満四澤、夏、雲多奇峯とあり。この詩より、今俳諧に雲の峯と句作なす歟

山を

と詠せし也。上古風をば「し」と稱し「ち」と稱せり。風がらしこち。はやちなといふ是也。又神社の棟に有千木といふ物も風木とも書也。尙説あり。又二月ふく風を「鬼北」といふは、丑寅の間より吹くをいふなるべし。丑寅の方を鬼門といへばなり。又「あぶらまぜ」は「あぶらまじ」の轉語か、あなじとをなじき心にや、又はへは薫風也【呂氏春秋】東南風を云と有【事文續集】夏、風也と見えたるも同じ。俳諧に風薫と句作するもこれなり。又星の入ごとと云有、惣じて九月の節より正月の節中は、すまる星の出入に日和かはりやすき物也。常には月日の出入をよく心得べし。夜に入る月にはひよりそこねやすし。夜出る月には少悪くも直る事あり。是を若月の入、そこね、出月の出直りと船の上にていふ事也。又俗に春北風に冬南、いつも東は定降の暮雨といへる諺有。又

へ五月西、春は南に、秋は北、いつも東風にて雨降るとしれ、とよめる俗歌もあり。其國々々におるて方角のかはりめ有。大凡關西は西風なれば則雨降、東風にて則晴るといへり。關東にては西風にて晴れ、東風にて雨降る也【詩】習々々々

虹 にじ ○東國の小兒。のじと云。尾張の土人鍋つるといふ。西國にて。いじと云。【萬葉】ぬじ又のすとも詠り(西國にていうじと云は夕虹の略語か)

液雨 しぐれ ○美濃加納にて。山めぐりと云【丹鉛錄】曰、張野廬、廬山記云。天將雨 則有白雲、或冠峯、岩、或耳中領、俗謂之山帶、不出三日必雨云々。又唐詩風吹山帶遙。知雨なども作れり。又不時に村雨の降を、相州箱根山にて。わたくし雨といふ

雪 ゆき ○東武にて。綿帽子雪といふを、西國にて。花びら雪と云。中國にて。へだれ雪と云。越路にて。ほた雪といふ。上總にて。ほたん雪と云。雲州にて。だんびら雪といふ。又ほろく降る雪を越路にて。はだれ雪と云

霜 しも ○關西にて。露霜(いまた霜の形をなさざるをいふ)といふを、關東にて。水霜といふ。なを説有略す

氷柱 つらゝたるひ ○越後にて。かな氷と云。奥の津輕にて。しがまといふ。同南部にて。墮氷と云。仙臺にて。たるひと云。會津及信州邊にて。すごほりといふ。西國及近江邊にて。ほだれと云。下總にて。とろろうといふ。下野にて。ぼうがねと云。伊勢白子にて。かなごと云。出羽最上にて。

ほんだらと云（氷柱垂氷の説有、略す）

凍いて○山陰道及相州箱根小田原邊にて。しみと云。源通村卿の詠に

へはこね山また明ぬまに越ゆかん道のぬかりのしみとけぬまに

水 みづ ○上總下總邊小兒の詞に。まんまと云。薩摩にて。あかといふ。閼伽は水の梵語也。但。舟にては諸國共に「あか」といふ

泥 どろ ○備後福山にて。だべんと云 今按に金泥・銀泥などいふ物も此意成へし。可後勘（和名「ひちりこ」

又「こひち」と云。戀路によそへて歌によりめり）

水口 みなくち ○苗代へひく水くち也）上總にて。水の手といふ。越中、國にては。いのくちと呼。東國にて。水口と稱す 今按に、苗代とは上古田地を代といひし也。今もしろをかくと云事有。又雁など時々田を飛ざるを、代をかくるといふも此ころなり

③「と云」フ
二字無し

原 はら ○筑紫にて。はるといふ（何のはる、かのはるなどいふ）

土堤 とて ○上總及信濃にて。まいといふ（つゝみといふ）

蘭房 ねや ○遠州にて。ほそをりと云。下總て。こざといふ。武藏にて。をかたといふ

① 小月

庇 ひさし ○關西にて。をだれといふ。越後にて。がぎといふ（いせの國にて。家居にあるを庇といひ、土藏に有をがぎといふ。江戸にては商家の暖簾といふものをかくる具に尾垂といふ有）

地震 ぢしん ○關東及北陸道にて。ぢしんといふ。西國及中國四國にて。なるといふ。【日本天智天皇紀】是春地震と有

石 いし ○畿内にて。ごろたと云は、石の小なる物を云。

東國にて。右ころといふ。山陰道にて。くりと云（細小なるものか）越中にて。いしなといふ。江戸にて。じやりと云日南 ひなた ○野州栃木にて。てるみといふ。日陰を。てるくみといふ（東國にて。樹陰を。こざといふは木さはりの略語にや、又爲家卿の歌に。こさふかはくもりもぞするみちのくのゑぞには見せし秋の夜の月と詠し給ひしは、蝦夷人の術に胡砂吹といふ事の有よし也）

神無月 かみなづき ○出雲國にて。かみありづきといふ（貝原翁いづもの國にても神在月とは稱せずといへり。然

ふ有、土堤とは別也）

崖險 がけ ○筑紫にて。ほきといふ

谷 たに ○關西にて。たにと稱す（黒谷鹿谷のたくひ也）相州鎌倉及上總邊にて。やつと呼（扇が谷、龜が谷等なり）江戸近邊にて。やと唱ふ（澁谷瀬田谷等也）

岩窟 いはや ○鎌倉及上總にて。やぐらと呼ぶ

穴 あな ○東國にて。めどと云。【東雅】曰孔竅を呼てめどと云、あなめど又轉して「みづ」と云、針の穴を「みづ」といふが如き是也

四會 よつゝじ ○奥州津輕にて。十字字と呼（十字【説文】云衢也）信州にて四方の辻と云。越後にて。四ッ口といふ。同長岡にて。よつかどと云。下總にて。四ッ岐といふ

小路 こうぢ ○京都にて稱す。江戸にて。横丁と云（但式部小路・鍛小路・又浮世小路など呼有）大坂及伊勢松坂にて。小路と云。勢州山田にて。世古と云

○辻子 京にていふ。江戸大坂ともに。ろぢといふ

河岸 かし ○江戸にて。かしといふ（本町河岸、或は濱町がしなと云）大坂にて。はまといふ（濱の芝居などいふ）京にて。川ばたといふ

とも大社神領はみな神ありづきと稱す）

晦日 つごもり ○阿波の國にて。こもりといふ。奥津輕にては十二月小月なれば翌朝日を入れて終晦日として、正月二日を元日とす。是を津輕の私大ともいふ也

人 倫

父 ちち ○大和にて。あんのうと稱す。播磨邊より西國にて。てらと云。長崎にて。ちやんと云。肥前佐賀にて。別

當といふ。越前にて。のゝといふ。父を「て」と稱し「と」と呼ぶは諸國の通稱也【萬葉】及【宇治拾遺】等に「て」と見えたり。「と」とは【釋文】爹爹と書侍るもあれど「て」といひ「と」といふは、父の轉語なるへし。又上總にて祖母を崇めて「のゝ」と稱し、越前にて父を「のゝ」と呼は極老の剃髪せしなどを「のゝ」といひならはしたる物ならん、小兒に對して如來を如々と略語し、如々轉して「のゝ」となりたる物か。但し古代よりの詞なる歟しらす

母 はは ○西國にて。かくといふ。長崎にて。あひいと云（阿比なるべしといふ説あり）肥の佐賀にては。あうほうと云（阿母といふの轉語にや）出羽にて。だどといふ

山崎垂加翁云、俗人の母を稱して袋といふは胞胎の義に

よると云々。又母といひ「か」といふは、諸國の通稱歟。京にて兒童は。ハワサンと呼び、年長しては母者人と稱す。東國にては。かゝさんといふ【袖中抄】に、きり／＼すのなく聲つどりさせかゝはひろはん【註】かゝとは古きつゞれなどの事と也。しかれば下賤の者の妻女を「かゝ」と呼ばるは是より出たる歟。又「はゝ」と云詞轉して「かゝ」となりたる歟。父といひ母とよぶはもとより通稱にして、それより轉したる詞も國々多かるべし。たゞけやけき語のみをこゝに記す。以下准之。

兄 あに（嫡子也、俗に惣領といふ）○越後にて。あんにやさといふ。東國にて。せなといふ。出羽にて。あんこうといふ。奥・南部にて。あいなといふ。九州にて。ばほうといふ。備前にて。親かたといふ。土佐にて。おやがたちといふ（備前にていふ親かたをなし心か）西川氏云、ばほうと云は破茅なるべきか、或書の中に茅の始て土中に生したる物を破茅といふと見えたり云云。吾山熱案に、破茅の説も可ならん、しかはあれどばほうは梅朋の略ならん歟。梅は花の兄ともいへば梅の朋と云意なるべし。又曰兄を「せ」といひ、弟を「なせ」といひし事【日本紀】見へたり。又妹背といふ

は妹と背との事なるよし、東土にて「せな」といふも古代の遺風なるべし

姉 あね○九州にて。ばほうぢよといふ。上總房州にてなゝといふ（兄弟に限らず、目上の女を尊んで「なゝ」といふ）

夫 をつと○薩摩にて。との丈といふ（夫男天子など、歌書にをく出）

妻 つま○京にて他の妻を。お内義さんとよぶ。大坂にて。おゑさんとよぶ（お家さま也）江戸にて。かみさまといふ。甲斐にて。中居といふ（甲州の國風の哥に「甲金や三升外に四角箸切はふづくりをこれお中居とよめり」）播磨邊、又越後わたりにて。ごりよんと云（よめ御料などの轉語か）奥州南部、又は津輕にて。あつばといふ（吾が母といふの轉語なるべし、小兒の母に對していふ詞か）仙臺にて。おかたとといひ、又ごさまと呼は、たつとぶ詞なり。御は尊稱也御は女の通稱也。故に御をかさねて唱るにや。又仙臺にては媳婦を呼て。をむかざりといふ。上總にて。めこといふ（源氏に、めこのかほも見でと有、これは吾妻也）他の妻をば。をぢようと云（御女郎の略語か）伊勢に。やよといふ（下賤

の妻をいふと也）尾張にて。お家とよぶは、江戸にてお袋といふにあたる、同國にて。かみさまとよぶは、老女の稱也。對馬にて。をゆみといふ。肥・佐賀にて。をとも女郎といふ（おともとは手前の事をいふ、おといふ時はそこもとといふにひとし）又をかたといひ、女房内義などやうの詞は、通稱にして記にいとまあらず

小兒 をちぢ○京にて。いと稱す（いとをし、又いとけなしなどの下略なるべし）關東にて。ねんねといふ（やゝとよぶは諸國の通語也）信州にて。あかといふ（同國にて。ぴちとよぶは幼女なり）越後にて。ほづつこといふ（同國にて「にが」と云はみとりこの事也）奥羽にて。わらしといひ又ほこといふ（わらしは童男也）【和名】童わらは又振子わらはべ、注、童男女と有、今わらんへともいふ通稱也）長崎にて。さまたといふ（同所にて「さ」と云は小女の事也）奥・南部にて。末子（さいご）をよてこといふ。武藏下總にて。てこといふ。案に、奥羽にて。ほこといふ詞は古代の遺語なるべし。東

武にて。もをほこと云。「一度をほこなと云詞有。是も小兒を「ほこ」といふ意也。又「わこ」といふ詞有。上古「わけ」といひし詞轉して「わこ」といふ【古語拾遺】男兒をワコと

よみたり。俗に若子の字を用るはもと是弱の字を用ゆへき事なれと、其字又讀て「よはし」といふを嫌ひて若の字を借用ひし也といへり【萬葉】かつしかのまゝのてこなと詠せしは、かの邊にてすへの子を「てご」といひぬれば、てごの女といへる事なるにや未詳

息女 むすめ○京畿にて。ごれうにんといふ。薩摩にて。も。これうといふ。中國及奥州にて。おごうといふ（御とは女の稱也）奥の南部にて。をこれんといふ。越後・高岡、長岡にて。をこれんといふは他の妻女を云也。備前などもをなし

乳母 めのと（俗にうばといふ）○畿内の小兒は。らいと云。江戸の小兒は。をちゝといふ。尾張邊又陸奥にて。まゝといふ（古き詞にて源氏物語にも見えたり）（南留別志）に云、あことはうばの事也。上總國一宮といふ所は、あこなし御曹子の城なりと、千葉介が乳母にうませたる子也「なす」とはうむといふ事也。又

うつくしやべににも似たり梅花あこがはほにもつけたくぞある

菅家のいときなき時よみ給ふなといふとあり。今案に、

祖來翁の説明らかなり。然とも小兒をも「あこ」といひしにや。日本紀に見えたり【職人盡歌合】機織女の詞に、あこやうくだもてこよと有。是は小兒をさして「あこ」といひしやうに聞えたり。今も東國の邊土にて「あこ」といひ京畿にて「わこ」といふ類皆通音にて同じ意ならんか。又「須兒」といふは、賤きものをいひて、小兒にてはあらず。俊頼朝臣の歌に

「山里はすこが竹垣さきはやす萩をみなへしこきませにけり

霧 やもめ（俗に後家、後室ともいふ）○京にて。やまめと云。尾州にて。やごめといふ（これらは轉訛してかくいふものか）遠江にて。つぐめといふ

妾 おもひもの○京師にて。てかけとよぶ。東國にて。めかけと云。西國及尾州にて。ごひと云（御妃にや）。奥、南部にて。おなめといふ

遊女 うかれめ○畿内にて。をやま、又けいせいと云。江戸にては。女郎といふ（江戸にてはをやまと云名は戯場にのみ有）伊勢、山田にて。艶女といふ。同國鳥羽にて。はしりがねと云（鳥羽は湊成によりて、はしるとは船人の祝詞な

の縁よりいひならはしたる物か【拾遺集】

へ中々にいひはなたてしななる木曾路の橋のかけたるやなそ 源頼光

客

妓字

かゝる歌の心ばへにもかよふなるべし。また古は軍營へも妓を迎へし事有。妓者待、軍士無妻者、と見え侍る。妓は十人にすぐれたる奴を見立て妓に仕立る故に、奴の字の上に十字を冠らしめて妓字とすともみえたり。又花柳に入の客を呼て大盡といふを、大神になぞらへてみな神樂の縁語をつけたる物か。末社・牽頭・御幣持・ヲヒヤル（笛の音によるか）神なとよぶ類也。妓有と云物有。若いものといふ。ぎうは牛にて牛は鼻にてつかふ也。又ぎうは花にてつかふ也（花は客の賜物也）又は遊君を花と見て花に遣はるゝといふ意にもあらんか。既に忘八屋の妻を花車といふ。花をまはすといふ意也。大坂の新町はいにしへの神崎を此地に引たる遊所也。遊女の詞一格有。又京都にて西島訛といふは、島原訛と云事也。たとへば祇園町にて「なさるか」なはらんかなどいふを、島原にては「なますか」「なませ」などいふ。江戸吉原にて「よくありんす」といふを、京にては「よいわいなあ」といふ。吉原にて「すき

るべし）近江にて。そぶつといふ。出羽秋田にて。ねもちといふ。奥州にて。をしやくといふ（國によりて遊女のなき所も有也。他郷の遊女をさしてもいふなるべし）奥州松前にて。やかんといふ。越前敦賀にて。かんひやうと云（夕がほをさらすといふ心なり）又越前越後の海邊に浮身と云物有、是は旅商人此所に逗留の内、女をまうけて夫婦の如く。此家を浮身宿と云

へ海に降る雪や戀しき浮身宿 はせを

今按に、傾城の名は李延年か詩の意をとりて倭俗遊女の稱とはなせり。和漢に遊女の名有事久し【詩】漢有遊女云々【東鑑】清水冠者を遊女の別當とせられし事を載たり。又遊女の異名を、し。所謂「なかれめ」「うかれめ」「うかれ妻」「海士の子」「たはれめ」「ひとよ妻」等也。古歌に詠せし地名は美濃の野上の里、青墓の里、近江のかゝみ山、野路、小野のしの原、尾張にはかやつ原、山城に大井川、小倉山の麓など詠せし也。川竹のなかれの身なといへるは、或は備後、鞆の津、津ノ國、神崎より出て揚屋、新艘、水揚、引舟、これらの品類、悉く水邊によるの名なりとかや。淫語にかけるといふ詞有。これ又水邊によせて、橋

んしんよといふを、京にては「すかんわいなあ」と云。如此の妖言は、其ひとつ二つをあけて省て記さず。又いはく、遊女は老去まで眉を描しにや【金葉集】へさりともとかく眉墨のいたつらに心ほそくも老にけるかな

遊女を君といひし事は【彌世繼】云、とをとうみの國はしもとの宿につきたるに、例の遊女えもいはすさうぞきてまいれり、頼朝卿うちほゝゑみて

へはしもとの君に何をかわたすべき、と有ければ、梶原平三景時下の句つかうまつりしことなと有。爰に略す○傀儡は美濃國野上、里なと其外國々の驛舎に有て、今云人形なとまはして旅客をなくさめし遊女也。今時飯賣、又飯盛などいふも彼傀儡の類にや

○遊客の曲廊に至るを京都にて。駈と云。江戸にて。そゝりと云。長崎にて。驕ふりといふ○京大阪にて茶屋とよぶは、芝居の茶屋又は水茶屋の事を云。遊里に有茶屋はみな揚屋といふ。江戸にては吉原中、町其外残らす茶屋と呼なり

○京大坂の旅人宿の下女を。はすはいふ。東海道筋に

て。をじやれといふ。越後にて。しやくといふ(すこしの流をくむといふこゝろなり)。相州小田原邊にて。ばくといふ(遊女をよねといへば、米に對したる麥なり)。勢州にて。出女房といふ。又同國及美濃にて。もか共云。遠州にて。やぞうといふ。信州輕井澤にて。をしやらくといふ。出女は驛舎の婢也。【風俗文選】に出女、説有、今こゝに贅せず。旅籠屋といふも古くいひつたへたり【萬葉】八多籠良と書【和名】籠飼馬籠也と有。又西國及東國の童謡に、旅籠はいくら、十三はたこといふ事あり。いにしへ鳥羽街道にて十三錢の旅籠ありし事なりとぞ

夜發 やほち 【和名】○京大坂にて。そうかといふ(いにしへ辻君立君などいへるものゝたくひか、大坂にて濱君など古くいえり)。江戸にて。よたかといふ。紀州にて。幻妻といふ。長崎にて。はいはちと云。四國にて。けんたんといふ(間短と書か)。大坂及尾州にて。人の妻をけんさいと云。是は罵る詞に用ゆと見えたり。【春秋左氏傳】昭八年有仍氏、女嬖黑 而光 可以鑑名 曰 玄妻。

濃酌奴 ろくしやく ○京都にて。造酒屋の下部を。ろくしやくと云(又乗物を昇ものをもいふ) 東國にては。造酒家の

と古きものにしるし置けり。是等の事の如きも、世には異國のことなど附會していふ説ありと見えたりと有

(1) よつばら

○酒狂人を東國にて。なまゑひ、又よつばらひといふ。大坂にて。よたんほといふ。遠江にて。泥ほうといふ(酔て泥の如しといへるこゝろにや)。薩摩にて。醉食ひといふ。肥前唐津にて。さんてつまじらと云

(2) たまかり

奴 しもへ(俗に下部と云、僕をなし) ○上總にて。けご(けごは古きことば也)越後にて。なごといふ。備前にて。できといふ(できは東國に云やろうをなし)。京にて。久三(一季奉公人をいふ、江戸にてはわたりものといふ)

陰陽師 をんみやうじ (をんやうじと唱ふ。然ともをんみやうじとよむ也) ○備州にて。かんばらといふ(尾州にて寒中に寒の御祈禱寒はらひといふて、鈴をふりてよびありく有、此たくひにや) 京にて。しやうもんしと云(唱門師は、人の門にたちて金鼓を鳴らし、米錢を乞ふ僧の事也。しやうもんしとよぶは心得違なり)

粹巫 あづさみこ ○東國にて。降巫 又口よせといふ。播摩にて。たきみこと云。中國にて。なをしと云 ○京にて。大原神子といふを、東國にて。かまはらひといふ

桶の大きいなる物をいひ、又乗物をかくものをいふ

或云、主人たる人の心を京間六尺五寸間にたとへ、下男の心を田舎の六尺間にたとへて、下部たる物を六尺とはいふ也。案に、酒家の下男をろくしやくと名くるは、酒を濃酒を酌を役となすものなれば、濃酌といふ意を用へしか。又、乗物を昇ものをろくしやくとよぶは【史】始皇本紀、秦、水徳を以て王たり、故に六の數を用ゆ。輿は六尺なり、と見えたり。しかれば輿の六尺の數よりろくしやくの名も出たるにや。又かの乗物昇く者はきはめて長高きものなるが故にかくなつたる歟

○酒製事を司とるものをとうじと云は、一説にいにしへ藤次郎と云ものよく酒をつくる、是とうじといふは爰にはじまるといふ。又一説に頭兒と書て酒家のかしらおとこといふの儀なりと。又異國にては杜康よりはじまりたれば杜氏なりといふ説有。【東雅】むかし酒造司に大刀自・小刀自・次刀自とて三つの酒造る壺有ける。其大刀自は酒三石ばかり入し物也。後に酒つくる人をも刀自といひしは、古よりいひつぎし言葉なるが、彼酒造司の刀自は三條院の御時大風に司たふれし時に、自うちわりてけり

氏子 うちこ ○山城紫野にて今宮の氏子を。御幣子といふ

盜賊 めすひと ○美作邊及東海道にて。じらといふ(中國四國ともにまれにじらといふ、但ししらなみの略語にや。白波ノ故事は【後漢書】出) 武藏及上總下總邊にて。せれうともいふ。近衛龍山公薩摩の方言にて詠給ふ歌に

ぬすとでゝおらぶにはたとたまがりてくわくさつからにせゝくりをする

○須利 東國にていふ(すりはぬすびとの梵語也とぞ。又【三才圖會】一説有、略々) 江戸にて。きんちやくきりと云上總にて。さがらといふ。攝州にて。ひるとんびといふ(とんびは蕨也。ものをさらふと云心とかや。東國にてまれゝにかくもいふ也)。

○かたり 東海道及中國にて。ごまのはいといふ。日光道中にて。道中どつこと云。南部にて。よろくと云

乞人 ものもらい ○江戸にて。乞食といふ【法華經】清淨乞食又乞食頭陀、行これば僧を云) 長崎にて。ばん藏又。山ばん。中國及四國又奥羽より越後越中邊にて。はいたうといふ。【庭訓抄】陪堂飯米を副る僧なりと有。又筑紫にて。

こうといふ。此國にてはこじきといふものは癩病人なり。江戸にていふ菰かぶりといふものをへいたうと云。上總にて。へいたう、是は乞食也。下總にて。氣らくといふ。肥、唐津又は薩摩日向にて。ぜんもんといふ。京にて。ばんたといひ。又。ひでんじといふ。大坂にて。垣外といふ

今按に、悲田寺は京都鴨川西の邊に有。【拾芥抄】云、聖武天皇施藥、悲田の二寺を建て、施藥院は大人の病を療し悲田寺は小兒及乞食の病を治す。後終に乞食の寓と成よし見えたり。今におるて癩病人の親族に捨らるゝもの般若坂に集り、往來の人に物を乞ふ。【續日本紀】云、武州入間郡の界に悲田所を置と見えたり。然らば京師のみに限らず、所々に在し事にや。又聖德太子悲田院を建て郭内に居らしむ、魁首を長吏として郭外のものを非人とす。故に今も東國にて穢多を呼て長吏といふはかゝる遺風にや。或説に、癩病人をかつたいといふは、悲田院と書て悲田院より起たる名也といふ。是は鑿説也。【證治要訣】害大と有。又關西に物よしといふもの此たぐひ也とぞ。また乞食は乞食の事にて別也、混すべからず。【土佐日記】【伊勢物語】等にも見へたり。又増賀聖のいせよ

り裸になりて、かたいだにこそよけれ、と大路を諷て歸られしなど今いふ乞食の事也。【發心集】(増賀傳云)名聞こそくるしけれ乞食の身こそたのしかりけり。此事徒然草にも見ゆ

屠兒 みた(和名ゑとり)○近江にて。くほといふ。備前にて。よろと云。薩摩にて。八外といふ。東國にて。かはたと云。上總下總にて。かはほうといふ。越後にて。ぶんじと云。同國長岡にて。じなみといふ。奥羽にて。かんほうと云(革坊なるべし)

髻 すざしろ(みどりこのうふ髪、百會のうしろにのこりたるをいふ)○江戸にて。けしばうすといふ。上總にて。さらけといふ。相模にて。なかやまといふ

韃靼の人物は皆かくの如し。江戸深川に住しその女は勢州山田の産にして渡會氏也。老後に髪を剃といへとも、神家の女なれば僧形を忌て嬰兒のごとくに髪を残して剃たり。風雅の鐵心に男女の情をわすれたりと常に語られしとぞ。其貞賞すべし

○髪結びめを京にて。わけといふ。江戸にて。まけといふ。いせにて。ゑびと云(同國にてゑびをりと云を江戸

つべといふ。伊豫にて。つべといふ

陰 へへ(○奥羽及越路又尾張邊にて。べとといふ(關西關東ともにべとといふは小兒の衣服の事なり)上總下總にて。そゝといふ。此外男女の陰名國々異名多し、略す。

(江戸にて物のそゝけたつなどいふ詞有、和泉及遠江邊にてはほづけたつと云。江戸にてはさはいはれぬことばなり)

端 こむら○東國にて。ふくらばぎといふ。信濃にて。たはらつばきと云。中國にて。ひるますほといふ。讃岐にて。すほきといふ。伊豫にて。ふくらと云

螺 くらぶし(○長崎にて。とりのこぶしといふ。播磨にて。つくるぶしと云。遠江にて。うちめぬき。そとめぬきと云。三河にて。くるこぶしと云。仙臺にて。たゝみいほと云。上總にて。うちいしなごそとでいしなごといふ

跟 きびすくびす ○關西にて。きびすと云。關東にて。かゝと云。安房にて。平三郎と云。遠江にて。あぐつと云。信州にて。あぐつと云。陸奥及越後にて。あぐといふ。九州にて。あどゝ云

物類稱呼卷之一終

(1) なと
(2) ぼゝけた

眉 まゆ ○關西にて。まゆげといふ。東國にて。まみあといふ。奥州にて。こうのけといふ。常陸及上總にて。やまといふ

(3) うちめ
ぬき
とめぬき

腹 はら ○畿内近國及中國四國にて。ほてといふ。東國にては腹とのみ唱へてほてとはいはず。然ともほてくろし又ほてつばらなどいふ詞有。ほてくろしと云は【枕双子】腹黒とあるにをなじ。又東國で臍黒といふ詞をなし心ばえなり

(4) そとてい
しなご

案に、いにしへ相撲取をばほてと云ける也。【三代實錄】取相撲云と有。今いふ關取といふものは也。腹をほてと云も、すまひとりを取といふより出たる名にや、未詳

膝 ひざ ○豊州にて。つづしといふ。中國にては。ひざのさらといふ。薩摩にて。ひざつづしと云。奥州南部にて。ひざかぶと云。越後にて。ぶしやかぶといふ

物類稱呼卷之二

動物

馬 むま ○下總國にては。まあとよぶ。同國さし猿嶋郡及び下野國にては。まあめといふ。其外此國にて。蚊め、とんほめなど。下に「め」の字を付てよぶ。是は今つばくらめ、はたをりむしなどいふ物を、いにしへつばくらめ、はたをりめ、といひしたくひにて、古代の語の遺たるものなるへし。牡馬を伊勢國にて。まる馬といふ。牝馬を奥州南部にて。かけだといふ。西國及四國又は上總にて。だまとも。だ馬ともいふ。駝だは和名、におひむま、今いふ小荷駄なり。又諸國にて。さふやくと云。其意は軍馬に用ひず、もろくの雜役につかふ故也

牛 うし ○特牛を畿内及び中國西國ともに。こつといと云。東國には。こてといふ。遠江國にては。あこと云。○犢を四國にて。べつの子といふ。中國東國ともに。べこといふ。又こつていといひ。こてといふは【和名】こことひの誤なり。又牝牛は諸國ともに、あめうじと呼なり

野猪 いのしし ○牡を四國にて。うのをとよぶ。牝を。か

るいといふ。兒を江戸にて。瓜ほうといふ。畿内にて。こぶりことよぶ

狐 きつね ○關西にて晝はきつね。夜はよるののとと呼ふ。西國にては。よるのひとといふ。又關西にてすべて。けつねとよぶ也。又歌には「きつ」とも詠し【詩經】には、くつねと訓たり。又東國にては晝はきつね。夜は。とうかと呼。常陸の國にては白狐をとうかといふ。是は世俗、きつねを稻荷の神使なりといふ故に、稻荷の二字を音にとなへて「稻荷」と稱するなるべし。又晝夜とかはりて物の名をよびわくる事あり。予思ふに婦人兒女のものにをそれ、又は物いまひする人、かゝる迂遠の説を設たるなるべし。或は蛇の事を夜は「長虫」といひ、又灯心を「やせおと」と云。灯心を調る事をば「やとふ」と云。又日くれて酢を買ふ事を思む。若もとむれば「酢」とは呼す、「あまり」といふ。此ことは【職人盡歌合】にも見へたり。又京都に「ひめのり」といふ物を晝は「のり」といひ、夜は「ひめのり」とよぶ也

猫 ねこ ○上總の國にて。山ねこと云（これは家に飼ざるねこなり）關西東武ともに。のらねことよぶ。東國にて。ぬすびとねこ。いたりねこともいふ

夫木

へまくす原下はひありくのら猫のなづけかたきは妹かこゝろか 仲正

この歌人家にやしなはざる猫を詠ざるなり。又飼猫を東國にて。とらと云。こまといひ。かなと名づく

(1) 明る夜の

今按に、猫を「とら」とよぶは其形虎ににたる故に「とら」となづくる成べし。【和名】ねこま、下略して「ね」といふ。又「こま」とは「ねこま」の上略なり。「かな」といふ事はむかしむさしの國金澤の文庫に、唐より書籍をとりよせて納めしに、船中の鼠ふせぎにねこを乗て来る、其猫を金澤の唐ねこと稱す。金澤を略して「かな」とぞ云ならはしける。【鎌倉志】に云、金澤文庫の舊跡は稱名寺の境内阿彌陀院のうしろの切通、その前の昌文庫の跡也。北條越後守平顯時このところに文庫を建て和漢の群書を納め。儒書には黒印、佛書には朱印を押と有。又【鎌倉大草紙】に武州金澤の學校は北條九代繁昌のむかし學問ありし舊跡なり、と見へたり。今も藤澤の驛わたりにて猫兒を囁ふに、其人何所猫にてござると問へば、猫のぬしは金澤猫なり、と答るを常語とす

花山院御製歌に

夫木

敷しまややまとにはあらぬ唐猫を君か爲にと求め出たり

又尾のみじかきを土佐國にては。かぶねこと稱す。關西にては。牛房と呼ふ。東國にては。牛房尻といふ。【東鑑】五分尻とあり

鼠 ねずみ ○關西にて。よめ又よめが君といふ。上野にて。夜のもの又よめ又おふく又むすめなといふ。東國にもよめとよぶ所多し。遠江國には年始にばかり「よめ」とよぶ其角か發句に

明る夜もほのかにうれしよめがきみ

嵯峨住去來が日、除夜より元朝かけて、鼠の事を「嫁か君」と云にや、本説はしらすとぞ。野坡か云、娘が君は春氣にてねずみの事なり。今按に、年の始には萬の事祝詞を述侍る物にしあれば寢起と云へる詞を忌憚ていねつむいねあぐるなど唱ふるたぐひ數多有。鼠も寢のひびきはべれば、嫁か君とよぶにてやあらん。又春氣といふ時は春三月のことなれはいかゞ有べきか。尙説有。こゝに略す

鼠 ねずみ ○京にて。うごろもち、東武にて。むぐ

らもち。西國にて。もぐら、中國にて。むぐらもち、四國にて。を。ごらもち、遠江にて。いぐらもち、大和及伊賀伊勢にて。を。ごらもち、越後にて。土龍といふ。

蝙蝠 かふもり(いにしへに、かはほりといひしなり)○畿内にて。蚊くひ鳥とも云。近江にて。蚊鳥とよぶ【新撰六帖】に衣笠内大臣

日くるれば軒に飛かふかはほりの扇の風もすゞしかりけり

又、【枕草子】に過にしかたこひしきもの、こそのかはほりと書るは扇の事なり

蠶鼠 むさゝび ○畿内にて。野食といふ。東國にて。もぐはと呼ふ。西國にて。そばをしきといふ。薩摩にて。もまといふ

もまとは【和名】もみの轉したるなるへし。古歌に大和國春日山高圓、津國三國山などよみあはせたり。東國にては日光山にすめり。其鳴聲人の呼がことし。常に梢に穴居して夜高きより飛んで人の面をおほふ。ひきより高き上ることあたはず

春日山夜ふかき杉のこすえよりあまた落くるむさ

雉鳩 みさぎ ○播州にて。みさぎ、伊豆駿河邊にて。びさぎ、薩摩國にて。びしやといふ

びさぎ、びしや、ともに、みさぎのあやまりなり

刀鴨 こがも ○越後にて。あじと云。奥州にて。たかぶと云。關西關東にて。たかべといふ。則和名なり

鷗鷗 かいつぶり (是和歌に詠する「にほとり」也。俗に「いよめ」といふ) ○畿内及中國東武共に。かいつぶりといふ。上總にて。みほといふ。長崎にて。鳩といふ。土佐國にて。いちづぶり 又いよめといふ。遠州にて。めうちんといふ。東國にて。むぐつ鳥、武の神奈川にて。でつてうむぐつてうといふ。上州。かはぐるまといふ。信州にて。めうないと云。駿河にて。ひやうたんごといふ。仙臺にて。かはきじといふ

白石翁云、「にほ」とは湖をいひぬれば、「にほ」とは湖中にあるの義にやあるへし、又「かいつぶり」とは其水に没する音をかたどりいひしと見えたり。又俳諧師支考がいはいはの海とは鳩鳥のすむ程のさざ波なればにほの海と云。今按に「鳩」は「にほひ鳥」の意也。にほの海とは、うらくと日の出るに海のにほへるなり。にほふとは香のことにあ

ゝひのこゑ

川童 がはたらう ○畿内及九州にて。がはたらう 又川のとの 又川童とよぶ(九州に多し、わきて筑後の柳川尤多し)周防及石見又四國にて。えんこうといふ

土佐國の土民は。ぐはたらう 又かだらう 又えんこうともいふ。其手の肘よく左右に通ひぬけて滑なり。猿猴に似たるが故に、河太郎もえんこうといふ

東國に。かつばと云(川わつばのちよみたる語也。小兒をしかるに。もかつばともいふ)。越中に。てがはらと云。伊勢の白子にて。かはら小僧といふ

其かたち、四五歳ばかりのわらはのごとく、かしらの毛赤うして頂に凹なるさら有。水をたくはふる時は力なはだつよし。性相撲を好み、人をして水中に引入んとす。或は性なして婦女を姦淫す。其わさはひを避るには、猿を飼にしかずと云。又九州にて川涉の人詠吟する歌に

いにしへのやくそくせしをわするなよ川だち男氏は皆原

右の歌を吟詠すれば害をのがる、よいひつたふ

らず、艶色のこと也。光源君のことを、桐壺の巻に此御にほひにはといえり。又法橋昌長翁のいはく、研師又を研上てそれに色を付るをにほひをつけるといふ。則鳩の脂を引となり。又にはふ霞なども日に映するをいふなり

鷗 かもめ ○中國に。うはみと稱す。肥前にて。ねことり 又大雁といふ(沖にすむ鷗は大なるもの也)。土佐國にて。かごめ共いふ。上總及武の品川にて。うみねこ本牧にて。濱ねことも呼ぶ。近江にて。苗代鳥 又ねこさぎといふ

鷗の鳴く聲猫のなかに似たり。故に異名とす。【萬葉集】に加萬目 鴨妻と書り。鴨妻とは鴨のことくにして小しきなるをいひしなるへし。一説に、沖にあるをかもめ、磯に集をいそどり、河に 詠合するを都鳥といふと、直龍翁の説なり。未詳

魚狗 かはせみ 一名少微 ○中國に。すどり、京都及東武にて。かはせみ、武州及下野にて。そな、奥州仙臺にて。すなむぐり、出羽國にて。るり、下總にて。じよな、甲斐にて。そびな、駿河國沼津邊にて。ぬびとり、加州にて。むぐり、美作及備前にて。しよに、伊勢及出雲肥州四國にて。しやうび(或はしやうびん共いふ) 薩摩國にて。ひすいと稱す

(1) ふふ

「かはせみ」といえるは深山をびと云物あるに對しての名なり。薩州に深山ひすいとよぶ。東國にて深山しやうびん共、或は所によりては水乞鳥と云。又清盛など、異名す。其故は此鳥飢餓して水を好によりて名付と云。關西にて雨乞鳥と稱するも此鳥なるへし【舊事紀古事紀・日本紀】ともに翠鳥と有

鵲

かさゝぎ○西國に有。唐がらすと云。又。高麗鳥と云。五畿内及東國になし。鳩より小。羽に黑白有。天武帝、御時新羅より鵲一隻を獻す

信天翁

らい○九州にて。らいと云。土佐國にて。とうくらうと呼。丹後にて。あほう鳥と云。長門國にては。沖のたゆふと云（此鳥うす青く白し、髯長く脚赤し、海邊にあり）加賀國白山に鶴と云鳥有、同名異物也

哉

秋鷄 くるな○仙臺にて。なます鳥と呼（其鳴聲、戸をたたくに似たり。因てたたく水鷄と歌に詠す）

鶺鴒

かやくどり○東國にて。ほとしぎと稱す。駿河にて。かんしん鳥と呼

(2) つくみ

此鳥を取。東國にて鳥馬をまはすと云。又諺に「けら腹たてば、つぐみよろこぶ」といえるもかゝる事を云にや。京師にて除夜毎に是を炙り食を祝例とす

繡眼兒

めじろ○薩摩にて。花吸と云。上總にて。をかまの鳥と云

布穀鳥

つゝどり（いにしへふゝどり）○伊豆駿河邊にて。すみだ鳥と云（土人のいはく此鳥鳴頃田の水澄とぞ）

蚊母鳥

かつこうとり（俗かんこ鳥共いふ）○甲州にて。豆うへどりと云。東國にて。豆まき鳥ともいふ。

【大和本艸】にいはく、俗にかんこ鳥を杜鵑の雌也と云。もの遠からず【本朝食鑑】に云、ほとゝぎす樹に上つて鳴く時、其かたはらの樹邊に必聲なきほとゝぎす有、是則むしくひ鳥也。故に世俗ほとゝぎすの雌也とす。

今按に、此説による時は、ほとゝぎすの雌は虫喰鳥成へし。かつこ鳥、をそらくは杜鵑の雌にてはあるへからず。杜鵑は鶯の巢をかりて子を生し、かつこ鳥は頬白鳥の巢に子をなすものなり

杜鵑 ほとゝぎす○伊豫國松山邊にて。こつて鳥と稱す。是子規一名を雀代鳥といふ。「くつて」「こつて」轉したる

へく霜にかれはてなてかやくきのいかて尾花の末に鳴らん

【月令】に三月田鼠化して爲鶯と有、是なり

萬雀 あをしと○遠江にて。青ちゝんと云。東國及四國にて。あをしと云。美作にて。青じやうと云（鶯に似て青色なるものなり）

「青しと」を略語して「あをし」と云。鶯は山林に在て原野にいでず。「青しと」は藪林にすむものなり

畫眉鳥

ほうじろ○遠州にて。赤ちゝんと云

其聲「ちゝり」といふ物を片鈴と名付、又ちりゝころゝゝりと云か如のものを諸鈴と云。此鳥巧に聲をなす、故に東國にては「一筆令啓上候」と鳴くと云。遠州にては「つんと五粒貳朱まけた」と鳴くと云。薩州にては「をらがと」は、三八二十四と轉と云。歐陽公詩「百轉千聲隨」意移んと有。異域同談なり

百舌鳥

つぐみ○五畿内の俗。つむぎと云。關東にて。てうまと呼。加賀にて。かごめと云。遠江にて。つぎめと云。

仙臺にて。つぐと云

【本朝食鑑】鶺鴒【釋名】馬鳥鳥馬也。螻蛄をつなぎ置て

詞なるべし

燕 つばめ○但馬國にて。ひいごとと云。播州にて。ひごと

呼

【和名】に【爾雅集記】を引て「つばくらめ」と註せり。

今俗に「つばめ」といひ、又「つばくら」と云は、後人其語をはぶきて呼也。片田舎の人は「つば」とばかりも呼。又歌には「つばくらめ」とも「つばめ」とも詠す。「つばくら」とは詠格なし。俳諧には「つばくら」共作例有。又「つばくらめ」とは、土くらひの和訓也と篤信翁の説なり。又胡燕、越燕、漢燕等有。胡燕は「やまつばめ」と云。越燕よりは稍大にして山上岩穴にすむ。巢は横に長く脇の方より出入す。越燕は巢の上より出入す。但馬國村岡にて「妙見ひいごと」と云は胡燕なるべし

斑鳩 つちくればと（古俗の稱也）○東國にて。きじばと稱す。西國にて與惣次ばと呼（關西にて、としよりこひと鳴くといへり。東國にて、てゝつぼう、かゝぼうくと鳴くといふ）

木啄鳥 てらつゝき（又けらつゝきといふ）○江戸にて。きつゝきと稱す。又東國にて。をけらと呼。下總にて。番匠

鳥と云

鶉 ふくろふ ○常陸國にて。ねこ鳥と稱す(この鳥よく鼠を取によりてかくなづくるにや)上總にて。よこうと呼。伊勢白子にて。鳥追といふ

【舉白集】に「のりすりおけ」と鳴く、をのれが毛衣の料にやと有。又俗に「夜明なば巢つくらう」と鳴とも。又片田舎の人は「五郎七郎うこう」と鳴く共、薩摩國の人は「此月とつくわう」となくといへり

鵲 みのさとい(上古さとい) ○奥州にて。みそぬすみ、仙臺にて。みそくより、下野にて。みそつぐと呼。西國にて。みそつ鳥と云

或説に、此鳥溝の邊に三歳棲て長す。故にみぞさんさいと名付るを、みそさといといふとぞ。今按に、「みそ」は「溝なり」といひに「さ」といひし名の轉したる也。「さ」とはさゝやかなる意、小き事也。三歳といへる義にはあらざるべし。又鵲と云鳥にはもろくの小鳥怖れて飛去る。鵲も鷹の屬也といふ。それが中にみそさといは會て怖れず。却て蜘蛛其外の虫を捕て鵲にあたふ。其時悦ふ態にて食ふ。予正に是を見

鵲 せきれい(和名にはくなくふり、日本紀私記)とつぎおし(へどり) ○播磨にて。かはらすめと云。西國及四國又は奥州にては。いしたゝきと呼。伊勢白子にて。はますめと云。遠江及上總常陸にて。まきき鳥と云。東國にて。せきれいと云。薩摩にては青黄色なるものをいしたゝきと云。黑白なるものをせきれいと云(舊説には、にはたゝきとも、いしたゝきとも、いなおふせ鳥とも見えたり) 割薑鳥 よしはらすめ ○畿内及勢州邊。よしはら雀と云

「よしはら雀」といふは葭割雀なり。葭をわりて其中の虫を喰ふ、故に此名有、と石川丈山子の説なり

出雲及西國四國にては。ぎようくしと呼(土佐の國にては。むぎからし、又をけらなどともよぶ也)加賀にて。よし鳥と云。播州にて。けしと云。仙臺にて。からくしと云。東國にて。よしきりといふ

「あしをよし」といへるは、物忌するものゝ云なるべし、と徂徠翁の説なり。此「よしはら雀」の難波のよしあしも分たず、鳴聲のかまびすしきはいかにそや。よしきりの浮世もよしやあしの上 吾山

鯉 こい ○武藏國にて鯉魚の小なるを。ぶんしろと稱す是は文正といふをあやまりて呼也。或時予が僕、の、鯉を庖丁せんとて筒井のもとへもて行て井の中へ落しぬと、いひはべりければ、狂歌よみける

つゝいづ井筒にこひを落しけりむかし男も今の男も 吾山

鱒 たなご ○關西にて。たなごと云。關東にて。にがぶなと呼。つくしにて。しづなと云(たなごは鮒の類也。又海に鱒魚有、同名異物なり)

鱒 なよし(此魚の惣名也。世にほらと云。日本紀に云口女これなり) ○極小なる物を江都にて。をほこと云(東國に小兒をおほこと云。故に此魚の小なる物を云)加賀にて。ちよと云。土佐にて。いきなごと云(土州にてはいきなごを塩幸とす、銀びしことよぶ)小なるものを、關西關東ともに「いな」と呼(いなは稻の莖くされて魚と成といへり。然る時は「いな」とは稻魚なるべし。いにしへは魚を魚と稱せしなり) ○洲走、遠州にて。はしりと唱ふ

漁人簀の四方に網を張て是をとるを簀引と云。因て簀走の名有。一説に、此魚河と海との潮境を往來する頃を簀

して洲走の名有とぞ。江戸にては六月十五日より洲走と呼。十四日迄を「いな」と云也。九月にいたり泥味なく、脂多くして、いよゝ味ひ美也。色又さらし洗ふたるが如し。此時を畿内にて。こさらし江鮒と稱す。泉州堺の名産なり

なよし。ほら。伊勢。こい。長崎に。まぐちと云。勢州及尾張にて。めうぎちと云

「いせぎ」とは勢州鳥羽の海濱にて多く是をとり、又鯉に類するをもつて「いせ鯉」と云、關西の稱なり。東國には「ほら」とのみ呼也。又「まぐち」とは上古「くちめ」といひし詞の遺りたる也。「めうぎち」とは名吉の音義を用たる也

棘鱒 たひ ○豊前にて。へいけと稱す。蟠龍子、曰、鯛をへいけと云は平魚なるべし。【延喜式】に平魚。

今按に、東武にて鱒鯛といふ物を、肥前唐津などにては「へいけ」と呼、又土佐の海に「うだひ」と云。其子をへうと云有。是も平魚の轉語なるべし

櫻鯛(堺鑑に櫻鯛、泉州堺の名産なるよし見えたり。東武にては櫻の花盛の頃此名有)。麥鯛、中國四國ともに四

月出る鯛を云。前の魚、津の國にて稱す（攝州西宮社前の海上にとる物を前の魚と呼。東武にて江戸前うなぎと云が如し）。甘鯛、畿内西國東武共に「あまたひ」と呼。出雲にて「こびるといふ。關東にて奥津鯛と呼（駿州奥津にて多く是をとる。鱗に富士のかたち有と云つたふ）

鳥類魚 くらだひ○東武にて。くらだひと云、畿内及中國九州四國ともに「ちねだひ」と呼。此魚、泉州茅渚浦より多、出るゆへ「ちね」と號す。但し「ちね」と「彪魚」と大に同して小く別也。然とも今混して名を呼。又小成物を「かいす」と稱す。泉州貝津邊にて是をとる、因て名とす。

江戸にては芝浦に多くあり

比目魚 きれい、ひらめ○畿内西國ともに。きれいと稱す。江戸にては大なる物をひらめ、小なるものを。きれいと呼。然とも類同して種異也。常陸上總下總の浦々にて大なるを鱈といひ、小なるを平目といふ。江戸の魚市に至る時は則ち名を變ず。又ある漁子此魚兩種相偶して洋中を遊ぶ、頭をならぶる時は左右の違ひ有物なりと云へり。貝原翁はきれいといふはかたわれ魚の略なりと云えり

笠子魚 かさこ○奥州にて。がらと云（かさこ藻うをのたぐひなり）

伊佐木 いさき○奥州にて。奥鱈といふ

鮎魚女 あいなめ○奥州にて。ねうをといひ。又しんじよと云。同國南部にてはあぶらめと云。佐渡にて。しやうと云。駿州にて。べろと云

【本朝食鑑】に形、粗鮎に似たり。故に名づく。「め」と稱してもあめの鮎にはあらず。又【日本紀】「萬葉」等に魚を、など訓ず。今按に、尾張國又遠州邊の所在にて川魚を水魚と云。又江戸に云納屋も魚屋也。肴と云も酒魚なり。また薩摩國にては魚肆を「なや町」と云も是なり。奥州の方言に「ねうを」と云「しんじよ」といふは、「あいなめ」といふを愛す女と云意にて「寝うを」といひ、又「寝所」と云なるべし。又「べろ」といえるは東國片鄙の小兒舌のこととをいふ也。四國にては舌を「べろ」と呼もの稀に有也。されば「あいなめ」と云を「なめる」といえるこゝろにて、駿州には「べろ」と名づくる鰻「なめる」とは關東にて云、畿内にて「ねぶる」と云におなじ

保字保宇 ほうく／＼○佐渡にて。きみうをと云。薩摩に

越後にては小なる物を「こつべら」と呼（こびらめと云の誤にや）佐渡にて大なる物をさかむかひと云。江戸にて云霜月びらめを、越後の糸魚川にて。あさばとなづく。江戸に云。ほしびらめを、駿河にて。まつかはびらめといふ。一種のはがれいと云有（至て小なるものなり）泉州にて。岡田がれいと云

鞋底魚 うしのした 一名くつぞこ 關西及東國の海邊にて。うしのしたと稱。江戸にて。舌びらめと呼。備前には。くちけと云。越前にて。ばうがれいと云

幾須古 きすこ○關西に。きすこ、江戸にて。きすと云。伊勢、白子にて。あめの魚と云（雨ふる日多くとる魚也。故に名とす。然とも別也）紀州にて。だうほうと云

阿古 あこ○加賀國にて。はちめと稱す。此魚播磨攝津國などに稀に有。冬月藻魚の大なる物を、あこと呼て賞翫す。【和漢三才圖會】見えたり。又あこは赤魚也と云

藻魚 もうを○西國にて。いそめばると云

目張 めばる○陸奥仙臺にて。そいと云。又すいと云。藝州にてめばるの兒を呼て「なるい」と云。一種沖めばると云有。其色黒味ひ厚。病人食ふことなかれとなり

て。ほこの魚と云

方頭魚 かながしら○參河にて。かなごと云。越後糸魚川にて。いぢみと呼。常陸下總にて。ぎすと云（其かしら角ありてかたし、故にかなかしらといふ）

石鰻魚 おいかは○筑紫にて。あさぎといひ。又あかばゑ又山ぶちばゑなど呼。京都にて。をいかは、攝津にて。あかもと云

京師の俗大堰川を略して「おるかは」と云。又赤もと云は赤斑の略なり。又北國にて「おいかは」と呼魚有。同名異物也

鰻 いさゞ○北國にて。かねたきと云。京師にて。だんぎばうといふ。京にて目高・いさゞ共に「だんぎ坊」と云。目高の條下にくはし。又俗に「ちりめんざい」といふは、此魚の乾たる物也。又駿河にて「かねたき」と云は別物也

鰻條魚 だろめ○大坂にて。だろめと云。筑紫にて。しろうをと呼。土佐國にて。どろめざいといふ。此魚三月海より川水に上るを築にて是を捕、長三寸、江戸に云白魚より小也。其潔白なる白魚に相同し。水魚と呼も又是に似たり。近江の湖水、宇治の田上などに産する物也

(1) あふらこ

丁斑魚 めだか ○東武にて。めだか、京にて。めいざい。又。うきんじよ。だんぎばう、大和にて。こめんじやこ、南都にては。めたいき、大坂東南にて。うきた、大坂西北にて。こまいじやこ、和泉にて。めたばり、同國堺及近江幡越前にて。めいじやこ、伊勢にて。めばや、ねばい、同國白子および美濃にて。いばい、尾張にて。うきす、遠江にて。ねんはち。又。めんばい、相模三浦邊にて。ひつこ、出雲にて。めんばら、同國及越後にて。うるめ、伊豫にて。うきいを、土佐にて。あぶらこ、肥前にて。たうを、越中にて。かねさ。又。こめさ、陸奥にて。はりみず、同國南部にて。めさこ、又。めぬけ、出羽最上にて。じよんばらこと云。按るに、京都にて目高の異名を「だんぎ坊」とよぶは凡僧の經論も見ずに唱すを、水に放すと云秀句にて、談義坊といふとぞ。又江戸半太夫節の淨瑠璃に、くらき御目のかなしさは、月日のかけも水鳥の(す略す)此文句にも「見ず」を「水」に云かけたり。みずの假名は「す」の字也。水はみづにて「つ」の字也。かな違ひ也。然ともくるしからさるか。守武大人の句に

(2) まぐろ

ちる花を南無阿彌陀佛とゆふ邊かな。守武は伊勢内宮の神官荒木田氏、連歌を好て【新撰筑波集】にちりし作者

(3) なでふか

也。かつ俳諧の鼻祖なり。右の句は「いふ」を「ゆふ」とせられし也。作例有こと成べし。又此吟を辭世なりと後人おもふはあやまり也。天文十八年八月八日七十七歳にて卒す。辭世「こしかたもまたゆく末も神路山みねの松風」
鰯魚 さめ ○播州にて。のそといふ。越前にて。つの字と云。その故は、此魚捕て磯へ上れば假名の「つ」の字の形に似たりとて、越前の方言につの字となつくと也。大和にては。ふかと云。さめと鰯魚とは大に同じくしてすこしく異也。ふかの類多し。或は白ぶか、うばぶか、かせぶか、鰯ぶか、もだま、さといわり等有。皆さめの類なり。四國及九州に「さめ」の稱なし。すべて「ふか」と呼。又江戸にて一種。ほうざめと云有。下野國宇都宮邊にては。さがほうとよぶもの也。江戸にて云。ほしざめを、西海にて。のうそうと云。江戸にて。しゆもくざめと云を、西國にて。念佛坊といふ。是土佐の國にて云。かせぶかなり。又土州にて一種。なでぶかといふ有、船端に人立時は、必尾をもてなて落すと也
王鰯 しび ○畿内にて。はつと稱す。江戸にて。まぐろとよぶ。江戸にてまぐろのすきみといふものを、畿内にて「はつのみ」と云。又江都の魚店にて。しび。まぐろ。びんな

(2) 鰯ノ振假名「いとすぢ」四字無シ

(3) 小かつを

(1) まぐろ

が等の品有といへとも、東國の俗皆「まぐろ」と云、然共至て大なるなし。むかしは江都の魚市にて「まぐろ」を賣買ふこと有しが、近年は來らすとなん。又「びんなが」といへる物はあぶらを去て肉糰となすもの也。又二尺以下の小なるを江戸にて。めじかと云。一名。そうだと云。ひらそうだ。丸そうだなど二種有。京都難波の俗。目ぐろといふ。是なり。又二尺已下のものは相模にて。よかごといふ。一尺余りなるは同國にて。めだいしびと云。【本艸】鼻肉作鰯名、鹿頭、又名、鹿肉、と有。是目鹿となづくる故有に似たり。一説に目ぢかとは其眼の近きなり。まぐろと云もの、小しきなるをいふ。まぐろとはその眼の黒き也。又歌に鰯と詠り。山邊赤人が藤井の浦にしび釣と詠ぜしたぐひ也

鰯 ぶり ○この魚の小なる物を、江戸にて。わかなごと云。五畿内及西國四國にて。わかなと云。又。つばすと云。一尺程なるを、西國にて。目白と云。一尺餘、二尺にも至るを、江戸にて。いなだと云。北陸道及奥州にて。ふくらぎといふ。關西にて。はまちと云。漸大になりたるを、江戸にて。わらさといふ。是を北陸道にて。らぎといふ。霜月の頃、三四尺五六尺となる。是則「ふり」なり。薩摩にて。そうじと

いふ。筑前及上總にて。大うをといふ
鰯 かつ ○一種。すぢがつをといふ有、皮の上に縦に白き縷三四條有、是を加賀にて。たてまんだらと云。又關西にて。うづわとて小なる物有。又。よごわとよぶ有。今按に。うづわ、一名茶袋、又しぶわといふもの有。是等を江戸にて「小がつを」と呼て賣也、然共別類也。よこわと云は「めじか」と云魚の子也

河鰯 ふぐ ○京江戸ともに。ふぐとよぶ。西國及び四國にて。ふくとうと云。又江戸にて異名を。てつ。ほうと云。其故はあたと急死すと云意也。又。しほさいと云有。小しきなる物なり。肥前の唐津にて。ちんぶくとうと云是也。又まふぐといふ魚は、冬の内賞。鰯。す。とらふぐと云は春夏ともに喰ふ也

鰯 いはし ○をむら。女詞也。をほそ。同斷。あかいわしといふ物は鹽につけたるを云。肥前の長崎にて。からがきと云。中國にて。やすらと云。紫式部いはしを賞して

「ひのもとにはやらせたまふいはしみつ參らね人はあらし」と思ふ

【玉葉集】に住吉明神の御歌に

「いよの國うわのこほりの魚までも我こそはなせ世をすくふとて」

(1) 子の義にはあらず

(2) と呼、
按に
(3) さつば

鯉 ひしこいはしの屬也。○相模及西國にて。かたくちいわしと云。又片口と斗もいふ。駿河にて。くだいわしと云。上總にて。小いわし、下總及常陸にて。せぐろとよぶ。今按に、上總の國にて小いわしと稱すといへども、子の字の義にはあらず。又鯛の小さきをも「小いわし」といふ。秋をもて氣とす。是にまがふなり。ひしこを云は、小さいはしの如しと云意なるべし。又西國の產物に「銀びし」と云有。是はこゝに云鯉にはあらず、鯛といへる魚の子を鹽漬になしたる物也。又鯛の小さい物を製したるをもいふ也。なを蟹の條下を合せて見るべし。又、こまめと云物有。是はいはしにてはなし。ひしこの干たる物也。相模及越後、奥の津輕にて。干鯛と云。仙臺にて。ひしこと云。加賀にて。かいぶしと云。九州にて。すほし、又、片口とも云。伊賀及伊勢、出雲又奥州の内にて。田つくりと呼。按に、こまめとは常の稱號也。春の始に小殿原、又田作、など唱へて祝し侍る。是稻梁を植る物、干鯛、干鯉をもつてす。故に田つくりの名有。又すほしと云るは、簀の上に干を云也

とを一所に地中に藏れば其子成長す。尤其子一生このしろを食せざらしむ。このしろは子の代なりといひつたへたり。

古歌に

東路のむろの八嶋にたつ煙誰かこのしろにつなしやくらん

此歌につきては古き物かたり有、普く人の知れる事なれば爰に贅せず

鰻 うなぎ ○山城國宇治にて。うなぎまると云。此魚の小さな物を京にて。めうなぎと云。是はみゝすうなぎの誤也。江戸にて。めそと云。上總にて。かようと云。又くわんよんとも云。常陸にて。がよこと云。信濃にて。すべらと云。土佐にて。はりうなぎと云。今按に、京都にてうなぎを鮓となすは宇治川のうなぎをすぐれたりとす。よつて宇治麻呂と人の名を以てす。江戸にては淺草川深川邊の産を江戸前とよびて賞す。他所より出すを「旅うなぎ」と云。又世俗に、丑寅の年の生れの人は一代の守本尊虚空藏菩薩にて、生涯うなぎを食ふ事を禁ずと云。徂來翁【なるべし】に、鳩を八幡の使者、猿を山王の使者と云るも、はちまんの「は」、さんわうの「さ」をとりていへるなるべし。鹿を春日といふも、

青魚 かど一名にしん○つくしにて。高麗いわしといひ又。せがい共云。阿部氏の云、此魚あつまる時は沫を吹て水面に浮ぶ。雪の降たるが如し。網をもつて是をとる。腹に子有て満り。干て數の子と云。和俗鯉の字を用。東海に出るをもつてなるべし。今按に、津輕にてなまにしと云は干たる魚をしんといへば生のにしんと云意なるべし。又江戸にて「かどいわし」と云て鯛の中に交りてあるもの也。松前の旅客に問ひ侍しに少しかはる様におほへぬると答侍りし

鰻魚 このしろ○此魚の小さな物を京都にて。まふかりと云。中國及九州共に。つなしと云。薩摩にては。ながさきと云。此魚長崎に多し。故になづく。筑前にて。はだらこと云。又土佐の海に。はらかたと云魚有。是は「すぢこのしろ」といふもの也。今按に、鯛と云魚は、江戸芝浦、品川沖、上總下總の浦々よりは是を出す。西海にはこれなし、鯉の子にあらず。別種也。駿河にてつなしと呼は小鯉也、此國にて「こはだ」と云物は江戸にて。さつばと云魚なり。このしろ：こはだ・さつばは是皆種類也。或人の云、世間に子生れて死し、又生れては死す事有。其家にては子生るゝ時胞衣と鯉

「か」もじなるべしといへり。此書に倣て考るに、丑寅の年の人うなぎくふ事をいむは、いにしへうなぎをば「むなぎ」といひし也。虚空藏の虚の字「むなし」と訓すれば「むなぎ」をいみしなるべし。「む」は「う」にかよふ也。いにしへ「梅」は「うめ」「馬」は「うま」の假名にて有しが、後に「むめ・むま」と書もおなじことなりなり【萬葉】に吉田連石麴と云人のかたち甚やせたるを笑ひて作たる歌 大伴家持

ぎとりめせ

【拾穂抄】に「むなぎ」は「うなぎ」なりと有。又鳥を熊野の神使なりと云。熊野は三山なり。鳥に深山鳥と云有。山にすみて村里にうつらず。されは三山と深山おなじ音なるゆへ、神使なりといひならはしたる物か。識者のいはく、尾州一宮にて鶏卵を食せず。神代卷發端には、かるとぞ。同津島にては鳥を食せず。そさのおの「鳥」の字「鳥」に書たる本を見しより也。熱田には、箱を食せず。やまとだけにてまします故となん。手を打て笑ふべきにもたへず。さいは天下の神人すべて紙は機たることにつかふまじきやとあり。是等の説爰にあづからずといへども、筆のつるでに記て童蒙

に知らしむ

海鱷 うみうなぎ ○畿内にて。海うなぎと云。西國或は伊豆、熱海にて。うみぐちなはと云。攝州西宮海邊にて。へんびと云。此魚海邊の穴の中にあり。漁人多く釣こと有。毒ありと云傳て濱に捨て。蛇に似て黃色に黒文有

黃鱷魚

ぎど ○備前にて。ぎど、東國にて。ぎど、北國にて。あいかけ、加賀にて。ぎど、奥州及越後にて。はちうを、越前にて。あかにこ、出羽にて。がばち、上總にて。川ばち、伊勢にて。ども、土佐にて。ぐぐといふ。此魚背の上に刺有て人を螫す。ごきくと鳴く。人これを捕ふ時ははなはだかなしむ聲を出す。今按に、享保十三年戊申、秋、東國所々洪水せしころより此魚うせたり。しかふして後鯰と云魚東國に生ず。うたがふらくはぎど鯰に變したる物歟

鯰魚 なまづ ○安房國古濱村わたりにて。なままだといひ、又。にぜんぎやうと云。今按に、此郷に妙本寺と號する日連宗有。此宗派にては大乘法を受持して一切諸經は二漸の經行なりと誹謗す。爰に淨土宗門の在家ありて鯰を「なまだ」と呼。なまだとは「南無阿彌だ」の名號の略語なれば、それに對して日蓮宗の里民は「にぜんぎやう」と呼にてやあらん

(1)にぜんぎやう

とき腹を上になして水上に浮ぶ魚也【續猿蓑】詞書有て「角鯰や腹をならべて降るあられ

鯰魚 かまづか【倭名抄】○京にて。かまづか、鴨川にては。かまきすじ。又。かなくじりと云。其形はぜに似て又きすに似たり。大なる物をかじかと云

(2)鯰ノ振假名はぜシ無シ

吹沙魚 かなびしや ○京にて。かなびしやと云。四國にて。じんそくと云。肥前にて。じやうとくといふ。江戸にて。こちじやこと云。湖水及谷川の石の間に住小魚也。形色共に鯰に似て小さし。其大一二寸細なる黒點文有。其尾岐あらず

鯰 あぢ ○紀州にて。とつかは、土佐にて。とつかこと云。小しきなる物を、西國にて。こびらこ、相州にて。ぢんだんご、加賀にて。さくざねと云。此魚播州室津にて多く捕る。故にむろあぢの名有

(3)九國ノ「國」ヲ振假名「し」無シ

文鯰魚 とびうを ○中國及九國にて。あこといふ。婦人臨産の月是を帶れは産やすしと見えたり。今又乳のたる、藥なりとて婦女は珍重する也

和加佐幾 わかさぎ ○駿河にて。すゝめの魚、伯耆にて。しらさぎ、常陸にて。さくらうを、若狹にて。あまさぎと云。

杜父魚

かじか ○京大坂にて。いしもち、加茂川にて。り、嵯峨にて。いまる、伏見にて。川をこぜ、近江にて。むこ、又。どうまん 又。いしふし 又。ちこ、九州にて。どんぼ、筑前にて。ねんまる、越前にて。かくふつ、出雲にて。ごす、伊賀にて。すなほり、相模及伊豆駿河上總下總陸奥其外國々にて。かじかと云。駿河沼津にて。かじいと云。今按に、此魚種類甚多し、其水土によりて形すこしかはり、大小の品有といへ共、一類別名也と云。江戸にて賞する鯰、これ又品類多し。まはぜ。三年物をいふ。道風の淨瑠璃に、はぜ釣ばりに三年物、戀一、通はこつちのゑて、とあるは「はぜ」におかしき異名あればふくみて書る文なり。又。だばうはぜ、是は下品也。又。しまはぜといふ有。是かじか也。又。いし臥といへるは【源語玉鬘卷】に、ちかき川のいし臥などやうの道遙し給ひて(下略)【河海】ちかき川とは賀茂川也と有。又下賀茂紀森の茶店にて「ごり」を調和して「ごり汁」と名付て賣也。又加賀越前の土人は「ごり」を鯰となしてたしめ食ふ。これを蛇の鯰といふ。又木曾の谷川などにて諸木の倒たる有て、年を経枝くさりて石鮎に化すといへり。それを土人ごり木といふ。又かくふつといふ物は、北海にて雪雹の降る

今按に、わかさぎ、又あまさぎ、同物也。若州三方の湖中に多くこれを獵す。又常州櫻川に櫻魚と云有。是江戸にていふ「わかさぎ」也。又俳諧季立の中春の部に「櫻魚」と云有。これは櫻の花盛のころ出る魚を云。なをさくら鯛・柳鯰と賞するか如し

鰻 しいら ○筑紫にて。猫づら、薩摩にて。くまびき、肥前の唐津にて。かなやま。又。ひいをと云。土佐にて。とうやくと云。乾て賞翫する時は土州にても、くまびきといふ。江戸にても猫づら 又。ひいをと云。今按に、この魚海船のかたはらを泳ぐ。船人急に釣針をなけて、忽三、四釣事有。俗に九萬疋と書も、是此魚の數多なるをいふなるべし

伊多 いだ ○畿内及西國にて。いだ、讃岐にて。かうら、東國にて。さい 又。まるたと云。此魚上州利根川に多し。一説に「さい」とは犀の泳ぎて走るが如きにたとふ。丸太とは山中より材を山川にかべ流に任せて下るにたとへたり。今按に「さい」とは「材」なるべし。丸太といへるもおなし心也。其魚の圓によるの名なり

鰻 うぐる ○信州諏訪の湖水にて。あかうをといふ。相州箱根にて。あかはらといふ。小なる物を「やまめ」といふ

毛呂古 ろろこ 一名しまうを ○近江及西國にてあぶら

めといふ。土佐にて。もろこ共。又。もつともいふ。近江坂本

に「もろこ川」といふ川有。此魚多し。故に「もろこ」と稱す。

一説に粟津に木曾義仲社有。かの靈を祭るの日、社の邊の

小川にて土人もろこ魚をとる。必數十斛を獲とあり

石首魚 いしもち ○京江戸ともにいしもちといふ。西

國及四國にて。ぐちと云。駿河にて。しろぐちといふ。此魚

かしらの中に石有。よつて名とす。又江戸にて「にべいちも

ち」と云有。別種なり。是にべといふ魚の小なるもの也

鱧 鱧 にべ ○此魚の小なる物を土佐にて。しらぶと云。

大なる物を四國にて。ぬべといふ。又。そち共いふ。備前に

て。そこにべと云。「にべ」とは魚の腹中に鱧膠あるゆへに

名とす

鰻魚 ひど ○常州水戸にて。ふぢかけと云。佐渡にて。嶋

まはりといふ

紅鯛魚 たかべ ○讃岐にて。あじろといふ。能登にて。と

こやといふ

鰻 はゑ ○東國にて。はやと云。はゑは鰻を好て食ふ。故

になづく。但鰻は關西にて「はへ」關東にて「はい」といふ

は上品なり。又「よこさえい」は菱形にして色白し、故に「ま

えい」の血をぬりて裁賢となす。「がんぎえい」は下品也。

其形丸く、惡臭有。また真鰻の子いまだ腹に在時は刺を中

につゝみて、たとは巻葉の如くにて有。又「よこさえい」の

子はあみがさの如く、二折になりて刺を中に隠す物なり

太刀魚 たちうを ○筑前にて。ながだちと云

惠會 ゑそ ○伊勢の白子にて。たいこのぶちと云。土佐

國の土人。をばあといふ。漁人のいはく「ゑそ」は蛇の化し

たるもの也と。又九州にて「を」かまがへるの化したる物也

ともいへり。畿内にて五月の頃「水丞そ」とよびて賞。或

人ゑそ。うなきの二品酢と合して食すれば人を害すといふ。

今按に、土佐の國の俗この魚を「おばあ」といふ。是は蛇の嫉

といふこゝろなるへし

沙鰻 なまこ ○大坂にて。とらごといふ。筑紫にて正月

は。たはらごと云。唐津にては正月十五日まへは。はつだは

らと云。それ過て正月の中はたはらと云。【廣大和本艸】

に、沙鰻、和名タハラゴ、今京都の魚舖に「きんこ」といふ

物なりと見へたり。今按に、正月朔旦海鼠を「たはらご」と

賞して祝す。是米穀の義によりて也。「ごまめ」を「田つく

り」と稱するも意同し

海鰻魚 えい ○上方にて。えざれと云。江戸にて。あかえ

いと云。今按に、京にて。えざれといへるは、江戸にて赤えい

のたちうりといふに同し。えいに種類有。武之品川・芝浦

にて。まえい。よこさえい。がんぎえいなどいふ。「まえい」

蝦魁 がざめ ○畿内にて。がざみといふを、江戸にて。を

ゝかに又海かにと云。又西國にて「がざみ」と云は甲菱形に

して甲のまはりのこざりばに似たり。一種鰻鰯あり。江戸

にて。こめつきがにと云。西國及四國にて。田うちがにと云。

古歌に「いなつきがに」とよめるは是なり。一種豆蟹。蜘蛛

(1) はつたは

(2) なといふ

(3) 鰻

(4) 指宿

(5) だんかめ

(6) 變せす

(7) 藻蟹

(8) 假名

(9) 字無シ

(10) 蜘蛛

(11) 海鰻

(12) 水龜

(13) 龜

(14) 指宿

(15) だんかめ

(16) 變せす

(17) 藻蟹

(18) 假名

(19) 字無シ

(20) 蜘蛛

(21) 海鰻

(22) 水龜

(23) 龜

(24) 指宿

(1) 磯 いそ
(2) 海ほふつ
(3) 生つけ なつけ
假名「う振
み」ノ二
字無シ

(4) 長田 ながた
(5) 秦 しん

よひて磯に寄を、兒童とらへて縄をつけ、たはふれ、磯とす。又「海ほふつき」は「うんきう」の卵也と云。岩或は流木などに卵を生つけ置を取りて「うみほうつき」とよびて、小女口にくみ鳴らす物也。其色黄なるを、梅酢をもて是を染、赤色となす也。江戸へは安房國より出ス。

鬼蟹 おにかに をにがに○攝津にて。嶋むらがにといふ。兵庫及播州にて。武文かにと云。讃州にて。平家蟹と云。加賀越前にて。長田かにと云。これ元弘の亂に秦の武文、攝州兵庫の海に死す。享祿四年細川高國と三好と攝州に戦ふ。細川の家臣島村何某敵二人を挾んで尼崎浦に没す。故にこれ等の説を後人附會する所也といふ。

榮螺 さざえ ○相州三浦三崎邊にて。つほつかいと云。さざえのふたを同所にて。とうもいちと云。是は意部の戲観に、穴一といへる事をすなり。浦里にてあれば錢のかはりに用るもの歟。なを先に出す。

鰐魚 あはび ○上總にて。かいつけと云。是は蛇の蓋なくして、身は貝につきて有物なれば、貝つけといふか。貝つきなるへし。江戸にて一名。なまがい共云。又あがりたる蛇をば。すいけんといふ。泉州境にて此貝の殻を。あま貝と

云。これは海士のとる貝なれば、海士貝と云か。又鮑の小なる物を「とこぶし」と云。土佐にて「ながれ」と云。今按に、「とこぶし」は鮑の子にはあらず、種類也。又鮑のわたを西國にて「角」と云。又あわひの貝の片おもひと歌に詠せしは【萬葉集】に
いせのあまのあさなゆふなにかつくてふあはひの貝のかたもひにして
蛤蜊 はまぐり ○上總にて。ぜんなと云。同國にて蛤の大なる物を「小だま」と云、小なるを「大玉」と云（是は雄鷹を「せう」といひ、雌鷹を「だい」といふ詞に似たり。意は別也）
淺利貝 あさり貝 ○勢州にて。きしめ貝と云
朗光 さるほ ○勢州にて。つめきり貝と云。筑紫にて。馬の爪貝といふ。土佐にて。たぶかい又ちがいが共云
蜆 しじみ ○畿内にて。ぜざかいと云。古歌には堅田の蜆を詠す。今は堅田には稀にして勢田に多し。せたは膳所に近き故「ぜざ貝」といふと也
鹽吹貝 しほふきかい ○伊勢にて。とんび貝と云。總州にて。つづと云
多伊良木 たいらぎ ○大坂にて。ゑほし貝と云

田螺 たにし ○畿内及西國東武其外國々にて。たにしと云。土佐國にては一名田貝と云。北國及房總又駿河相模伊勢路にて。田つぼといふ。又「つづ」と斗も云【和名】に【拾遺本艸】を引て。田つづと書り

寄居蟲 がうな 一名やどかり ○伊豆及駿河にて。いそものといふ。上總にて。がなづといふ。肥前にて。ほうさい蟹といふ【和名】かみな

運 まて ○大坂にて。かみそり貝と云。上總これにをなし

細螺 きささこ ○中國にて。いしやらがといふ。伊勢にて。こながらと云。肥の唐津にて。こぶらといふ

石蠟 かめ のて。○つくしにて。しると云。武之品川邊にて。ひとと云。上總にて。たこのゑんざと云（しるとは其形椎の實の上皮のゑみたるに似たる故名づく）

海馬 かいば ○佐渡にて。たつのをろしと云。薩州にて。龍の駒と云。畿内にて。うみむまとよぶ。是婦人安産の守とす

和尚魚 をしやうう をしやううを○西海にて。海坊子と云。下總銚子浦にて。正覺坊といふ。漁人の云、むかし僧有。此江に溺

死す。其幽魂こゝに止りてたま／＼顯。容泥龜のごとく

にて、四ツの手足指わからず。頭は猫の如し。これを捕得る時は漁人あはれみて酒を飲せて命をたすく。【三才圖會】云東洋大海中有和尚魚狀如龜其身紅赤色云

蝸牛 かたつぶり ○五畿内にて。でん／＼むし、播州邊九州四國にて。でのむし、周防にて。まい／＼、駿河沼津邊にて。かさばちまい／＼、相模にて。でん／＼うらく、江戸にて。まい／＼つぶり、同隅田川邊にて。やまだにし、常陸にて。まい／＼ほろ、下野にて。を／＼ほろ、奥仙臺にて。へびのて

まぐらといふ。今按に、かたつぶりは必雨ふらんとする夜など鳴もの也。貝よりかしら指出して打ふりかた／＼と聲を發す。いかにも高きこゑ也。かた／＼と鳴て頭をふるものなれば、かたふりといへる意にて「かたつぶり」となづけたるものか。【つ】は助字なるへし。予隅田川の邊に寓居せしころかれを見て句有。又晋其角か

へ文七にふまるな庭のかたつぶり とせし句は寂蓮法師の歌の、上の五もじをかへて俳諧の句となしたる也

へ牛の子にふまるな庭のかたつぶり角有とても身をはたのまし

蛭 蛭 なめくじり ○常陸にて。はだかまいほろ、越後にて。山なまこと云。山中には大五六寸許のものと有也。貝原翁曰、なめくじり夏月屋上にはひのほりて、蛭に變ずる有。然ともことく不自然

蛇 へび ○關西及西國にて。くちなは、關東にて。へび、薩摩にて女の詞に。たるらむしと云。家くちなはと云るは屋上にすみて鼠を追ひ、鳥の雛を捕もの也。是黃額蛇也。近江にて。さとまはり云。播磨にて。をなぶそといふ。津の國にて。をなびそ。ねづみとりと云。筑前にて。やじらみと云。一種東國にて。山かぐちと云を、近江にて。しまへびと云。又一種巧蛇和名をへび、東國にて。あをだいしやうと云を、近江にて。あをそと云。又一種畿内及東武にて。からすへびと云を、安房にて。すぐろへびと云。筑前にて。うしぐちなはと云

蝮蛇 まむし ○西國にて。ひらぐちと云。筑前にて。はめと云。土佐にて。はみ又くつはみと云。上總房州にて。くちはみと云。是和名はみ也。又一種俗に。ひばかりと云有。土佐にて。日みずと云。小しく錦色なるもの也。人是在さるゝ時は、日を見る間なく死すと云心にて。日みずと云

云と也。漢名腐尾蛇これなり

蛇 蛇 うはみみ ○出雲にて。じやばみと云。北國にて。をかばみと云

蛇 蛇 とかけ ○畿内にて。とかけ、東國にて。かなへび又かまぎつてう、相摸にて。かまきり、西國にて。とかぎり、大和にて。とかき、江戸にて。は。とかけと「け」の字を濁りてよぶ。一種青とかけと云有。背青みどりにして光有。縦斑の文有。腹白く口大也。是毒虫なり

蜂 はち ○仙臺にて。すがりと云

馬蜂 くまばち ○仙臺にて。おほかみばちと云。越前にて。あんどん蜂と云

蟻 蟻 じかばち ○畿内にて。こしほそと云。仙臺にて。土すがりと云。常陸にて。かそりと云。信州にて。ぢすがりと云。東武にて。じがばちと云。【日本紀】蟻又【中唐】蒲盧の説古註にも見えたり。【東雅】に【本朝式】を引て、するの太刀といふは則今の細太刀と云物也。又「さそり」と云も、細きことなり。常陸にて「かそり」といふも「さそり」也。彼國に賀蘇岡と云岡有。昔此國にさそりばち多きによりて此名有と見えたり

蠶 かいこ ○東國にて。おこと云。越後にて。うすまと云。同國長岡にて。ほこと云。信濃にて。ほどうと云。奥州津輕にて。大なるものを。とうごこと云。小き物を。きんこと云。出羽にて。とこと云。房州にて。ひめこと云

今按に、丹波國桑田郡大原社に蠶飼するもの、信仰する神なり。毎年五月廿八日おぼらざしとて諸人群參す。三月廿三日を春志と云。參詣のもの其社地の小石を猫と名付て借て下向す。是は蠶に鼠のつかぬ呪なるべし。九月廿三日をは秋ざしと云て、一とせに三たび詣事有。又極月晦日の夜、家の大黒柱に灯をともし家有。これ鼠に媚る也。蠶を養ふ人の、ねずみを怖るゝより起りたるなるべし。また墓もかひこにつくものとぞ、歌に

へ朝かすみかひやか下に鳴蛙こゑたにきかはわれこひめやも

一説に、舊の草を帯にして蠶飼の棚を、初子の日に、十四五の小女午の年なるに掃すれば、蠶の糸綿成就すると云。【萬葉】に大伴家持、はつ春の初子のけふの玉はきと詠せしは此義也。又東國にて繭玉とて正月十四日に餌を製し、柳の枝或は小竹の枝などに付て、繭にかたどり祝ふこと有。

又蠶は春より夏にわたり、又夏の蠶は秋に至て成ものなれば、西國にては其頃しもまゆ玉をつくりていはふ事となん。又蠶の蝶に化す頃、西國にて。ひるろうと云。上野及信濃陸奥にて。ひるといふ。伊勢にて。ひいろと云。又かひこは子を牛付て子孫絶えず、めで度物なれば、婚禮にめてふ、をてふを用る事、禮家の大事とす。今は常の蝶と心得る人も有とかや。又めてふをてふも實は蝶鳥也といへり

蝶 てふ ○相摸及下野陸奥にて。てふまと云。津輕にて。かへともて。こなとも云。出羽秋田にて。へらこと云。越後にて。てふまべつと云。信濃にて。あまびらと云。一種鳳蝶、其形大にして黒色羽の縁に文有もの也。上總にて。ちくくてふと云。下野鹿沼邊にて。ちくくてふまと云。美濃をよび近江にて。かみなりてふと云。薩摩にて。山でふと云。今按に、蝶種類多し、其あらましをこゝに出す。蝶和名かはびらこ也。羽州にて。へらこと云。

野州にては所によりて蝶々ばこと云。これらの詞は「かはびらこ」の略にして「ひらこ」又「へらこ」と轉し、又「へらこ」轉して「ばこ」となりたる物ならん。又胡蝶と云。胡字は其鬚を賞せし名也。江戸にては「てふく」といふ。一説に蝴蝶

は「てふ」也。蝶もとより「てふ」也。よつて蝶々とかさねて呼ともいへり

蜻蛉 とんばう○奥州仙臺南部にて。あけづと云。津輕にて。だんぶりと云。常州及上州野州にて。けんざと云。西國にて。えんばと云。一種、紺縵、畿内にて。紺縵といふ有。東武にて。かねとんほと云。肥前にて。かうやひじりと云。又一種東武にて。赤卒と云。和名あかゑむば也。畿内にて。しやうれうやんまと云。西國にて。しやうれうえんばと云。常陸上野下野邊にて。いなけんざと云。越後にて。こしやうとんほ。又。ちごとんほと云。奥州にて。なんばあけづと云。會津にて。たのかみとんほと云。又一種江戸にて。しほとんほと云有。奥州にて。しもがらあけづと云。肥前にて。しほからえんばと云。又大なる物を。馬大頭と云。上總にて。をんじやうといふ。越後にて。山とんほと云。江戸にて。至て大なるを。鬼やんまといふ。土佐にて。うしやんまといふ是也。【東雅】曰。蜻蛉はいにしへ「あきつ」と云。後「かけろふ」と云。即今云とんばう也。東國の方言に「えんば」と云。赤卒を「いなけんざ」などもいふなり。あきつとは秋に出て、其類の衆多なれば也。秋津と云「つ」は助字也。「いなげん

ざ」といふも、稻熟する時に有云也。「けざ」とは「えんば」の轉語也。童部の「やんま」といふも「えんば」の轉ぜし也。「えんば」は即「えんば」なり。なを「八重ば」といふが如し。よのつねの虫は多くは羽二有を、此虫の羽四あれば、かさなれる羽といふ意也。又きはめて細く小なる草むらの間に、其羽をかさね植て止まるものを即今「かけろふ」といふ也。此もの誠にありともなし共さだかに見えぬもの也。【南留別志】に、蜻蛉を「とんほう」といふは吾邦の名を秋津洲といふ故に、東方といふこと也云々

蛸蛸 つく／＼ばうし○上野にて。ほつてうと云。近江にて。つくしこひしと云。今按に、俊賴朝臣「うつくしよしと蟬の鳴らん」と詠し玉ひしは「つく／＼ばうし」にやあらん【和名】くつ／＼ほうし

茅蛸 ひぐらし○上總にて。くつはぜみと云。又。かな／＼と云

蟋蟀 こほろぎ○南都にて。きり／＼す。又。ころ／＼しと云。江戸にて。こほろぎと云。武藏府中邊及信濃奥州南部にて。きり／＼すと云。越後高田邊にて。つとりさせと云。美作にて。きり／＼といふ。白石翁曰。是古に云きり／＼す

也。又古「こほろぎ」といひしは、今いふ「いとど」也。又古「い

ねつきこまろ」といひしは、今云「いなご」也。また古「いな

こまろ」といひしは、今云「はた／＼」也。又古「はたをりめ」と

いひしは、今云「きり／＼」也。小兒籠にやしなふもの也

龜馬 いとど○京にて。ころ／＼、伊勢及四國にて。かまぎ、

尾張にて。かまぎりす、遠江にて。かんなご、西國にて。くろ

つと。又いひご、近江にて。くろと云。これ古「こほろぎ」と

いひし物也。今いふ「こほろぎ」の種類にして小なる物也。

籠のあたりにすむ

莎鷄 はたおりむし○伊勢にて。やまぎすと云。近江にて。

て。うりすと云。畿内にて。小兒。きり／＼すと云。東國にて。

きり／＼す。又。ぎつすと云。又。ぎつちよなど云。其。こゑの

「きい」と鳴くははたおるまねきの音、ちよんと鳴くは鶯の

音に似たりとて、いにしへ「はたおりめ」とよびしも今「きり

／＼す」と名の變したる也

蟪蛄 はた／＼○江戸にて。がち。又。ばつた。又。しやうれ

うばつたと云。上野にて。はたといふ。信州にて。ほつたこ

と云。駿河にて。がたきと云。伊勢にて。ねぎどのと云。奥

州仙臺にて。はつたぎと云。津輕にて。とらほうと云。出雲

にて。ほとけの馬と云。長崎にて。たなばたと云

紡虫 くだまき○一名いとくり 江戸にて。むまをひと云。

近江にて。すいと、いふ。土佐にて。くだまき。又。くだむしと

云

蟪蛄 かまきり 一名いほじり ○江戸にて。かまぎつてう、

江戸田舎にて。はいとりむし、信濃にて。かわみそ、相模に

て。いほしり。又いほくひ、奥州にて。いほ虫、に津輕で。いほ

さし、肥前にて。かまきりてうらいと云。【本草】時珍曰、

今人病疣者、往々捕蟪蛄食之云云

蝦蟇 かはづかへる ○仙臺にて。びつきと云。西國にて。

びきと云。唐津にて。たんなんびきと云。土佐にて。ひき

おんびき。又。やくたらうなど云。又一種小く青色にし

て木竹の枝に棲ものを、關東及畿内にて。土鴨と云。九州に

て。ほとけびき。又。あまびきといふ。唐津にて。あをびきと

云。今按に、但馬國に一種。河鹿とよぶ有。谷川の流にすみ

て、濁る水にはすまぬもの也。其聲鹿に似たり、故に河鹿と

呼。魚に同名有。別物也。常の蛙の群の中へ放す時は、則常

の蛙聲をとどむとなり。肥州にてはこれを「かはづ」と呼。

常の蛙を「かへる」と呼也。古歌に「蛙なくよしの、川の瀧

物類稱呼 卷二 動物

鼓蟲 まい／＼むし〇江戸にて。水すまし、同近在にて。
さをとめ。京にて。うづむし、泉州堺にて。ごまいむし、大
 坂及西國にて。かいもちかき、大和及近江越前にて。まい

飛蛾
こがねむし○つくしに

兜蟲

て。やどをかと云。大和にて。つのむしと云。此虫は皇^{きみ}夾^かの樹に住むし也。羽有て飛ぶ。雄^{オス}は角有、雌^{メス}は角なし。但「さ

むしをとる事有。又武州の内にて毛蟲の異名。信濃太郎と

物類稱呼 卷二 動物

いふ所多し。其心は六月信濃の方に出る雲を「しなの太郎」と云。此虫の黒き形、其雲に似たる故に名つくとぞ

蟬蛭 けら○京にて。しやうらいむしと云。【荀子】に「鼯鼠の五技^{ごぎ}を註して曰、能飛べ共屋上に上る事あたはず。よくのほれ共木をきはむる事あたはず。よくをよけとも谷をわたる事あたはず。能く穴をうがてども身をおほふ事あたはず。よく走れども人に先だつことあたはず。是を鼯鼠^{けらぎ}才と云て、實なき人のたとへ也。俗に石臼藝といふも同じ心か。又諺にむしけらなどいふは「けら」をのみいひし語の事にはあらず。すべて虫類をいふなり

物類稱呼卷之三

生植

米 こめよね ○遠江國天龍の川上にて。ほさつと稱す(此所にては、米といはずしてほさつとのみとなふ)按に、諸國より大峰或は羽黒山などへ詣るもの、一七日齋す。其内はほさつと稱して米とは呼すとなん。西國又は朝鮮の方言にも「穀」を菩薩と云よし見えぬ。【東雅】「雜林類事」を引て、白米を漢「菩薩」といひ、粟を田「菩薩」といふを記せりと有。又俗間に糠味噌といふは、糠と鹽とを和して制れるを名づけて「さゝちん」と云。是は佛經を書寫する早書の法に、菩薩の二字の卍冠のみをとりて苴としする事有。さればさゝとはほさつの義にて、是も又米を「ほさつ」といふ事によれる也。【秘藏記】云、天竺にて米粒を舍利とす、佛舍利も又米粒に似たり、故舍利といふと云。是三國同日の談なり。又早書の時のならひに、苴菩薩、点菩提とて苴とよむ。聲聞、目縁覺、或は彌陀を汝と書たぐひ、是皆經文の早書の合文也。

上もなき大佛もちの本來をさといは米のほさつなりけ

たはれたる

鬘【萬葉】髮臥註、曰、童裝束の時は總角とて「みづらゆふ」と有、今「みづらさけ」といふものゝたはねたるも、童子の髪に似たり。これによる歟

綠豆 ぶんどろ ○東國にて。やへなりとよび。又。とうろく共よぶ。畿内にて。ぶんどろといふ。遠江にて。とうろく云。備前にて。さなりといふ。伊勢にて。かつもりといふ。尾張にて。云ぶんどろあづき。又。十六寸なといふは別種也

豌豆 めんどろ ○畿内にて。のらめと云。東國にて。ゑんどろと云。伊勢にて。ぶんどろと云。上總にて。ゑんづといふ

菜菔 だいこん ○はだの大根。相州波多野名産也。江戸にて。はだなと云是也(これ轉語也)京にて。ながね大根と云。大坂天満にて。ほそね大根といふ。又。宮の前の大根と云。(河州守口にて。是をもつて粕漬とす)西國にて。小大根と云。(はだの大根は小大根よりはすこし大也)又畿内にて。なかぬき大こんといふを、江戸にて。をろぬき大こんと云

菰 な ○京にて。みづな。又。はたけなといふを、近江にて。うきな。又。ひやうすなと云。鄙にて。京菜といふ。江戸にて。も。水菜といふ有(京都の水菜よりは葉黒ずみて厚く廣し。

り 未得

秣 ひつぢ(いねかりたる跡に自生す) ○尾州にて。ひうちと云(是は轉語なり) 佐渡にて。まゝばえといふ。伊勢白子にて。二ばんごと云。越前にて。ひとてといふ

蜀黍 たうきび ○東國にて。もろこしと云。中國にて。きみ、伊豫にて。たかきび、加賀にて。ほきび、越後にて。せいたかきび、奥州津輕にて。たちぎみ、畿内にて。たうきびと云

玉蜀黍 なんばんきび ○畿内にて。なんばんきび 又。菓子きびと云。伊勢にて。はちほく、西國及常陸、或は越前にて。たうきびと云。東國にて。たうもろこし、遠州にて。なんばんだうのきびと云。奥州より越後邊にて。まめきびとも。又くはしきびともいふ。奥の南部にて。きみといふ(此所にては常の黍をはもろこしといふ)備前にて。さつまきび、因幡にて。たかきびといふ

紅豆 さゝけ ○九州及上州信州總州にて。ふらうと云。關西にて。十八さゝけと云を、關東にて。十六さゝけといふ案に、關東にて。大角豆の短く生るものを。みづらと呼。西國にては。ふたなりといふ。【古事記】「美豆羅」又【和名】

京の水菜に及はす。葛西菜又小松川本所牛島邊の冬菜におゐては京大坂にもなし。風味よくしかも一年の内絶る事なし。まことに名産也)又關西にていふ。間引菜と云を、江戸にて。つまみなといふ。西國にて。をろぬき菜と云(江戸田舎にて。菜にても大根にてもおろぬくと云といへとも名付る時はつまみ菜と云。もみ大根といふ)○關西にて。蕪菁と云を、東國にて。かぶなといひ、根をは「かぶ」と云

韭 なら ○上總にて。ふたもじと云。是は葱をひともしと呼故に、にらをふたもじと云

冬葱 ねぎ ○關西にて。ねぶかと云。近江にて。ひともしと云(ひともしは通稱なれ共、常に用ゆる所をさしていふ)關東にて。ねぎといふ。「ねぶか」とは根ぶかく土に入こゝろ、胡葱は淺き葱の意、根深に對したるの名なるべし。

「つ」は助字なり。和名「き」といふ。故に「一、文字と云。分葱はわからちとる義、刈葱は刈とる義とぞ。又ひともしを詠ぜし歌に

引見れば根は白糸のうつほ草ひともしなれと數の多さよ

野蒜 のびる ○加賀にて。ねんぷりと云

蕨 ひろ○關東にて。ひろといふ。關西にて。ろくたうと云。筑紫にて。にんにくといふ

芋 いも○駿河及美濃越後高田、所在、又常陸にて。ほゞと云○唐芋を遠州にて。女芋と云○蓮芋 武州品川にて。ハッがしらと云。又栗芋といふ所を、し○芋、莖、京にて。いもじといふ。東國にて。すいきと云（これは諸國の通語なり）美濃尾張にて。だつと云。奥州仙臺にて。からどりと云【土佐日記】いもしあらめも齒がためもなきかうやうの國也と云云「いもし」は「いも」にて「し」は助字成共云

佛堂薯 つくねいも○東國にて。つくねいも 又つくいも 又山のいも 又やまとなど、稱す。關西にて。山のいもとゝひ 又一名 うぢいもといふ。奥州仙臺にて。はだしいもと云。津輕にて。唐いもと云。土佐にて。手いもと云。上野にて。みねいもといふ

今按に、山のいもと呼所を、し。然ともやまのいもは薯蕷にて。東國に長いもといふ是なり。又藥物の山藥は自然薯蕷を用ゆ。【南郭遺契】「負喧雜錄」引、山藥本名、薯蕷、唐、代宗、諱豫、改名、薯藥、避宋、英宗、諱曙、遂、名、山藥、云云。又「つくねいも」を「山のいも」とい

(1) 名薯蕷

津輕にて。すゞめのだらこといふ。是薯の實也。形きんちやくの如く、又三線のばちに似たり。津輕にては巾着の事を「だらこ」といふ。故に名とす。

東國の俗、四月八日毎に此草をとりて行灯に釣りて、夏の虫の油灯に入らぬ呪ひとす

藜藿 はこべら はこべ ○加賀及東尾張にて。あさしらけといふ（西尾張にては、はこべといふ）丹波邊にては。ひんずりと云

鼠麴草 はこぐさ ○遠江國にて。ちくぐさ、下野宇都宮にて。ねばりもちと云。信濃にて。かはちと云。尾州にて。とうご と云。上總にて。かうじばなと云

世俗三月三日此草を用ひて餅を制し、母子餅となづく。これを蓬にかへて「よもぎ餅」と云。また「草餅」と云。事實は【文徳實錄】に見えたり。又五形蒿と名づく。人日七種の其一なり

火燭菜 さんごじゆな ○播州にて。あかぢさと云。江戸にて。たうちさと云

蠶豆 そらまめ ○東國にて。そらまめといふ。西國にて。たうまめ。出雲にて。なつまめ。尾張にて。のらまめ（同名

ふは、其形山のことく又峰のことし、或、石或、人の手にも似たり、故にかく名づくるなるべし

黃獨 けいも○畿内にて。けいもと云。東國にて。かしゆと云（藥種の何首烏にあらず同名にして異なり）駿遠にて。せつづといふ。相模にて。せんぶと云。仙臺にて。べんけい芋といふ

零餘子 めかご○相州にて。くろめと云。常陸にて。いもしが子といふ。肥前唐津にて。ばんごといふ。常陸の國にて。いふ「いもし」は「いも」にて「し」は助字也。平忠盛の「いもが子はふほどにこそなりにけれ」とありしも、此事とかや。故事こゝに略す

甘藷 りうきういも○畿内にて。りうきういもと云。東國にて。さつまいもといふ。肥前にて。からいもといふ

享保年中薩州より來る。味ひ美にして其性よろし。又長崎にりうきういも・てうせんいもと稱する物有。是は別種にして薯蕷なり

薯 なたな ○（おとこなたな・を・なたな・を・なたな等の名有）○花さく頃。ばちぐさと云。江戸にて。べんく草、尾張にて。ちどのきんちやく・ばどのきんちやくと云。奥之

有。別種也。是は空豆の轉語にや。伊豆駿河にて。五月まめ、相模にて。ふゆまめ、下總にて。ゆきわりまめ、伊勢及遠江にて。がんまめ、中國にて。てんぢくまめと云（空豆とは其實の空に向て生る故になつくとかや）

刀豆 なたまめ ○九州及四國にて。たちはきといふ

眉兒豆 ゐんけんまめ ○京にて。ゐんけんまめといふ。

江戸にて。ふぢまめと云。西國にて。なんきんまめと云。上總にて。さいまめと云。伊勢白子にて。せんごくまめといふ。

【農政全書】眉兒豆これ扁豆の類と有

藜豆 ゐんけんさくけ ○近江にて。はつしやうまめと云。

關西にて。ふぢまめといふ。西國にて。てうせんさくけと云。勢州白子にて。なたまめといふ（同名有。混すへからず）伊勢駿河にて。にどなりと云。奥之南部にて。さくけと云（此所にていふ十六さくけは別也）下總佐倉にて。せんだいさくけといふ。東上總にて。二度十六といふ

莧 ひゆ ○東國にて。ひやうと云。奥、津輕にて。ひやうあかさといふ。加賀にて。はびやうと云○馬齒莧 相模にて。いぬひやうと云○加賀にて。ずんべらびやうと云を、江戸にて。すべりひやうと云

萱艸 くはんさう○信州にて。とつてこうと云。肥唐津にて。くはんすと云

藤蒿 よめがはぎ よめな ○京江戸共に。よめなといふ。畿内の女言に。おはぎといふ。近江にて。はけといふ

今按に。おはぎといふは。齊といふ説は非也【源順和名抄】齊和名奈都那又齊蒿和名於八木 如此出せり。齊蒿の二字「なづなよもぎ」と訓故に「なづな」とす。文字になづます。其いふ所につきて正すべきか。【萬葉】宇波疑又兎牙子と詠せり。後「う」の字轉して「お」となりたるもの歟。其例多し。女詞に「御」の字を冠らしめて「おはぎ」といふにはあらざるべし

獨活 うど○西國にて。しかといふ。西國にては土中に有を。獨活といひ、一二寸地上に生じたるを。うどといふ。尺以上になりたる物を。しかと呼。阿部氏云、松前千砂野の濱より眞の獨活を出す。土人これを。さいきと云。京嵐山にも有。しうど又いぬうどといふ

迷麻 ぜんまい○上總にて。ぜんまといふ（別種に前胡といふ有、上總にては「ぜんまい」をいふ）

番椒 たうがらし○京にて。かうらいごせうと云。太閤秀

て牛房を。ごんほ、又にんじんを。にじ、播磨にて粟の穂を。粟のほ、又るんらうを。るんろ、伊勢にて米一斗を。いつとう、二斗などいへるたぐひ、諸國かぞふるにいとまあらず

南瓜 ほうふら○西國にて。ほうふら、備前にて。まつまゆふがほ、津國にて。なんきん、東上總にて。とうくはん、大坂にて。なんきんうり 又 ほうぶら、江戸にて先年は。ほうふらといひ、今はかほちやと云

越瓜 しろうり○京にて。あさうりといふ。一種筑紫にて。つけうりといふ有。江戸にて。はなまるといふ

菜瓜 なうり○京にて。あをうり、大坂にて。なうり、大和にて。はなんほ、江戸にて。まるづけ、相模にて。かたうりといふ（東國にあを瓜と稱する有。別種也）

絲瓜 へちま○信濃にて。とうりと云。薩州にて。ながうりと云。「とうり」は糸瓜の上略なるへし。或人の曰、

「へちま」といふ名は「とうり」より出たり。其故は「とうり」の「と」の字はいろはの「へ」の字と「ち」の字の間なれば「へち」の間、といふ意にて「へちま」となつくとぞ。又諺に「へちまのかはのたんぶくろ」といふ事有。是は此

吉公朝鮮を伐ち給ふ時種を取來る。故に此名有。西國及奥の仙臺にて。こせうといふ（東國にて眞の胡椒を「ゑのみこせう」といふ）出羽にて。こほしといふ。但奥羽のうちにても「なんばん」と稱する所もあり。上總及參遠にて。なんばんといふ。越前にて。まづものこなしといふ（是は江戸にて番匠の隠語に「かけや」といふもおなし心なり）

苧蒿 しゆんぎく○近江彦根にて。ろうまといふ。京大坂にて。かうらいぎく 又 きくなともいふ。關東にて。しゆんぎくといふ

土筆 つくくし○東國にて。つくくしともいふ（これ略語なり）作州にて。ほうしといふ

佐保姫の筆かとそみるつくくし雪かきわくる春のけしきを 爲家卿

冬瓜 かもうり とうぐは ○畿内及中國北陸道或は上總にて。かもうりといふ。東國にて。とうぐはといふ

東國には「とうぐは」を「とうがん」とはねてよび、又「大こん」をば、「大」といふこそをかしけれ。それにつきて攝州伊丹にては古酒を。こうしう又旦那を。だんなん、大坂にて朝夷奈を。あさいなん、京にて坊を。ほん、畿内に

「へちま」にはあらず。へちくわんが馬の革一駄袋といふ事也。「へちくはん」は茶人にて茶器を革袋に入、馬につけて遊行せしとなり。侍の隠遁したるにて粟田口に住めり。利久いまた與四郎といひし頃、或日粟田くちの庵を尋ける。庵主はもとより道化ものと聞及ひ、與四郎をほしひたゝれにて云入れは、あるじむかひに出、一禮して引込み、數寄屋にしめを張り、あたら敷ひさけに鹽水を入て、笹の葉にて與四郎をあたまくだし清め、三寶にかはらけ、洗米をそなへ、神の影向と名づけ、茶をふるまひかへしたりとなん。よにをかしき物なりけり

甜瓜 まくはうり○西國にて。あじうり、奥の仙臺にて。でうり、佐渡にて。ちんめうと云。○又江戸にて云。ぎんまくはを、備前にて。せんしかと云。奥の津輕又松前にて。しまうり。南部にては。きんくはといふ。眞桑瓜は美濃國眞桑村の産を上品とす。故に名づくとぞ。又越前にて。ねづみ眞瓜といふ。味ひ甘美なり。吐方に用所の瓜苳是なり。其味ひ甚苦し。餘國の産は吐方に用ひて功なし

西瓜 すいくわ○大坂にて。さいうりといふ
錦荔枝 つるれいし○長崎にて。ながうりといふ。是

は苦瓜の轉語なるべし

磐梨 いばなし○京及近江にて。いばなしといふ。北國

にて。すなわちといふ。其葉平地木にて。高五六寸、

三月實を結ぶ。大豆の如くにて圓し。外の色青く、内は

紫黑色、味ひ酸く甘し。京畿の小兒好んで食ふ。漢名未詳

桔梗 からす瓜○伊勢及紀伊熊野邊にて。うりねと云。

越前にて。くそりといふ。土佐にて。ぐどうじと云（其根

を同國にてこびと云）肥前にて。ごうりといふ（和産二三

種有、其核玉づさの如くなるものは王瓜なり）

桔梗 きやう○信州上田にて。くはんさうと云。【古今

和歌集】物名の歌に

〽秋ちかう野はなりにけり白露のをける草葉の色かはり

行

防風 ほうふう○畿内及藝州信州にて。山にんじんとい

ふ（是和名也）

按に、今野菜となす物は濱防風なり。江戸の市にあるも

の相州鎌倉よりをく是を出す。莖葉ふとくして胡蘿蔔

に似たる物、眞の防風なり

澤瀉 おもだか○北國にて。なくと云。畿内にて。さじ

- (1) さいもの
- (2) さいもの
- (3) さいもの
- (4) さいもの
- (5) さいもの

おもだかと稱す。是藥草なり。一種慈姑に似て花さく物を

も「おもだか」といふ。同名異物なり

麥門冬 ぜうがひけ○關西及四國共に。ぜうがひけと云。

東國にて。りうのひけと云。奥州にて。たつのひけと云。尾

州にて。蛇のひけといふ

石蕪 しびとばな○伊勢にて。せそび、中國及武州にて。

しびとはな 又ひがなばな 又きつねのかみそり、上總或は美

作にて。いれいばな 又ひがなはな、越後信濃にて。やくび

うばな、京にて。かみそりばな、大和にて。したこじけ、出

雲にて。きつねばな、尾州にて。したまがり、駿河にて。か

はかんじ、西國にて。すてごばな、肥唐津にて。どくすみ

た、土佐にて。しれい 又しびと花 又すどかけと云。まんじ

ゆしやけと云有。種類なり

酸模 すいば○畿内にて。すいどうと云。江戸にて。すか

んほと云。西國にて。すいばといふ。上野にて。すいきとい

ふ。加賀にて。すいこといふ。【多識】酸模すし 又すいとう

草と有、是也

酢漿草 かたばみ 一名すいものぐさ○京にて。とんぼぐ

さ、泉州堺にて。すも、筑紫にて。こがねばな、出雲に

て。すいぐさ、相摸にて。はすぐさ、江戸にて。すぐさ、奥

津輕にて。すかんこ、尾張にて。すいもの草と云

白前 しらはぎ○江戸にて。しらはぎと云。これ古名な

り。駿河にて。しかみぐさと云。加賀にて。かもめぐさと云。

伊勢にて。ひよいく草と云。按に、葉は萩に似て小白

花咲り。唐種にろくふんさうと云有。上品なる物也

大蓼 せんになさう○九州及東國にて。ふつくさと云。尾

州にて。くつぐさといふ。武州隅田川邊にて。馬の齒かけ草

といふ

立葵 たちあふひ○武州にて。たちあふひと云。勢州に

て。やうらうぐさと云。阿波にて。あれぐさといふ。漢名未詳

蓼若 ほめきぐさ○江戸にて。なつきやうと云。肥

後にて。はしりところといふ。【廣大和本艸】葉、商陸に似て

小也。根、野老に似たり。あやまつてこれを食へば狂走して

止す。故に「はしりところ」といふと云々

鼓子花 ひるがほ○陸奥及上野下野越後にて。あめふり

ばなと云。越前にて。こうづるといふ。相州海邊にて。へび

あさがほといふ

繡指呼 もぢずりぐさ 一名ねぢはな ○筑前にて。しんこ

ばなと云。今按に、果子の類に眞稿といふ物有。關子に

似て制少し異なり。もちずりの花形かの「しんこ」に似た

り。故にねぢはなしんこばななどいふか。尾州にて。繡

繰の眞木の兩の端のろくろを「しんこ」といふもおなじ意

なるべし。又繡の類を果子といふ事は【説郛】見えたり。

點心ともいふ。【勢陽雜記】勢州香海院は絶景の地にて

駿河の富士も見ゆる。此所にて一休和尚發句に

〽海をのむ茶の子か雪の富士の餅

白頭翁 ちごばな 一名しやぐま ○京都にて。うないこ 又

ぜがいさう（善界の謠に、大唐の天狗の首領善界坊と有。

其髪に似たりと也）大坂にて。ひめばな、江戸にて。おきな

ぐさ（是和名なり）畿内にて。ちごばな、美濃にて。がく

さう、加賀にて。けし／＼まないた、甲斐にて。けいせい

さう、木曾にて。かぶろ、越中にて。おにころ 又てんぐの

もとより、仙臺にて。ちん／＼、下野にて。ちん／＼。か

はらちご、筑前にて。ねこぐさ。ぜがいさう、飛騨にて。もの

ぐるひ。かつしき、四國にて。どどとと云

免絲 ねなしがづら○東國にて。さうめんぐさと云。筑

前にて。うしのさうめんと云。案に、下野の四日光山さうめ

(1)ちやうて
まり

ん谷の水中に此草をいし。東武には隅田川に有三稜 みつかど○伊勢にて。さぎのしりさしと云。東武にては井ノ頭の池邊に多くあり(三稜種類あり)

玉樓春 いはくちなし○武州にて。たまてばこと云

石造蓮 まんねんかづら○北國にて。せんだんかづらと云

連錢草 れんぜんさう○江戸にて。かんとり草と云。駿河にて。かたいかりと云。加賀にて。ねぜりと云。此草地に付て生ず。氣味芹の臭有。鉄猪兒の形に似て花半分有によりて名づけて「かたいかり」といふ。花又蓮の香有。故に半邊蓮の名有なるべし。是【廣大和本艸】の説なり。松岡氏曰、唐土の書に半邊蓮と云草有。是日本にて繪に書る唐草と云物也とぞ。案に「かんとり草」は古説連錢草と云。但二種有。蔓生なる物こゝに云「かんとり草」疳疾の藥也。其名によりて小兒喰初の器物に此草を畫く、今の唐草の初也と云未詳 又一種積生なるもの「鹿蹄草」和名まらはらしと云。又。積雪草又けんのしやうこなと云。武江本所三圍稻荷社の側に多く有

烏鳳花 しやちく○常陸にて。とんほはぎといふ

蓬筮草 七だんくわ○甲州にて。ちやうてまりといふ。花の色みどりにして四出一房に數百花つく。葉葎ねばりて衣に付、はなれがたし
鹿蹄草 すゝらん○大和にて。まきをもとと云。江戸にて。べつかうさうといふ。鹿蹄草未詳 江戸には四谷大宮八幡社地に見えたり。同名別種あり
羊乳 つるにんじん○江戸にて。つりがねかづらといふ。木曾山中にてちうぶと呼
瀉羊薑 いかりぐさ○江戸にて。くもきりと云
薄荷 はつか 和名めくさ ○西國にて。めはりぐさと云(ひきをこしといふは山薄荷なり)
沙參 しやじん 和名つりかねにんじん ○山城山科にて。びしやうと云。越中にて。しやぐしやといふ。但馬にて。きいやうもどきとよぶ。筑紫にて。してんばと云。南部にて。やまだいこんと云。上總にて。へびぢやわんといふ大戦のうるし○山城伏見にて。きつねのちいと云。江戸にて。たかとうだいといふ
澤 とうだいぐさ 一名すゝふりばな ○備前にて。みこのすゝと云

(2)ぬすびと
のあし

鴨跖艸 あをばな(つきくさ・つゆくさ・うつしばな)○畿内にて。あをばな又つゆくさと云。江戸にて。つゆくさと云。上總にて。はたをりぐさと云。尾張にて。ほうしばなといふ。加賀にて。こうやめんといふ。近江にて。こんやたらうと云。讃岐にて。かまづかと云。土佐にて。かまづか又ほたるぐさといふ。白石翁の云、よろづのはなは朝日影にあたりてこそ咲に、此花は月影にあたりてさけば「月草」とも云。今按に【新古今集】かすが野の若紫のすり衣と詠る。此すり衣は紫草にて摺たる衣にて、女を紫にたとへたる也。惣して摺衣は地に直に草を摺付るもの也。今のもみぢすりの如し。摺衣四色有。爰に略す。又俗に藍紙といふもの月草にて制したる物といふ

菰薺根 かやつりぐさ○近江にて。とんほぐさと云。常陸にて。ますぐさと云。安房にて。ますけと云。一名連錢草、又積雪草を連錢草といふは、其葉錢に似たる故なつく。同名別種也

蘇菜 じうやくしぶき ○江戸にて。どくだみといふ。武蔵にて。うごくそばといふ。上野にて。どく草といふ。駿河沼津にて。しびとばなと云。越前にて。どくなべといふ

(1)しびとは

升麻 とりあし あはもり ○京にて。あはほと云。下野陸奥にて。もくだと云(同國にて葉を「くさちや」又「にがちや」と云)

遠志 をんじ○京にて。ひめはぎと云。西國にて。野茶と云
天麻 ぬすびとのあし○仙臺にて。ぬすびとのあし 和名下野にて。のづちと云

龍牙 だいこんな○江戸にて。たんごなと云。備前にて。だいこんさうと云。其葉松に似て、實はさやをむすぶ物也。一種狼牙をも大根根草と云。未詳

免葵 いはぶき○越中にて。はこべらと云。加賀にて。はこべといふ。是は正月七日七種のうちの「はこべら」にはあらず

景天 いきくさ はちまんさう ○京にて。べんけいさうと云。筑紫にて。ちとめといふ。江戸にて。いちやくさうと云

今按に、景天其葉厚く薄白、花一所に集り咲て白く、口紅有てうるはしき小花ひらく。莖を伐て糸をもて釣て置にしほみかはきて後雷の鳴る時必色を増す草なり。故につよきといふ意にて「辨慶草」と名つくる歟。又一種鋸葉な

(1) なみだノ
「か」ノ振
假名「ナ」
ノ字無シ

(2) 貫ノ振假
名「ツ」が
「ト」ア

(3) 替ノ振假
名「ア」さ
「ト」ア

る物有。是はきりんさう也。又東國にて冬の日老人巨燵を
をはなれかねるを「こたつべんけい」といふ。其意は巨燵
にのみつよきといふ事也。又關西にて「なみだ辯慶」又は
「泣辯慶」といふは、人に負事きらひにて泣勝といふ意
なるべし。又關東にて菴蓐を尺余に制り、繩を以て中
にさけて、炙たる魚の串と共に貫置物有、名づけて「辨
慶」とよぶ。是は彼の辯慶か七道具といふ差物に似たり
とて名づくる歟

獨頭蘭 ほくり〇畿内にてほくりといふ。播磨にてほ
くろと云。四國にてゑくり、東國にてはくりと云。ほつ
くりと云。ほくりは略蘭に似て愛しつべき花也。奴僕其根
をとりて戦をそくふもの也。關西にて「そくふ」と云は、東
國にて「こそくる」と云詞なり。「そくふ」とは「そくい粘」そ
くひ板などいふか如し

荻 あさど一名すつほんのかぐみ〇近江の天津にてち
やんきんと云。尾張にてちものかぐみといふ(同國にて
泥龜を「ち」といふ)甲斐にてくちじやけ、伊勢にてど
んがめぐさ、同國白子にていけのおもだか、駿河にてな
ぎ。加賀にていもなき、周防にてえんかういもばといふ

の如し

(2) うしせり

石龍芮 たがらし〇京江戸共にたがらし又。たぜりと
云。西國にてうしせり又うばぜり又。ひきのかさと云。上
總にてかへるのきつくと云。下總にてたゝらびといふ
(但「たがらし」と稱する物二種有)

眼子菜 ひるむしろ〇畿内及北越にてひるむしろと云。
關東にてひるもといふ。信州にてびりこといふ。奥の津
輕にてびり物といふ。田夫とりて畝の塵にはるもの也。

【救荒本草】にさゝもと有、實に笹の葉に似たり

(3) かぶな

菰 こも(海草に「こも」といふ有。よつて「まこも」
と云。端午にちまきをまくにこもを以てす)〇陸奥にてか
つみと云

みちのくのあさかの沼のはなかつみかつ見る人に戀
やわたらん

燕子花 かきつばた〇常陸にてかほばなと云(これは
「かほばな」の略語也)

かきつばたを坂東にて筆花といふをきゝて

ふではなといふことはりをきくからに一首はかうそか

きつはた哉 信海

(當國にて「えんかう」といふは「かはたらう」のこと也)肥
後にて。かはいも、備前にて。すつぽんもく、江戸の四方に
て。かへるゑんざ。又。かはと。又。せにもく。又。じゃんくもく
又。かつばのだまし、などいふ。下野にて。くさあふひ。
常陸にて。どぶばす、仙臺にて。だぶなき、越後及越中加賀
にて。がめはな(此國にては泥龜を「がめ」といふ)

今按に 若は蓐菜の類、夏に至りて黄色の花ひらく。一
種白花なるもの有。睡蓮といふ。京都に「ひつじぐさ」
と云、是なり。未、剋よりつほむゆへに名とす。又浮草は
、惣名也。萍といひ、蘋といふ種類をいし。葉の裏に水沫
有ものは蘋、水沫なきは萍なり。又用字艸といふものは
則萍にて別種なり。若は荷に同し。【詩周南】參差荇
菜 又 あさどと詠る歌

おもふことこそ深からぬ浮寝より心あさどのさてそ
生ける

浮菰 なぎ〇畿内にて。さはぎやう。又。水あふひとい
ふ。東國にては水あふひと云(澤桔梗の名はなし)中國及九
州にて。あぎなしといふ。大和及尾張にて。水なきと云。俗に
水葱と書く。花を濯ぎやうといふ。夏秋ひらく。其色桔梗

牛面婢 たそば〇賀州にて。かへる草といふ。江戸にて。
牛のひたいといふ

綿藟兒 つるほ〇山城にて。つるほといふ。筑紫にて。す
いべら。又。たんぱんぐはると云。江戸にて。うしのふし。又牛
うらうと云。田野に多く春宿根より生ず。夏に至て藤色の
穂の如くなる花さく。翁ぐさの花に似たり。高さ四五寸、
根は水仙の如し

蘿摩 ちくくさ〇京にて。ちくぐさ。又。ちくまさう。江戸にて。
ちくぐさ。又。ちくまさうともいふ。上總にて。やいとばな(花
灸に似たり)つくしにて。かぶなといふ。土佐にて。がとい
もといふ。蘿摩は腎を益し、精を補ふもの也。葉の形細
長く厚く兩對して。をもてにうす白く筋有。好事の人は茶
のかはりとなし、又其根を炙て食す。甚甘し。葉莖ともに
日にほして焚ば惡臭を消す。實は細長く三四寸ばかり有。
へちまに似たり。名づけて「雀瓢」といふ。秋の末熟し、
枯て二にわれ、中より綿の如くなるもの出。是を東武藥
店にて和のばんやと云

羊蹄 し俗しのね〇近江及西國にて。ぎしくと云。出
雲にて。しんざいと云。江戸にて。大黃と云。 松岡氏曰

藥家穿眼と稱する物、眞の大黃也。片と稱するは眞にあらず。則羊蹄なりとぞ

(1) れんげば

蘭菊 らんぎく○京にて。らんぎくと云。西國にて。山かうじゆといふ。是は香薷の類にあらず。漢名未詳

聚八仙 かいは○筑紫にて。やぶでまりといふ

車前 おほば○甲州にて。みちばうきといふ。房總にて。ほづきばと云。野州及奥州にて。かへるばといふ

海金砂 うにくさ○京にて。かにくさ又かんつると云。近江及美濃、或は上野にて。たきぐさ又いかづらと云。西國にて。はなかつら又さみせんかつらといふ

董 すみれ○畿内及近江加賀能登又東海道筋すべて。すまふとりぐさと云。江戸にて。すみれと云。上野にて。すまふばな、仙臺にて。かぎばなと云。大和の奈良、小兒。治郎坊太郎坊と云。西國にて。とのゝ馬と云。

董 一名こまひき草といふ。漢名剪刀草、花紫白二色有。共に莖のかたはらに鉤の形あり。兩花まじへ相ひきて小兒のたはふれとす。故に「すまふとりぐさ」の名有。又東武にて「すまふとり草」と稱する別種有。江戸鄙にて「はぐさ」とよぶ草の、穗に出たるを云。漢名不知。尾州

(2) 狐ノ振假名「ゆみ」ノ二字無

方之弧以棘、棘者西方之草也、秋木也、北方之弧以棗、棗者北方之艸、冬木也、是又可稱草也云云

天南星 をほそひ○京都江戸ともに。むさしあぶみと云

蔓吾 つは○江戸にて。つはぶきと云。大和にて。たからこと云

續斷 をとりばな○江戸にて。をどりこ草といふ。信州にて。へほくさと云。【本艸會志】續斷をどりこぐさ、又こもそう草と云と有

(1) ひうがあふひ

菴柏 いはひば○伊勢にて。いはまつと云。武州秩父にて。てんぐのもとと云。和名いはぐみ、又ははぐけと有は、今云「いはひば」也

有通 ありどほし一名とりとまらず ○駿河にて。ねすみばなと云。江戸にて。ありどほしと云。九月實生りて翌年まで持ゆへ「ありどほし」といふ

紫羅傘 いちはつ○伊豆及駿河にて。ひでり草、又萬年草といふ

水仙 すいせん○房州にて。きんだいと云。一重なる物を金、蓋銀、臺といひ、千葉なるを玉瓊玲と云

萼萼 いぬえび○京にて。いぬえび、西國にて。がらみ、

にて。やつまたといふ、是也。貞砂が「足を空なるすまふとり草」と聞えし附句もむかしがたりとなりぬ

碎米菜 けんけ○畿内にて。けんけばなと云。江戸にて。れんげはなといふ。筑前にて。寶幢花といふ。今按に、いにしへにいふすみれ草是なり。今「けんげばな」といふ。葉は柳の葉に似て花紫色、形蓮花のごとし。歌人今古詠賞して「すみれ草」といふ。又正月七日、七種の菜羹のうち、佛の坐と云説非なり。又壺すみれ論物也。こゝに略す。

錢藤 こふち○大和及伯耆にて。ときしらすといふ

燕麥 かるかや一名しもぐさ ○奥州にて。しほがまがやと云。是【本艸】謂燕麥の事にて、和歌に詠する所の刈苳にはあらず。かやは草の惣名か【日本紀】葦姫惣て草の始て生するの名とす。尙異説有。又木、艸に従ひ艸、木に従ふの文字をし。たとへば桔梗、山茶、莫の類にて、草木の稱も相通して難なし。【丹鉛錄】「青史古禮云」男子生而射天地四方、其文云、東方之弧以梧、梧者東方之艸、春木也、南方之弧以柳、柳者南方之艸、夏木也、中央之弧以桑、桑者中央之木也、西

東國にて。むまのぶす、相摸にて。ゑびぞろ、上野にて。山ゑび、上總にて。ゑびと云(がま)よみ又ゑびづるなとも云。則、野葡萄也)

西番連 とけいさう○長崎にて。ほろんかつらといふ。時計草は享保年中始てわたる。西番連となづけて来るよし【笠翁書傳】出

薔苳 すだま○東國にて。すだもと云。上總にて。はちこくといふ

日向葵 ひうがあふひ 文菊 ○江戸にて。ひまはりと云。大和及加賀にて。ひぐるまと云

紫金牛 からたちばな○京にて。からたちばなと云。關東西國共に。やぶかうじと云

鳳尾生 はこねうつぎ○武州にて。をらんださうと云。加賀にて。くろはぎといふ。甲州にて。よめがはしと云

海仙花 さつきばな○仙臺にて。けたのきといふ。常陸にて。山うつぎと云。紀州にて。みやまがすみと云。駿州にて。あかてうじといふ。越中にて。たいほうのきと云。けたのきとは、民俗海參の柁にする故に名つくといふ

南天燭 なんてん○上總にて。らんとといふ。【南留別

志【八種書譜】蘭天竹と云り。からもやまとも「ら」と「な」とは通ふなるべしと有

玉紫 たまむらさき○京にて。むらさきしきみといふ。

筑紫にて。むらさきと云

茶藤 とくしんいばら○畿内にて。ごやをぎと云。江戸にて。ときんばら。また。ほたんばなといふ。西國にて。きくいばらと云

案に、花は白牡丹に似て小なる物なり。故にほたんばなといふ歟。又とびろくといへる酒は此花の色に似たりとて、或は醴醢（びび）或は醴醢（びび）縁等の説有。松岡氏「とびろく」は濁醢の轉語かといへり。【文選】に濁醢「にぎりさけ」と訓す。關西にては「どびろく」と云。關東にては「どぶろく」とも「にぎりさけ」共いふ。松岡氏の説によるべきか

都子 むべ○奥州南部にて。木まんぢうと云。或説に、

是は【本艸】に載る木蓮の實也。秋に至りて熟し、味ひ甘し。小兒好んで食ふ。江州高嶋郡奥島權兵衛といふもの、毎年十一月朔日、禁中へ献。文武天皇のころより今に絶ずといふ。土人此葉を採り煎して瘰癧（れいぎ）を洗

ふ、能崩れずして平癒すといふと見えたり。

天仙花 さるのしり○勢州にて。かきのほいづきと云。駿州にて。さるがきといふ。或説に此樹花なくして實を結ぶ。

うどんけとするも、天仙花をさす也と有。今按に「うどんけ」と稱するは、稀に花さく木をすべて呼にやあらん。無花果【本艸釋名】に「うとんけ」と有。又芭蕉の花をいふ也。又天仙花 未詳

合子草 よめのごき○京にて。ひめうりと云。西國にて。よめのごきと云。東國にて。すめめのうりといふ。安房にて。きんぶんしきといふ

堅香子 かたかご（かたかご古名也。今「かたくり」と云）○奥州南部にて。かたくりと云。江戸にて。かたくり又うばゆり又ぶんだいゆりと云。京にて。はつゆりと云。野州日光山にて。こんべいりといふ。松井氏曰、奥州南部に「かたくり」と云草有。其形百合に似たり。花も

「ゆり」に似て正月頃紫色の花さく。其根をとりて葛の如く水飛して、ねり餅となして食ふ。【萬葉】及【新撰六帖】に詠する所の「堅香子」といふ物なりとぞ

萬葉 ものゝふのやそのいもらかくみまかふ寺井のう

へのかたかこの花

六帖 ものゝふのやそをとめらかふみまとむ寺井のう

へのかたかしの花

手夷 こぶし○奥州南部にて。ひきざくらといふ（一名木筆又迎春花といふ）

笑靨花 こどもさくら○江戸にて。こどもさくらと云。加賀にて。こめやなぎ、畿内及四國にて。こめばな又すゞかけ又ゆきやなぎと云

それはきぬこれは木の根にこほれけり粉米の花の風にうたけて

雪毬花 こでまり○奥州津輕にて。しつがけといふ

八手木 やつでのき○上總にて。うしあふぎと云。（八手木は和品也）

薺艸 しきみ○遠江にて。かうしば又かうのきと云。因幡

にて。はなの木と云。江戸にてしきみの名は勿論たゞ花とばかりもよぶ也。是は「たてばな」の上略なるへし。貝原翁のいはく、薺とはあしき實といふこゝろ也。或人しきみの實毒にあらずといへり。余考るに毒有。誤て食ふべからず。又六月廿四日京師の男女愛宕に詣て薺を求めて下向す

る事あり。しきみが原名所なり。會根好忠の歌に

へあたこ山しきみか原に雪つもり花つむ人の跡たにもなし

木槿 むくけ○東國にて。はちすと云。京江戸共に。むく

けと云。常陸及上總下總にて。きばち又。もつきといふ（もつきんの下略也）九州にて。ほてんくわと云。奥州にて。かきつばき又きばちと云。南部にて。きはちすと云（これ地名なり）【萬葉】に「あさかほは朝露をふてさくといへと夕かけにこそ咲まさりけれ。と詠せし朝顔は槿花ならんか。【和名鈔】に牽牛花「あさかほ」と訓す。【古今物名】けにこしと詠るは、今云あさがほなり。同名異物也

曼陀羅花 まんだらけ○江戸にて。てうせんあさがほと云。總州にて。木あさがほと云。遠江にて。てうせんたばこといふ

五味 さねかづら○大坂にて。びじんさうといふ。東國にて。びなんかづらと云。出雲にて。とろゝかづらと云。伊勢白子にて。くつばと云。土佐にて。ふのりかづらといふ。又さねかづらの實、則藥物の五味子也。相州底倉邊にて。五九の伊と云

寝蓐 さるとりうばらさるとりの花 ○近江及讃岐にて。からたちと云。伊勢にて。かたちと云。備後にて。ほらくひと云。佐渡にて。ないばらと云。筑紫にて。かめいばらといふ。上總にて。かごばらといふ。越後にて。さるかきばらといふ。

俗に倭山歸來とする物是なり。西國にて異名。五郎四郎柴と云。この葉をもつて小麦餅を包む。其餅を五郎四郎といふ故に此名あり

ヘタかほに鏡みせはや五郎四郎 支考

山茶科 れうぶ (はたつまり・はたつもあり、ともに古名なり) ○畿内及美濃尾張にて。りやうぶといふ。遠州にて。ぎやうぶといふ。播磨にて。れうほといふ

今按に、【救荒本草】山茶科、和名リヤウブとある是也。山民葉を採りて蒸て食のたすけとなす物也

木 へ里人や若葉つむらんはたつもありみやまも今は春

めきにけり

枉 まさき○武州にて。まさきといひ又玉つばきと云。上總にて。したはれと云。西國にて。くろぎと云 (薪のくろきにはあらず) 案に、西國にて「玉つばき」と稱する物は

枉にてはなし。白玉椿にて別種也。【後拾遺】に式部大輔資業の歌に

へ君か代は白玉椿やちよとも何にかそへんかきりなければ

とよめる是なり

合歡木 ねぶりのき○京にて。ねぶりのき。中國及四國にて。ねぶのき。西國にて。かうくわんほく、近江及越後にて。かうかのき。關東にて。ねぶたの木と云。周防にて。ひぐらし、美作にて。かうかいと云。【萬葉】ねぶ又かを共詠り

吉利子樹 うぐひすのき○江戸にて。うぐひすと云。京にて。うすの木と云。伊賀にて。こしきぐみと云。奥津輕にて。しだみといふ。木は二三尺に及、小木にて正月小花ひらく。三四月實熟す。赤くして中くほみ形白に似たり。小兒好んで食ふ。葉はつゝじの如し。秋に至て紅葉す。立花の下草につかふ物也。【救荒本草】一名急麻子。和名ウグヒと見えたり

蚊子木 ひよん○西國にて。さるびやうと云。土佐にて。さるぶと云。尾州にて。きひよんと云。今按に、土佐の

寒紅梅 かんかうばい○關東にて稱し呼。西國にては。淺香山といふ

水楊 かはやなぎ○京都にて。さのころやなぎと云。江戸にて。さるやなぎといふ

白楊 はこやなぎ○京師の稱也。筑紫にて。いねやなぎといふ。牙枝にけづり、又扇の箱となす木也

接骨木 にはとこ上總にて。くさじきといふ。上野にて。はなの木と云。南部にて。こぶの木といふ

楠木 ぬるでのき○尾張及上總にて。のでの木と云。上野及信濃にて。をつかどのきと云。陸奥及越前相模にて。かつの木と云 (是は勝軍木といふによるの名なるへし。なを説有) 奥津輕にて。こまぎと云 (天台・眞言宗等の僧徒護摩を修行するに此木を用ゆ。故に名つく)

楠 たふのき 和名たものき ○山城にて。たつの木といふ。長門にて。こがいのきと云。西國にて。つどの木と云。伊豫にて。はながと云。土佐にて。あぶらぬすびとのきといふ。又。あさだの木とも云。上總にて。しほだまといふ。伊豆にて。くろだまといふ

案に、木立葉の形略肉桂に似たり。たゝ肉桂には葉に筋

(1) ねぶりのき

(2) こじきぐみ

國にて此木を「ゆしの木」と云。又俗に「ゆすの木」ともいふ。其末より生ふる虫の巢也。中より出るむしを尾州にて「いんのこ」といふ。此國にてひよんといふ時は瓢の義にてひさご也。又駿州にては祭禮の笛にして吹在所有。又胡椒壺とし、或は瓢箪にかゆるゆへに「ひよん」とよぶとなり

橡實 どんぐり○信州にて。だんぐりと云。又どんぐりの蒂を江戸にて。よめのきといふ。伊勢にて。よめのきといふ。越後にて。ならがまと云。上野にて。よめのきと云。今按に、「はゝそ」と云。つるばみといふは古名なり。今こくぬぎ又こなら又いしならなどいふ。西國にて。は。ならこうといふ。東國にて。こならと云。越前にて。ほろさといふ。どんぐりは則くぬぎの實なり。池田炭は此木をもつてやく。攝州一倉といふ所にてやくといへとも池田炭と稱す

小梅 こむめ○江戸にて。こむめといふ。關西及近江にて。庭むめと云 (これ梅の品類なり)

八朔梅 はつさくばい○關東の稱號なり。西國にて。かんかうばいといふ

有。此木には筋なし。故にやぶ肉桂とも云

山椒 さんせう○薫もなく、味も辛くなき物を、丹波に

て。ひんせうと云

枸橘 からたち○西國にて。けすといふ

樟 あづさ○山城にて。あかめがしはと云。攝州にて。こ

さいばといふ

「こさいば」といふは、朝廷の御祭禮に用らるゝ和名なり。

中華にはこの木に書を刻み、又弓をつくる。故に梓弓、名

有。一名木王

橙 はりのき○東國にて。はんのきと云。奥、南部にて。

やぢはといふ○はんの木の実を、尾張にて。山だんごと云

(染色につかふものなり)

栲骨 ひいらぎ○上總にて。ねづみさしと云

釣樟 くらもじ○越前にて。ねそと云。信濃にて。ぢしやと

いふ

今按に、釣樟、花は黄色にして、實は黒し。香氣有。花

はつほみたる儘にて散る。故に信州にて童謡に「つほやぢ

しやどの咲かで散る」といふ。「つほや」とは「可愛や」

といふ事なり。再案に、越前國にて「くらもじ」の事を「ね

そ」と名づくる説非也。「ねそ」とは一本をさしていふに

はあらず。くらもじの條にても、又外の木のずはへにて

も山人伐てとり、たとへは櫓の輪、或は薪炭俵或は垣な

ど結ぶにも、繩の如く用ゆる物を、惣名「ねそ」と云。

これは「ねりそ」の略語也。古歌にも

「秋の野に萩かるおのこなはをなみねるやねりそのくだ

けてそおもふ

とよめり。なはをなみとは、繩なきといへる心也。山邊

赤人が、わかの浦にしほみちくれはかたをなみと詠せし

も、瀧なきと云事にして、片男浪にはあらずと也

李 すもゝ○美作にて。すむめといふ

柚 ゆ○畿内にて。ゆと云。東國にて。ゆずと云。中國に

て。香橙といふ

箏 たけのこ○上總及房州にて。たんこと云

柴 しば○關西及中國陸奥邊にて。しばといふ(柴は物名

なり)東國にて。そだといふ(美濃尾張にてはくぬ木にか

きりて「そだ」といふ)加賀にて。ほると云。越前にて。ほ

せと云。上野にて。ほやといふ。丹波但馬邊にて。おどろと

云。紀州にて。よどろと云(荊棘の轉語か)伊勢にては葉

べし

蘭甘 たけきのこ○中國及九州にて。なばといふ。北國又

は美濃尾張にて。こけと云。上野下野にて。もたせと云。佐

渡にて。みゝといふ○初茸を美濃三河尾張にて。あをはちと

云。北國にて。松みゝと云。奥の南部及近江邊にて。あいす

りと云。因幡にて。あいたけと云。中國九州ともに。松なば

といふ○紅茸を九州にて。じこうばうと云○檜茸を相州塔

の澤にて。定源坊と云○鼠茸を江東にて。なめすゝきと云。

筑紫にて。水たゝきといふ

松種 まつかさ まつぶぐり ○畿内近邊にて。ちゝりとい

ふ

紫のふどしに似たり藤のはな松のふぐりを咲てつゝめ

ば 貞徳

(1)根ごじ
(2)定源ノ振
假名「じ
ん」トア

の付たるを柴といひ、葉なきを。こがらけと云○又木の小
枝なる物を關西にて。ほせきれと云。伊勢にて。つまをりと
云。坂東にて。かなぎと云【中臣稔】天津金木【文選】以
「筵撞鐘」註。小一木、技也云云○畿内にて。わりきと云を、東
國にて。まきといふ。能登及加賀陸奥にて。ばいぎと云。又な
がし木といふ。越中にて。もへしま五郎といふ
椿 ほた○關西にて。ほたと云。尾張及出雲邊にて。きり
かぶと云。伊勢にて。根ごじと云。安房にて。ねつかと云。
上下總にて。木下といふ。土佐にて。かくいといふ(かぶぐ
る又はかれぐるの略か)武藏にて。ねつこと云。按にね
つことは根木也。根骨にはあらざる歟
川中の根本によころぶすゝみ哉
とありし根本も伐株の事にや。又「よころふ」は構轉なる

物類稱呼 卷之三 終

物類稱呼卷之四

器用

注連 しめ○肥前の長崎にて。かんじやうと云。中國にもかく稱する所多し

屋臺 やたい○東國にて。やたいと云。大坂及西國にて。だんじりと云。土佐にて。はなだいと云。江戸の祭禮には、一萬度大麻の形を制て萬度と云。又はなをかざる故花だしとも云。又だしと云物有。祇園祭の鉾のたぐひなり

今按に、かんじやうとは勸請といふことにや。神をいはひまつる心だてなるべし。又神繩なり共云

(1) 「又神繩なり共云」
(2) 字無シをしがみ

紙手 かうで○江戸にて。をしかみと云。大坂及泉州堺にて。かうでと云。中國及土佐にて。こうじやうと云。今按に、をしかみは、上に口有と云意にて、口上と名付るにや。又土佐にては「幸定」と書よし也

稻扱 いなきき○京江戸共に。いなききと云。畿内にて。ごけたをしと異名。越後にて。ごけなかせと云。上野信濃にて。せんだごきと云。下野佐野にて。からはしと云。奥の津輕にて。せんこきと云。遠江にて。かなこばし、江戸田

は四國にて。あふこと云。九州にて。ろくしやくほうと云。肥後にて。もつこほうと云。古今俳諧歌に

人こふることをおもにになひもてあふこなきこそわびしかりけれ

是は「あふこ」を「逢期」とよみし歌也

飾 ふるひ○常陸にて。ほうろぎと云

(1) 添水ノ振
假名「そふず」ト
アリ
(2) そふつ

案山子 かゝし(わら人形なり)○西國にて。鳥をどし、加賀にて。がんをどし、肥前にて。そふづと云(關西より北越邊「かどし」といふ。關東にて「かゝし」とすみていふ)又添水を、肥前にて。うさぎつゞみ。河内にて。そふづがらうす、上野にて。みづなるこ、信濃にて。しかつゞみ、加賀にて。はじきといふ。貞徳翁の云、そふづは田へ水を添る具にて、板にて持たる物也。「そふ」は添也。「づ」は水也。季吟翁の云、「そふづ」は水邊にしかけて、水の力を添て音を出す鹿をどしなり。續古今

(3) あやたけ

山田もる僧都の身こそかなしけれ秋果ぬれば問ふ人もなし 玄寶

今按に、加賀にて。はじきと云は「藝文類聚」にいはゆる彈敷。其制異なるやうにおもはるゝ也。又備中國湯川寺

合にて。かなごきと云。西國にて。せんばごきと云。今按に、

畿内にて後家たをしと異名せしは、昔は篠竹を三寸斗に切て、鳥の窟の如く制て、掌の中にをさめて、いねをこきし也。近世鐵をもて制たる便利なる物有て嬭婆の業を失ひしに似たり。よつて名とす。此説【和漢三才圖會】に見えたり

連枷 からさぼ(穀をうつる具也)○京にて。まひぎねと云。東國にて。ぐるりと云。越後にて。ふりばいと云。中國及四國にて。からさぼと云。肥後にて。ぶりこと云

碓 からうす○江戸にて云。からうすは、是畿内にて云。ふみうす也。江戸の鄙にて云。ぢがらうす也。今略して「ぢがら」と云。又穀する臼に農家にて云「からうす」「すりうす」の二品有。爰に略す

枌 あふこ(物をなふ木なり。兩はしとがりたるをいふ)○中國及西國にて。あふこと云。長崎にて。らこといふ。四國にて。さすといふ○江戸にて。てんびんほう(物をなふ木にて兩の端丸く、あふこと形少しかはれり)京にて。たごのほうと云。越後にて。かたけほうと云。奥の仙臺にて。かつぎほうと云。遠州にて。になひほうと云。大坂及堺或

の玄寶僧都の故事、又僧都添水の論は歌書の注解【雜事筆海】【和字正濫】等の諸説、考合せて分辯有。又國々に其形異なる品數多しといへとも事繁ければこゝに略す

曝 ちきり(機具なり)○關西にて。ちきり、關東にて。をまきと云

きぬまき(きぬをまく物也)○關西にて。きぬまき、紀州にて。ちまき、東國にて。まへがらまき、下總にて。まへがらみと云

機織 まねき○京江戸ともに。まねき、遠江にて。いのと云

かざり(梭みちをわくる糸也)○關西にて。かざり、武州にて。かけいと、紀州にて。あそび、下總にて。あやいと、西國にて。あぜいと云

あぜ竹(升をわくる竹なり)○關西にて。あぜたけと云を、東國にて。あやたけと云

くさ(經をまく隔に用ゆる物也)○關西にて。くさと云物を、關東にて。はたくさ、西國にて。しとりといふ

杼 梭同、篋○今按に、二品ともに諸國の通稱か。歌に

は梭をなぐるまなど、光陰のうつりやすきを詠格とす。
又李白之烏夜啼詩機中織錦秦川女碧紗如烟隔窓語停梭帳然憶遠人なども作れり。又世俗互に面を和して内心の和せざる人を「ひをする」と云諺有。是は杼と篋とすれあふてひとつ所に寄らぬにたとへたるなるべし尺ものさしたかばかり○武州河越にて。しやく共云。常陸にて。しやくと云

綿筒 わたあめ ○京大坂にて。ぢんき、西國にて。けいまき又。しのまき、土佐にて。へちま又。しのまき、尾張にて。あめ、越後にて。しの、武藏にて。しのまき、遠江及安房上總常陸にて。よりこ又。ねちこ、豊前豊後にて。まるわたと云終機 さつち ○畿内にて。ばんじやうつち、西國及四國にて。さつち、東國にて。さつちと云。又鉄槌を奥州にて。かなさつちと云

鉦 てをの○關東にて。てうな、大坂にて。ちよんのと云鋸 のこぎり ○畿内及山陽道にて。のこと云。上州にて。のこすり、上總安房にて。のふぎりと云。これはいにしへのほぎりといひし名の轉したる也

算盤 そろばん ○薩摩にて。ろくろと云

ぎと云。相模安房上總下總武藏邊に至るまで。かうだいと云(江戸は勿論其國々々の驛合にてはかうだいとは稱せず。わんとのみよぶ也)

今按に、「ぎ」と云事卑賤の詞にはあらざるべし。【續日本紀】に御器膳と有。又「ぢやうぎ」と云へるは則常器也。西國にては「ぢやうぎ膳」「ぢやうぎ櫛」「ぢやうぎ箸」など、云。又「かうだい」といふは、今の櫛の制とは少たがへり。今の世に櫛といふ物は、いにしへ引入合子などいひし也。【壺囊抄】に見えたり【平家物語】に木曾義仲精進がうしの詞あり。【職人盡歌合】に「いなばがうし」などの詞あれば因幡の産を上品とせしにや、今も年の初に門松につくる「藁合子」といふ物有。古き詞なり。○大峰の圖司のわたりにて人々俳諧連歌せしに、いとせばき家なりければ、ゆふけもる器物こしらへる音、席に聞えければ

大峰の圖司のあたりのちかきにやなりわたるらんごきもせんきも 季吟
○平(ひらざら) ○下總及奥州にて。ひらきといふ
○皿 ○常陸及下野にて。かにこといふ

紅秤 ちぎ ○關西にて。ちぎと云。越後にて。きんれうといふ。關東にて。ちぎりといふ
錢 ぜに ○畿内にて表の方をもじと云。東國にて。かたと云。同く裏のかたを畿内にて。ぬめと云。東國にて。なめと云。又錢綰の事を日向にて。つらぬきと云。東國にて。つらぬきと云は、出錢の事なり。尾張にて。各出と云も此たぐひならん。伊勢にて。集錢と云

筥 いかり ○畿内及奥州にて。いかり、江戸にて。ざる、西國及出雲石見加賀越前越後にて。せうけと云。武州岩附邊にて。せうぎ、安藝にて。したみ、丹波丹後にて。いど、遠江にて。ゆかけ、越後信濃上野にて。ほてといふ。又江戸にて。かめのこざるを、畿内にて。どんがめいかり、藝州にて。どどがめしたみ、下野にて。ひらざると云。又江戸にて。御前籠といふ物を、備前にて。しまふぐ又。小き物を。こしをりと云。又關西にて。めかごと云を、東國にて。めかいと云。或。ふ。びく又。こめあけざる、又其大なるを。かたまきと云。其外品類盡しかたし。今爰に略す

椀 わん (飯椀・汁椀・茶椀等の品類あり) ○西國及北國にて。こきと云。東國中國四國にて。日用の飯器を。じやう

坪 ○肥前佐賀にて。のぞきと云。箸 ○豐州にて。をてもと云。又食盤を俗に膳といふ。然とも膳は飯食を兼備ふるの惣名也。又俗に折敷は食机にていにしへ食を「をし」といひし也

猪口 ちよく ○薩州にて。のぞきと云。江戸にて。も底深きを。のぞきちよくと云。又福建及朝鮮の方言に鏡を呼て「ちよく」と云
盆 ぼん ○中國にて。ほにといふ(歌に蘭を「らに」紫苑を「しをに」といふごとく、「に」は「ね」也)

組板 まないた ○駿河及上總にて。きりばんと云。下總或は奥の津輕にて。さいばんと云。信濃にて。まなべいたと云。まなは即魚なり。いにしへ魚菜を「な」と云けり。後「菜を「な」といひて「魚を「まな」といひかへたり

摺鉢 すりばち ○江戸にて。すりばち。大坂にて。すりこばち、山陽道及四國にて。かどつ、西國にて。すりこのばち共いふ。東國の女言に。しらちと云。上總及出羽にて。いせばち、奥州にて。らいばん(描盆か) 同三ノ戸にて。かはらけばちといふ

摺粉木 すりこぎ ○江戸にて。すりこぎ、五畿内及西國

(1) 頭ノ振假名トアリ

中國四國にて。れんぎと云。出雲にて。めぐり、越後にて。めぐり、又はまはしぎとも云。出羽にて。めぐりこぎ、津輕にて。ますぎと云

糖昇 じうのう○京にて。をきかき、江戸大坂共に。じふのう、北陸道及因幡伯耆或は土佐にて。せんばと云。奥州南部にて。ひかきと云。今按、遞火「ひかき」と訓す。江戸にて臺じふのうと云物也。炭鉤、是江戸にて云じうのう也

【合類節用】に十王は

冥官の像の手の形に似たる故十王と云々



遞火



炭鉤

鐵灸 てつきう○上總及信濃越後にて。てつきと云。仙臺にて。てつきと云

飯櫃 めしびつ(めしつぎ)○京にて。いご、上總下總常陸これにをなじ。安房にて。あまご、伊勢にて。さうないといふ

煙筒 きせる○江戸にて。きせる、京にて。きせる、伊勢にて。きせりと云。是皆五音相通にて如此の類餘多あり。たとは江戸にて歌骨牌といふ物を、京にて「うたがりた」と云。ならべたる形刈田に似て、殊に秋の田のかりほの御製歌卷

(2) ひさぎ

(3) とぞ

し物を、後かまといひ、はがまなどいよぶ。安房の國の浦里にて「かなへむら」といふ所あり。大いなる釜のふた、荒波に打あけられて、今なを有とかや。往古かなへむらとなづけたる成べし。又古竈と稱せしは今竈といふ。然とも塩竈・炭かまなどの名遺れり

鍋 なべ○江戸にて。くちなべといふを、遠江及上總下總にて。せんばと云(四國にては銅にて制たるを「せんば」といふ)泉州にて。とりなべと云

(4) 焙爐ノ振アリ

和泉國堺の南に一路菴といふ有。一路上人住給ひし舊跡とて今なを存す。上人は一休禪師同時の僧也。世に在せし頃、一休此菴室に來りて、いかなるか是一路と問ひ玉ひしかば、一路言下に、萬事皆休すへしいかんぞ一休、と答へられしと也。草菴もとより余財なし。手取鍋ひとつ有けるを、窓前に掛置て食を乞ふ。道ゆく人其徳をしたひて、米・穀・菜・瓜のたぐひを施をとりて其日々々の糧とす。一首の歌あり

てとりめよをのれが口のさしでたぞさふすいたくと人にかたるな

(1) 頭に置侍れは、刈田ははなはだ雅名とやいはん○火皿 京にていふ。江戸にて。がんくび、伊勢にて。はぶくといふ○斑竹は羅宇國より出す故にその名あり。羅宇國は南天竺の内、暹羅の西隣國也。又きせるの脂を大坂にては。ずと云

煙盒 たばこいれ○薩摩國の農夫のんこつと云

かくの如の形に桐をもて制たる物也。提鉢塀又は提たはこ入なといふ物に形は殊也といへともをなじ類也。又提たはこ入を、越後にては。やらうと云

今按に、「やらう」とは藥籠の略語なるべし。世に印籠と稱する物は、むかし印石・印肉を入たる器にて、竹をもて小く籠を制、腰にたれたるものなりしが、今藥を貯へる具となれり。やらうと云も此たぐひにてやららん

釜 かま○江戸にて稱するかま



如此を、畿内及西國

四國俱に。はがまといふ(關西にては、はがまの小なるものにて茶を煎して「茶がま」といふ)又江戸にて云ちやがまはんす」とよぶものは、はのなき物につるをかけたるをいふ。四國にて「あられくわんす」とよぶたぐひ也

今按に、上世かなへといひし、あし鼎なる鼎などいひ

約 ひしやく○關西にて。しやくといふ。關東にて。ひしやくと云。もとひさぎにてつくりたり。よつていにしへは

「ひさぎ」といひし也。氣をば生ひさぎといひし也。ひさぎ轉して「ひしやく」となれりとぞ

茶碗 ちやわん○北國及中國西國四國或は常陸にて。てんもくと云。肥前・鍋嶋・奥州二本松にて。いしぎといふ。信州筑摩邊にて。けんぐりと云。此邊の山民は隣家へ行かふに、茶碗を袂に入行て其うつわにて湯茶を飲と也。其ゆへをしらす

整 いりなべ○京にて。いりごら、大和及東國にて。ほうろく、下總にて。いりごら、常陸にて。ちやほうじといふ

今按に、いりなべ俗に「いりがはら」と云。いりごら、いりがら又こうらなといふは共に、いりがはらの轉語なるべし。又ほうろくは「ほうろく」の器といふ意、是釜の屬也【東雅】「下學集」を引て焙爐の字、訓て「ほうろ」と云、ほうろは火色なり。其火を得て、色の變するをいふと見えたり。又「いりがはら」は、土のやきなべといひて、今の制とは形かはりたる物也

湯鑪 やくはん○大坂及中國四國にて。ちやびんと云。

遠江にて。とうびんと云。信濃にて。どりと云。土州の客に語ていはく、我故郷にやつくわんと云有。ちやびんと云物よりは少大きくして口短を云。ちやびんと云は、形丸らかにして口長きを云とぞ。江戸にて其かたちいろ／＼有といへともすべてやくはんと云。又茶びんは其制別物なり

(1) 芭蕉ノ振假名「はせう」トアリ
(2) 「音ヲ」ノ字無シ

土瓶 どびん〇薩摩にて。ちよかと云。同國ちよか村にてこれをやく。ちよかはもと琉球國の地名なり。其所の人薩州に來りてはしめて制るゆへにちよかと名づく。又常陸及出雲或は四國にて「どびん」と「ひ」の字を清て唱ふ。出雲常陸などにては「どびん」となづくるは牛馬の畢丸也。四國にては人の畢丸の大なるをいふとぞ。武藏の國にて春のたはふれにすなる寶曳の親繩といふ物のしるしにつくる物を「胴ぶぐり」又「どつびん」などいふも、此意なるべし提燈 てうちん〇仙臺にて。ひぶくる、常陸にて。をつべしあんどんともいふ。日向にて。へこといふ

行灯 あんどん〇加賀にて。しはんばりといふ〇江戸にていふ。丸あんどんを、加賀にて。まはしあんどんと云。津國にて。あんちやんどんと云。是は「あんしうあんどん」の誤

なにては其器に入て返す物の名をは。とめといふ。又越後にて「つけ竹」といふはむかしは竹を薄くへぎて、今のつけぎの如く用ひたるとぞ。土佐のつけだき、つけだけ成へし

衣架 かけざほ(俗稱)〇上野にて。みせざほ、下總猿鳴郡にてみざざと云。筑紫にて。ならしと云。今按に、みざざは御衣なり。そは「さほ」の反「そ」なれば、「みざざ」と稱するは古き詞なるべし。疑らくは、平、將門の時代の遺風にてやあらんか。又世に衣桁を「みぞかけ」といふも同じ心也。【杜甫詩】翡翠鳴衣桁と有は是衣を曝す竿なり

歩障 ついたて〇豊洲にて。ざちうと云(肥前にて「つきたて」といふは「ついたて」といふに同じ)

剃刀 かみそり〇西國にて。そりと云。奥州白河にて。すりといふ(婦女の用ゆる剃刀の小なるものを。けたれと云は、畿内東武ともに同じ)

櫛 かうがい〇参河及遠州にて。ほせと云櫛 くし〇京大坂にて。たいまいのくしといふを、江戸にて「べつかうのくし」と云

也。小堀遠州侯の物數寄にて制りはしめ給ひしと也

江戸にて。はちけんと云もの有。竹をもて丸く輪を作り、菅笠の如くたてに骨を組て紙にて張、灯を點じて、うつぱりなどにかくる物也。加賀にて。かさあんどん、越前にて。つりあんどん 又は「つほう」又「つほん」といふ。津國にて。もはつほう、武藏にて。さんとく共云。〇灯心を。とうしみと云時は和訓和名と成。縦芭蕉を。はせを、文を。ふみ、紫苑をしをにと云類也。是音和語に用例也

灯籠 かきたてぎ(とうしんをさえ)〇備後福山にて。へけんと云。筑後國久留目に。さんとくといふ。越前にて。かきたてぐる、越後にて。かんだしといふ發燭 つけぎ ゆわうぎ 〇東國にて。つけぎといふ。關西にて。ゆわうと云。越後にて。つけだけと云。土佐にて。つけぎと云。又。つけだきと云

今按に、關西にて「ゆわう」といふは「ゆわうぎ」の下略成へし。又外より重の物にもあれ、何にもあれ、贈り來る器の内へうつりに紙或はつけ木を入て返す事有。硫黄又いわう共いひ侍れば、祝ふといえる心にて、つけぎを入る事ならん。又東國にて「うつり」といへる物を、土佐の國

蟬髻挿 つとさし〇畿内にて。つとさし、東國にて。たほさ

しといふ。關西にて云髪をつとを東國にて「たほ」といふ。中國西國共に。つとはね、土州にて。つとさし 又つとばりと云。加賀にて。つとかうがいと云

罌 てるのあみ(小鳥を捕あみ也)〇關西四國にて。てるのあみと云。京にて。は。かすみといふ。東國にて。ひるてんと云

竹簍 たつべ(魚をとる具也)近江にて。たつめといふ。河内にて。ちんどうといふ。四國にて。うゑと云。武州にて。どうと云。江戸の北いなかにて「どう」と云物に似て、少し別なる物を「ごしうけ」と云。其形椀をふせたるに似たり。いにしへ椀を「がうし」といひければ。盒子魚器とやいひつらん。今は詞ちどみて「ごしうけ」とよぶ也

人偶 にんぎやうてくどつ 〇京江戸共に。にんぎやうと云。豊後にて。でこんほうと云。中國にて。できのほうと云。四國にて。でこ又でく共云。豊前及武藏相模安房上總下總にて。でくのほうと云(これいにしへ「でぐるほう」と云し詞の變したる也。「京大坂のいなかにても「でこ」といふ)又京大坂にていふ。そろまと云人形は、東國にて。のろまと

いふ物也。又京にてつくね人形といふ物を、江戸にてねりにんぎやうと云。又起上（おきあがり）法師といふ物を、勢州久居（せしゅうくゐ）にてうてかへり（うてかへり）と云ふ（この所にてはかたなの鞘（さや）のかへり角といふものを「うてかへりづ」と云。其外もこの類にてをして知るべし）

紙薦 いかのほり○畿内にていかと云。關東にてたこといふ。西國にてたつ又ふうりうと云。唐津にてはたことと云。長崎にてはたと云。上野及信州にてたかといふ。越路にていか又。いかごといふ。伊勢にてはたと云。奥州にててんぐばたと云。土州にてたこと云（上かたにて、いかをのほすといふ。江戸にてたこをあくるといふ。東海道にてたこをのほすといふ。相州にてたこをながすと云）穀匣 こめびつ○東國にてこめびつ、京にて。からとと云。大坂及堺にて。けぶつ、奥、仙臺にて。らうまいびつ 糧米、津輕にて。けしねびつと云（東國西國ともに雜穀を「けしね」と云。余國はしらす）

桶 をけ○上下總州及武藏にて。いがといふ（江戸にて四斗樽、京にて四斗をけと云を、總州にて四斗がといふ。すえふるをけを、すえふるがなといふ）常陸にて。とうこ、

戸にて。たがといふ（同たがかけと云。田舎にてたがやと云）

褌 かます かまけ ○西國にて。かまきと云。肥前島原にて。ゑなまきと云。唐津にては米穀を入れるを「かまき」といひ、錢を入れるを「かます」といふ

苞 つと○西國及四國ともに。すほといふ

木鉢 きばち○江戸にてきばち、京にて。ひきばち、越後にて。ふくばち、土佐にて。きぢばちといふ

杵 きね○出羽にて。うちぎといふ。下總にて。をといふ○腰の細き杵を關西にて。かちぎねと云（かちは搗也。搗粟と云もをなしこゝろ也）東國にて。てぎねといふ。上總にて。きどといふ（婚禮に用る手杵に、鶴龜やうのもやうを粉を以て書くことあり）

梯 はしご○伊勢の長嶋にて。ほうじうといふ又。ごすけと云ふ。

今按に、東海道五十三次の内に、桑名の涉（わたり）より言語（げんご）音聲（おんせい）格別に改（あらた）かはるよし也。將五十三驛とは【山谷詩】鬼門關（くわん）外莫（も）道（みち）遠（とほ）、五十三驛是皇州と有詩によつて定られしと云

豊州及肥前佐賀にて。かいといふ。長崎にて。そうと云（大なるを「ふといそう」といひ、小なる物を「ほそいそう」と云）畿内にて。たご 擔桶（たんぷく）といふを、江戸にて。になひといふ（これになひをけの略也。又になふとは、人ふたりにてもつを云。かつくと云。かたぐると云は意違へり。又「たご」とはをけの惣稱也。上かたにては、なにかたごといふ。たごとはかりいふ時は、畿内西國共に水桶也。東國また豊後にては「たご」と云は糞器をいふ也。【多識】尿管（たご）と有この事にや）京にて。かたてをけと云を、江戸にて。かたてをけ又。さるほう又。くみだしとも云。越前にて。かいみづをけと云。加賀にて。かいけ、上野にて。ひづみと云（造酒屋にて用ゆるかたてをけの大なるものを、肥前にて。たみをけといふ。）

鹽 たらい○奥州南部にて。たいへと云。陸奥にて。せんそくばちと云。因幡にて。はんさうと云。江戸にては。鹽（しほ）を。塩（しほ）と云。又角（かく）だらいいいふものは、耳（みみ）だらいに角（かく）の有物也

箱 たが○京にて。かつらと云（工匠を「かつらかけ」と云）畿内近國及九州四國にて。わと云（同桶のわ入といふ）江

類 とくり○下總にて。ほちといふ。この國にて。酢ほち。酒ほちなと云○江戸にて。ゑだる（とくりの家也）といふを、京及北越にて。たじといふ○江戸にて云ぬりだるを、遠江にて。やなと云。又此國にて酒を嗜む人の、女子を生む時は其名を「やな」とつくる人多し（柳樽の略語なるへし）漏斗 じやうご（酒を器にうつす具なり）○上野にて。すひかん又。すひはくなどいふ（別に米穀を俵に在る竹器に同名あり）

屐 あしだ○關西及西國にて。ほくり又。ぶくりといふ。中國にて。ほくり又。ぶくりと云物は、江戸にて云けたの事也

草履 さうり○江戸にて。こんがう又。のりものさうり（うらおもて共に藁（わら）の殻（か）をもつて織たる物也）畿内西國にて。こんがうと云（乗物さうりの名はなし）○江戸にていふ。かはさうり（竹の皮にてつくりたる物）を九州にて。らなしと云。東國にて。がづさうりと云○江戸にて。なかなきさうりを、京にて。すべさうりと云（江戸にてわらのしべといふ物を、京大坂にてわらすべといふ）因幡にて。わらみごさうりと云○江戸にていふ。わらさうりを、奥州仙臺に

(1) と云ノ下ニ「説ア
リ」トア
(2) こんかう
(3) なかのき
さうり

て。ちりざうりと云。○江戸にて云。ごんすわらちを、關西にて。あつげざうりといふ。九州にて。むしやわらち。又やざうりといふ（小兒のはく物也）。今按に關西和名たちはめといふ物なり。地下にて用るは制異といへとも。こんがうとよぶ。昔比叡山安然僧正貧窮にして書を求る力なし。よつて金剛法器也。を手に持給ひて草履を制しより「こんがうざうり」と世にいひならはしたるとなり

權 かんじき かじき ○畿内にて。なんばといふ。今按に「かじき」はくろもじの木をたはめて輪となし、繩にてあみ、革の紐をつり、大壹尺ばかりあるもの也。北越及奥羽などにて雪沓をはき、かじきを結び付て、道路を踏かたむるに用ゆ。畿内にて「なんば」といふは、深田の泥の上を行ものにて、是則かじき也。西行家集に「あち山さかしく下る谷もなくかじきの道をつくるしら雪

① 乗ノ振假名ノのるシノ二字無
② の訛訛歟

【太平記】曰、かじきを踏さる故、雪中に四五尺落入たりと云々【史夏記】山行 乗 權と有。是山上を行の具也。權は又深き泥を行もの也。又越前にて山の雪崩れて落る時は、山人聲を發して「跡くろもじに端はぜの木、あ

巾着 きんちやく ○豊州にて。ふうづうと云。長崎にて。だらと云。津輕にて。だらこと云

衣 食

羽織 はをり ○安房國にて。はごりと云。阿波にて。どうぶくと云。今按に、姓氏に錦織とよめり。羽織を「はごり」といへるもおなじ心歟。又道服といふ物は、もとより道子の服にして、其制法有。はをりは又旅道中に便よき服なれば、道服共いふなるべし。同字別物也と古人もいえり 袴 はかま ○信濃國木曾路にて。じんぎぶくろ 又 いんぎんぶくろともいふ

頭巾 づきん ○奥州南部の俗。てつべんぶくろといふ。江戸にて。菓づきん 又。がんだうづきんと云を（強盜 東國にて「がんだう」と云）北國にて。ほうしと云。をくそづきん。をくづづきんと云。武州秩父にて。ちよつべいと云（品類多しこゝに略す）

腰帶 こしをび ○東國にて。こしをびといふ物を、畿内にて。かゝえをびと云。又東國にて。しごきと云物を、畿内にて。かゝえほうしと云。肥後にて。てほそといふ（江戸にて

めうしの革で八尋延」といひ、其處を逃去となり。かく呼ぶ時は、其難を遁るゝと云つたへたりとかや、跡くろもじ」とはかじきの輪をいひ「はなはぜの木」とは櫨の木なるべし。鼻緒といふ物を、はちの木にてつくりたらんか「黄牛の革」とは紐の事「八ひろばゑ」は繩八ひろをもつてあみたりといふ事にてやあらん。尙可尋 ○雪車といふ物を越前にて。こいすき。又。こすきともいふ。かじきとは別物なり。そりたる木にて制り、雪の上をすべらかし行ものと見へたり。【堀川治郎百首】

【會津風土記】雪車又作。雪舟。共訓。素履。云々 供饗 くぎやう ○江戸及び四國にて。けそくといふ。東國にて。ろくがうと云。西國にて。ろくごう 又。ごうと云。近江にて。くけと云。越前にて。くぎやうと云。加賀にて。をけそくだいと云（供したる品ををけそくといふ）今按に、ろくごうと云はおくぎやうの訛か 財布 さいふ ○甲州及上野上總邊にて。ざんきちといふ。これ武田信玄陣中にて陳吉と名づけ給ひしといひつたふ

「てほそ」といふは「わたほうし」也。泉州堺にて「こきんわ」といふにをなじ

縹半 じゆばん ○諸國ともにじばんと唱ふ。東國及西國にて。はだぎともいふ。關西にて。はだつけともいふ。越中にて。はだこと云。北國及東奥の所々にて。いらといふ 今按に「ていら」夏の日農民の業をつとむるに着る物也。單にて丈みぢかく紐はありなしにてひらくとしたる物也。又「どてら」といふも「ていら」といふ詞の轉したるなりといへる人も侍れと、今「どてら」と呼物を見るにひとへなる服にはあらず。わたを入たる布子となづくる物也。ていらといひ、どてら又つづれなど云。是皆通音也。其制はかはり有て、名は同し心ならんか。又小兒の褌伴を、肥前及土佐にて。ちんこといふ。【萬葉集】の歌に「たのしみは夕顔たなの下すみおとこはていらめはふたのし

縹鼻褌 ふどし ○東國にて。ふんどしといふ。西國および中國にて。へこといふ。奥州にて。へこしといふ。常陸にて。てこと云（てこをかうなどいふ）「てこ」は「へこ」の轉したるか）畿内及美濃近江にて。まはしといふ。上總にて。

たふさぎといふ。【日本紀】「饗鼻禪」【萬葉集】

「わかせこかたふさぎにするつふれいしよしの川にひをそかゝれる

【和字正濫】「ふみらだし、昌郁翁」説にふみとほしなど有。たふさぎは勝寒の上略也。禮家にはだまきといふ。又相撲を業となすものは「まはし」といふ。其外下をびはだの帯などいふ所有。○二布（女の身に近く腰をふさぐ具也）京にて。きやふといふ。畿内及美濃近江にて。ゆぐといふ。西國にて。ゆのものといふ。上總にて。みゝねと云。江戸にて。下をび。又ゆもじと云。陸奥にて。こしまきと云。津輕にては。よまきといふ

寝衣 よぎ ○奥州にて。よかぶりといふ

雨衣 あまぎぬ 和名 ○江戸にて。もめんが「つばと云。中國四國ともに。あまばをりといふ。肥後にて。じうりん」と云。大和にて。じうりが「つばと云。伊勢にて。じうりと云

今按に、じうりといひ、じうりんなど云。是は時雨凌成へし

清水谷實業卿の狂詠に

「霜月に霜のふるのはことほりやなど十月に十は降らぬ

そ

中院通茂卿かへし

「十月にじうはふらふと誰かいふ時雨はじうとよまぬ物はか

飯 いゝめし ○加賀及越中又は武蔵の國南の海邊にて。おだいといふ。薩摩にて。だいばんと云。出羽にて。やはらといふ（羽黒山の行者のことば其國にひろまりたるなるべし）○小兒の詞に關西關東共に。まゝといふ。又東國にて。ごゝ共いふ（これは供御なるべし。いせ流の女詞にも「ぐゝ」といふ）上總下總の小兒。ばつばといふ（余國にては「たば」といふ）事を「ばつば」といふ。總州及常州にて「まゝ」といふは水のことなり

今按に、飯を「おだい」といふは古き詞也。故に飯を炊く所を諸國通じて「おだい所」といふ。又土佐國幡多郡は西の境也。此所にては女の陰門を「まゝ」と云。専ら少女のをいふとぞ。又往古には飯を「をし」といひし也【古事紀】【日本紀】等に哀須・哀勢など見え侍るは是則食の事なり。今の世に婦人産の時産棚にをし桶といふ物を飾る。「をし桶」は「飯器」をいへり。【徒然草】「御産の時飯おと

いへり。（未詳）

す事は定れることにはあらず。御胞衣とぞこぼる時のまじなひ也。（下略）飯【和名】古之岐。飯を炊く器也と有。又應に餌をするを「をしする」といふも同じ意にやあらん○晝食○畿内にて。おこどといふ。南都にて。けんずいといふ。今按に、東國の農家にて午未の尅の間に食事爲す。こぢうはんと云。或村老の云、晝食を「こぢうはん」となづくるは、午時半と云意なりとぞ。予おもふに農民は形を勞する事はなはたしければ、日の長きころはふたゝびも食すべし。再びめの晝食なるか故に小晝飯なるへしや。駿河國にて。やうびらいと云は「夕晝飯」の轉語にや。土佐の國にて。こびるまといふ。是におなじ。土州にては晝飯をひるまといひ（ひるまゝなり）夜食を。よいと云（夜飯なり）上總下總にて。こうだいごると云は、是は晝飯をいふ（「こうだい」とは汁椀をいふなり）小豆粥 あづきがゆ ○加賀にて。さくらがゆと云。但馬國にて。さふすいといふ。

世俗わたましに赤豆粥を煮て祝ふこと有。一説に是はもと伊豆の國風にて、三嶋明神の氏子伊豆の豆と三嶋の三を繋りて豆三粒入るより、今通じて世上の流例となると

又正月十五日小豆がゆを煮て都鄙家毎に是を食す。【清少納言枕草子】十五日はもちがゆのせくまいる、とかきしも此こと也。をなじ草子に、かゆの木にて女をうつ事を書るも此日なり【狭衣】にも見えたり。今も北國及西國には松の枝、柴などにて男根の形をつくりて女の腰をうては子をうむまじなひとて今もする事也。東國にも簪嫁などをうつ事有。又今日河内國平岡の神社に卜田祭と云有。御粥殿に大なる釜をすへ小豆粥を煮て神供とし、五穀成就の祈念終りて、竹を五寸ばかりに伐て管となしたるを五十四本、それに五穀及色々の種もの五十四品に書分て、釜の中へ投じ、さて一々其管をわりて、粥管の中に入たる多少、或は釜の加減を見てそれ／＼に、何の種は十分、何の種は八分など、神主高聲に吉凶をよみ上る事也。近國の農民群參して其卜の善惡を書付置て、神卜に任せて、農事をつとむる事也。これを平岡の御粥といひ卜田祭とも云。又或人曰、粥を目出度ことに用るは、粥、祝通音のへなりとぞ。又諸國にて此日の粥の初穂をとり置て、十八日の朝これを食べす。その糜（やわらかなるかゆ）粥（かたきかゆ）によりて一年の風雨をト

事有。是を則十八日粥といふ。【千金月令】【荆楚歲時記】の説爰に略す

奈良茶 ならちや○大和奈良にて。やじふと云。畿内にて。ならちやがゆと云（諸國にてならちやと稱するは、ならちやめし也）【宇陀法師】たしかなる夢を掃込む椽の下、といふ句に

若粥わかしづたく火の夜は明にけり、と李由か附たり。李由は近江の産、亮隅律師也

雑炊 ざふすい○河内及播州邊にて。びやうたれと云。加賀越中或、但馬にて。みそづといふ。越前にて。にまぜと云。伊勢にて。いれめしと云。東國にて。ざふすい又。いれめしといふ。婦人の詞に。おちやといふ。又京都にて正月七日の朝若菜の鹽しほを祝ひて食す。これを。ふくわかしと云。大坂及堺邊にては神棚かみだに備たる雑煮、あるは飯のはつぽ等を集置てこた糝こたに調へ食す。これを福わかしと云。こながきとは俗にいふ雑水也。土佐の國にては正月七日雑水に餅を入たるを福わかしと云。武江にては正月三日上野谷中口護國院に福わかし有。大黒の湯と稱す。男女群參すること也

餅 和名もちひ ○關西にて。あもと云。江戸にては

さらば搔餅かきもちによる述懐と云題にて狂歌よめといひ侍れば

老の身の今さら恥をかき餅のむかふ鏡の昔戀しき

吾山

○しるこ餅○江戸にて。しるこもち、京にて。ぜんび、西國にて。ゆるい、出雲にて。にこみ、越後にて。ざふに、上野及駿河にて。ゆるこ、總州及常陸下野邊にて。ぜんびんと云（染餅と書よし也）加賀にて。あづきがゆ、薩摩にて。おとしれとよぶ

牡丹餅 ほたもち（又はぎのはな、又「おはぎ」といふは女の詞なり）○關西および加賀にて。かいもちと云。豊州にて。はぎ餅と云。羽州秋田にて。なべしり餅と云。下野及越前越後にて。餅のめしと云。下總にて。がうはんと云。

今按に「ほた餅」とは牡丹に似たるの名にして中略なりとぞ、萩のはなは其制煮たる小豆を粒のまゝ散しかけたるものなれば、萩のはなの咲みだれたるが如しと也。よつて名とす。かいもちとは、上かたにて「かい」といふ詞は關東にて「つる」といふにをなじ。つる餅になる故にかいもちと云。又粥餅也とも云。いかゞ。奥の仙臺には鮑を日

小兒に對して。あちといふ。○雑煮（餅にいろゝ）の菜肴を加へ煮てあつものとし、年のはじめに祝ひ食ふ。俗にこれを雑煮といふ）畿内にて。雑煮と云。又かんと云。江戸にては新吉原にて。かんと云（おかんを祝ふ。又をかんばしなど云）案に新吉原市中をはなれて一ト廓を構へ住居す、ゆへに古く遺りたる事多し。又淺草の市にて商人の雑煮箸おかんばしとよびて賣侍るも、古く云傳たるなるへし。「かん」とは羹なり。あつものと訓す○せんざいもち京江戸共に云。上總にて。じさいもち、出雲にて。じんざいもちと云（神在餅と書よし也）土佐にて。じんざい煮といふ。土州にては小豆に餅を入れて、醬油にて煮、砂糖をかけて喰ふ。神在煮又善哉煮など、稱すとなり○かぢみ餅諸國の通稱也。圓なる形によるの名なりとかや。東國にて。そなえと呼又。ふくでん共云。越後及信濃にて。ふくでと云 ○搔餅（鏡餅に刀劍をいろゝを嫌て手を以てかく故にかき餅といふ。今又物を以てへぎたるを、へぎもちといふ）越後にて。けづり餅と云。同國にて「かき餅」を氷らせて名づけて。しみ餅といふ。ある人のもとにて搔餅を炙りて出せり。余りにかたかりければ、老の齒には得及ばしといふ。あるじのいふ、

にほし粉になしてもちに制す。名づけて「貝もち」といふ。出羽の最上にては蕎麥ねりと云物をかい餅と云。又下總の國にては糯米を焼て煮たるに、小豆の粉を上下に置いて椀に盛たる物を「合飯」と云。或は「夜舟」といふはいつの間につくともしれぬと云意なり。又「隣しらず」といふも同じ意なるべし。「奉加帳」とはつく所も有、つかぬ所も有といふ心也。【發心集】やせおとろへたる老尼、清水寺に奉加すゝむる所に行、硯をこひて

かのきしにこぎはなれたるあまなれはをしてつくへきうらもなきかな

此歌の心も同じことなり也。又京都にて土藏の壁を塗るいわるとてかい餅を糞す。されば「かいもち」は焼ても火の通らぬ物故にいふての事なるべし

團子 だんご○伊勢にて。をまりといふ。女詞に「いし／＼」と云（尾州にてはひらめに丸きを「いし／＼」といふ）又筑紫にて。けいらんと云有。江戸にて云。米まんぢうの丸き物にて、今江戸にては、いまさか餅といふに似たり（雞卵と書り團子にはあらず）○をとの餅又川びたり餅とも云。十二月朔日につく餅をいふ。中國及九州にて。か

はわたり餅と云

煎餅 せんべい○出羽、秋田にて。をへらまきと云

白雲糕 はくせつかう○仙臺にて。さんぎくはしと云

滑飴 しるあめ○畿内にて。しるあめといふ。西國にて。

ぎやうせんと云。關東にて。水あめ 又ぎやうせんと云。○水

あめは「ぎやうせん」よりもゆるし。又「ぎやうせん」は濃

煎なるべしや。又地黃煎とも書。江戸にては「下り」ともいふ

糯米 やきごめ○奥、津輕及豐州薩州にて。ひらごめと

云。越州にて。いりごめと云。加賀にて春は。いりごめ、秋

は。とりの口といふ

炒 こがし○東國にて。こがし 又 みづのことといふ。畿内

及西國にて。はつたいと云。麥粉と書てはつたいと訓ず。○上

野或は越前にて。こがしと云。○粉のくはし成といふ意と

そ。加賀にて。むぎいりこといふ。○賀州の諺に「しろまぬさ

きの麥いりこなといふ事あり」近江にて。いりこといふ。

奥州及總州肥州にて。かうせんと云

今按に、香煎は是和品なり。洛陽祇園町、江戸にては下谷

の池の端にて制し賣を名産とす。こがしとは其制少し異

なり。然とも此國々にてはこがしを香煎と呼也

菜蔬漬 だいこんづけ○京にて。からづけといふ。九州

にて。ひやくばんづけと云。關東にて。たくあんづけといふ

今按に、武州品川東海寺開山澤庵禪師制し初給ふ。依

て澤庵漬と稱すといひつたふ。貯漬といふ説有。是を

らず。又彼寺にて澤庵漬と唱へず。百本漬と呼と也。又

澤庵和尚百首の中に

「老らくの耳にはうときほとゝきすおもひ出るや初音な

るらん

烏丸光廣卿御點添書に、初音の僧正同日の論にあらずと

云々。

又初音僧正と聞えしは、興福寺花林院別當永縁

「きくたひにめつらしければほとゝきすいつも初音の心

地こそすれ

酒 さけ○出羽にて。いさみと云。和州大峰にて。こまの

はいと云。今按に、いさみといふは羽州羽黒山などの行

者の隠語なるべしを、俗人もそれに倣ひて專「いさみ」と

いふ事にや成けん。「こまのはい」といへるも是にをなじ

かるべし。又畿内の番匠の詞に間水といふ。今は「けづ

り」ともいふ。江戸にて番匠は「けづり」と云。かゝる

たぐひの隠し詞を、東國にて「せんほう」と云。土農の上に
はなくして巧商或遊女野郎の類ひ馬士竹與昇に至まで
符帳詞あり。今爰に略す。又西國にて「けんすい」と云は、
灸治する節、酒食を饗するをいふ○江戸にて參州酒など
の味辛、つよき酒を「鬼ころし」と云。如此の類を美作に
て。やれいた酒と云。野州日光にて「鬼ごのみ」といふ。又
駿河邊にては。てつべんといふなり

物類稱呼卷之五

言語

○大いなる事を五畿内近國共に。ゑらいといひ。又。いかいと云。

(1) わらひかな

(2) どんども

今按に、東國にても「ゑらひ」と云。物の多き事をいひて、大いなるかたには用ひず。上かたにては高大なる事に聞えたり。又いかいは、いかいものといふ時は大い成事、いかい事と唱ふる時は多き事也。諸國の通稱にや。四國にて「いかい」と云は、いかいお世話・いかい御苦勞など、云事にのみつかふ。是も大いなる義なり。古には大なるを「いか」といひしと見えたり。貝原篤信は「いかい」といふは「いかめしい」の略語ともいへり

伊豆駿河邊には、いかいとも又。がんかうともいふ。上野に。野風と云。陸奥にて。でつかいと云（「いかい」の轉語か）仙臺にて。をかと云。又。がいと云（關東すべていふか）又。づないと云。安房上總及遠江信濃越後にて。でこといふ。越後にては大きし。小さしといふを、でこし・のこしといふ。西國及四國にて。ふといと云

(3) 云事なりん

也。【枕草子】「やく」としてといふ詞の註に、役としてとは、わざといふにかよふなるべし
○所の仕來といふ詞のかはりに京都及丹州邊にて。所法則と云。豊州邊にては。恒規と云。大隅薩摩にて。いかたと云。又。捷といふ（をきてとは諸國の通語也）

○見よといふ事を、奥州南部にて。みどうらいと云。南部の方言にてよめる歌に
「見どうらい山にちとべこ雪もありこの春がいさぶうかるべし」

此歌の見どうらいは見よやいの轉語にて、よびかけたる詞なるべし。ちとべこは、ちとばかり也。がいと云は尾張邊より東奥までの通稱には古代よりの詞とこそ聞ゆ。又。べいと可にて、歌には「べら」とも詠り。徂來翁の「あんべいやうもない」といふは田舎詞なりとて今は人の笑ふなれど、源氏物語にも有也といへり。予考るに、見よといふことを、東國にて「見ろ」と云。又。聞よ。置よといふを、きける。をけると云類ひ、古く云ならはしたる詞にや。津輕にては、ちてべこといふも是にをなじ。此所の童謡に「あまりさむさにつらひばた、山にちてべこのこる雪、なんせばぢうか

○多いと云事を。たんと。ぜう。だいぶん。たくさんなどいふ時は關西關東共に通稱なり。又尾張にて。ふんだくといふは、東武にていふ。ふんだんと云に、ひとしき敷。又たんとは足ぬといふ事。膽斗と書く時は【蒙求】「美維膽斗」とへるより出て大なる事也。をいしにはあたらす。又鶴は「をいし」と訓ず。古歌に

「大和なるうちのこほりの戸たて山ぜうにをりたるかきわらびかな」

京にてせんど云。相模にて。たうどいふ。常陸にて。だらくと云。信州上州共に。もうにと云。上總にて。どんと云。遠江にて。しごくだまと云。東國にて。しこたまといふ。仙臺にて。よんこと云。肥州にて。よんにやうと云。是は餘饒也

○わざといふ事を、參州奥州にて。やくとうと云

今案に、わざといひ、わざ／＼などいふ。をなじ詞也。尾張にて。ありわざといふ。東武にて。ありわりといふ。是もおなし意也。わざ／＼といふにもかなふ敷。又東武にて。やくと云詞は尾張邊にて。やわといふにあたる。たとへば、かゝる碁にやくと負んや。又。やはと負んやなどいふ。こゝろ

いどんこに云所の「つらは」は類にて【枕草子】「類枝など云事なり。俗にほう枝なと云にひとし。」「なんせばぢうか」いどん」とは、なんとしやうかいなと云事ならんか。又

【萬葉集】

「草まくら旅のまる寝のひもたえあがてとつけろこれのはるもし」

○勞して苦しむことを、「せつない」といひ。又「じゆつない」といふを、加賀にて。てきないと云。按に、せつなるとは

自語にて今いふ轉語に「せつない」「じゆつない」「てきない」などいふ語に當れり。自語なれば文字なし。「せつない」と云べきを「せつない」と云は、せはしい・せはしないの詞にて考合すべし。歌書物語等にも「せちに思ふ」など書

○いかにしてもと云事を長崎にて。いかなちうつろばつてんからと云

○女色の事を、丹波丹後にて。知音と云。父母のゆるさる妻を「ちいん女房」と云（知音の二字は伯牙鍾子期の故事【出】長崎にて。しやんすといふ（想思を唐音に唱るか）同所丸山にて。がつと云。九州及中國にて。ちかづきと云。長門にて人に始て對面するを近づきに成とは敢いはずして、へ

つしてになると云。薩摩にては女色を「ちかづき」と云。男色を念者と云。土佐にても「ちかづき」と云詞を耻らふ也。奥州にてはならびといふ。南部にてはけいやくといふ。出羽・秋田にてはなぐりと云。江戸にてはいろと云。しやうねと云。又念頃・念者などいふは諸國の通言也。色と云は【經文】「通」女、日、色と有。是による歟。又しやうねと云詞は五六十年來の流言歟。又しやうねとは執念の轉語なるべし。又男女交合することを、信州にてはねつれると云。上總にてはめぐすといふ。

○呵らるゝといふ事を、長崎にて。がらるゝと云。薩摩にて。がらりうはあと云（是はしかられんなり）肥後にて。をぐると云。房總邊にて。をださるゝと云。尾州より遠州邊。をめると云。是を汗面と書時は音語のやうに聞ゆれ共「をめる」は和語なり。又【江家次第】をめるといふは、劣たる事にあたる歟。又畿内にて「ひかる」と云は「しかる」なり。如此の類かそへかたし。尾州知多郡にては「ひとつ・ふたつ」と云を「ふとつ」「ひたつ」とかぞへて「ひ」と「ふ」との相違あり。下野にても「ひ」と「ふ」と、あちらこちらに云在。所有。尾州北在所にて馬を「イマ」と云。又今を「ムマ」と云。

云、是もおなし詞也。但【日本紀】今「ムマ」馬を「イマ」とよませたる所見え侍れば笑ふべき詞にはあらざるか。又安房の國にてはカキケコの牙音をアイウエヤにつかふ。たとへば「百」「二百」など云如き也。上總の東房州境邊是に同じ。すべて東國にて「見えぬ」「しらぬ」など云「ぬ」の字を延て「見えない」「しらない」といふ「ナイ」の反「ヌ」なれば是も則「ぬ」の字の拗音と見るべし。歌にも、松も昔の友ならなくには「友ならぬに」と云「ぬ」の字をのべたる物歟。その外此例を、し

○よひとよといふ事を、關東又は四國にて。よがよつびといと云。畿内にて。よがよさざらと云。【大和物語】よひとよ立わづらひてと有

○方外なる物を、關東にて。だらうくと云。大阪にて。どろばうと云。薩摩にて。没落と云。東國にいふ「どろらく」は墮落の轉語にや。又「どろばう」とは東國にては盜賊を云。おもふに「だらく」變して「だらうく」といひ、又「だらうらく」と云詞ちよみて「どら」となりたる歟。但葬禮の時、僧の鉢をうつもの故に、どらをうつは人の終りなりといふ意にや

(F) 日、無礙
智とあ
れは

○かはいらしいと云詞のかはりに、下總又信濃にて。つほいと云。【大江山の謠】にうち見にはをそろしけなれと、なれてつほいは山ぶしとあり。越後及奥羽にて。めごいと云。津輕にて。いすいと云。武州片田舎にて。むぢこいと云也。上總房州又四國にて。むごいと云。上野にて。いけちないと云。肥前及薩摩にて。むさうと云。是等は皆かはゆひといふ事也

今案に、かはい又かはゆしなど云自語（上古よりの自然の詞を云）ありて漢字渡し後、可愛の字を假借したるもの歟。正字とは見えす。土御門内府通親記云、むけにちかく候はんまでぞかはゆく覺ゆると有。又正親町一位公通卿の狂歌に

さみせん、いとしかはゆし、などゝ詠し給へり

○あぢなし（食物の味ひうすき也）京江戸共に。無味と云（但江戸にてうまくなひともいふ也）東國にて。まづいと云。大和及攝河泉又は九州のうちにて。もみないといひ。又もむないといふ。いにしへ吉野の國栖の邑人蝦蟇を煮て上味とし食ふ。名付けて手瀬といへるよし【日本紀】出。今

云「もみない」とは「もみな」物と云心成べし。いはは助字也。又武藏國桶川の驛近邊にて目摺鮎と名つけて蛙を食ふよし聞り。山東の人目摺鮎を食ふと云事【俗説辨】委し。よつてこゝに略す

○情なきといふ詞のかはりに、大坂及播磨邊にて。いけちないと云。東國にて。むけちなきといひ。又きせちないと云。江戸にて。むぢいらしいと云。【涅槃經】佛性者名曰無礙智とあれば、佛性のなきといふ事なるべし。又あぢきなしといふも情なき心なり

○しぐむといふ事を、江戸にて。はにかむと云。又びじるといふ。東國にて。しぐむと云。又はがむと云。房總海邊にて。がなづうと云。がなづうとは寄居虫の事を云。己か家より外へ出る事あたはず、内に斗居るにたとへたり。遠江にて。やにると云。關西にて。わにるといふ。越後にて。けすむと云。【萬葉集】つものふくれにしぐひあひけん、とよめり。しぐひは、しぐむといふにをなしと有

○久しきといふ事を、出羽にて。よつばるかといふ。【世遙】といふ心か關西關東共に。やつとといひ。又ふつと云（但、多い又よほどなど云詞にも當るか）京に住む人太刀魚に

(G) 詠し給へ
しとかはゆ
たよるし
からんや

(H) 國栖ノ振
ノ字無ク
「す」ト
ミアリ

食傷せし友に狂歌よみておくる
「太刀の魚さして毒とはしらねどもやつと参つたものでかなあろ

(1) 無^レ天^ノ骨^ヲ
(2) わがどう

あるまじき事をするといふ詞のかはりに、東國にて。てんこちもないと云。又つがもないと云詞も是にひとし。【宇治拾遺】無⁽¹⁾天^ノ骨^ヲと有。或人曰、東風は則谷風にて、きはめて地を吹て空を吹ず。されば天に東風なしと云心也とぞ未詳

(3) うら^ノか
いねは

(4) すやつ

○他をさしていふ詞に、畿内にて。吾身といふ。東國にて。おのし。又おぬし。又そなたと云。参河にて。おのさと云(是はおのさまの略語なり)豊前豊後邊にて。わごりよといふ。畿内及出雲若狭邊にて。わごれと云。【太平記】和殿と有。これらの轉語歟。上總にて。にし、下總にて。いしと云。奥州津輕にて。うがといふ。又畿内にて。おどれといひ、對馬にて。あやつ。こやつ。又そやつなど。云詞は、人を罵る心成べし。今按に【萬葉】には。わぬとも。わけとも有。我身の事也。又あれとも。吾とばかりも見えたり。あれといふは彼と云にひとし。【狭衣】に、あはれあれが身にてだにあらばやと有。又【源氏】に。すやつ【枕草子】に。かやつ【宇治

拾遺】に。くやつなと有は今いふ「きやつ」と云に似たり。又そいつと云は其奴なり。或は「そなた」は「こなた」に對していえる詞也。【神代口決】に汝不^レ忘^レ之と有。和歌には汝と詠ぜり。これらのことばのたくひ、かぞふるにいとまあらず。又中品已上の言語は萬國かはる事なきが、こゝに略す

○自をさしていふ詞に、豊前豊後にて。わがとうと云。又身が等といふもおなじ。又身ども。身とばかりもいふ。【正徹物語】身が家は二條東洞院に有しと云々。又「おれ」と云「おら」といふは已の轉語にて、諸國の通稱か。東國にては。おいらとも云。中國にて。うらと云。寄田百姓言葉

飛鳥井雅章卿

田をかるにあつても寒うもあらなくにうら⁽⁴⁾がいねは色になる稻

○穴のあいたといふ事を、九州にて。ほけたと云

○おそろし⁽³⁾はし 畿内近國或は加賀及四國などにて。をとろしいと云。西國にて。ゑすいと云(薩摩にては人に超て智の有を「ゑすい」と云)伊勢にて。をかれいと云。遠江にて。をそおたいといふ。駿河邊より武藏近國にて。をつかない

といふ。飛驒及尾州近國又は上總にて。をそがいと云。

按に「をそがい」と云詞は、恐れ怖^{おそ}いの略語也。こはいの「こ」は反しつゝむれば「か」の直音となる。しかれば「をそがい」とは、恐れこはいの略也。

○こゝろなくと云を、甲斐國にて。けゝれなくと云。又遠江にて九を、「けゝねつ」と云。是にひとし。【萬葉】に心を「古^{ふる}古^{ふる}里」とも有。又【古今集】に

「かいがねをさやにも見しかけゝれなくよこをりふせるさやの中山

○あそこ⁽¹⁾といふを、西國にて。あんなけ⁽²⁾こんなけと云。肥前にて。そこねい⁽³⁾ここねいと云。尾州にて。あそこなて⁽⁴⁾こくなてと云。京にて。あここと云

按に、そこねい⁽¹⁾ここねいと云は「そこに⁽²⁾ここに⁽³⁾」といふ心歟。江都にて、見へぬの「ぬ」をのべて「見えな⁽⁴⁾い」と云にひとしかるへし

○あのやうに⁽¹⁾このやうにといふを、勢州長嶋及出雲邊、又は播磨などにて。あが⁽²⁾いこがいと云。九州にて。あながい⁽³⁾こんがいと云。總州にて。あけ⁽⁴⁾へにこけ⁽⁵⁾へにといふ。又あんな⁽⁶⁾こんなといふは、あのやうな⁽⁷⁾このやうな也。そ

んなといふは、そのやうな也。肥前佐賀にて。そがいと云是なり

○出るといふを、出羽の秋田、或は肥⁽¹⁾長崎又四國にて。づると云。づるは、いつるを上略していふ。能の狂言に「身ともが國もとをづる時に」と云。是出なり。又でるとは出るの上略にてをなし心也。長崎にて。づらんばいと出んかと云事なり。又肥前及薩摩にて「さるく」と云は「あるく」なり。尾張遠江にて「ゆかず」といふは「行んずる」也。馬をやらす、駕籠をやらす、など道中にていふ事也。馬をやらす、かごをやらんずるなれとも、譯しらざる人は笑ふこそをかしけれ。又行を「いく」といふは【萬葉】に多く見えたり

○よいと云事を、筑紫にて。よかと云。若狹にて。ぶすといふ。遠州にて。よかんなと云。西行上人の【撰集抄】に、いとよかなりと有。但⁽¹⁾よかんと讀む口傳なり

○わるいといふ事を、備前及筑紫にて。おろよいと云。若州にて。ぶさぬと云。豊前にては。をろしいと云。尾張邊又は奥州仙臺にて。をぞいと云。上總下總にて。いしいと云。筑紫の方言にてよめる歌に

「櫻ばなさへてなじかい散ていろおろよか風のふいたけい
こつ」

「さへては咲て也。「なじかい」はなせになり、いかなれば也。「いろ」はいる也。あしき風の吹し故に櫻の散りしと也。又「おろ」とは「おろふる雪」など、歌にもよみて、少の事をいふ。然ともこゝに云「おろよ」は少しの義にてあらざるべし。西國に「おろの島」といふ一島有。此地の詞は皆さかしまにて、よいと云事をわるいと云。大いなるをちいさいといふたぐひの方語也。さればおろの嶋にて「よい」といふは、西國にて「わるい」といふ事なれば、おろよいはわるしと云事也。又「をぞい」とは尾州奥州邊にて、物のあしき事也。然るに駿河わたりより武藏上野邊迄、物事かしこき事に云ならはせり。もとより自語にして、相當の文字なければ猶更はかりがたし。【和字正監】には「からすてふ大をそどり」の歌を「おほをぞどり」と濁音によみて「あしき鳥」の事とし「我心からをそや此君」と云るも「をぞや此君」とあしきに解したり。其清濁は予しらす。東國にては賢事をも「をぞい」と云侍る也。又南總にてあしき事を「いし」と云。畿内又東武にて味の美なる物を「いし」と云。

(1) をぞや
(2) しらす

但し助語なるにや

○右へ・左へといふ事を、武之秩父にて。ゆふじ・きうじと云。奥州にて。鑿方・植方と云。案に山路にて石工の云出せし詞にや

○つかはせといふ詞を、大坂にて。おこせと云（おこせは送り越せといふ詞の略なり）京にて。くせと云。江戸にて。よこせと云。羽州秋田にて。のべろと云。尾張にて。いこせと云。【萬葉】ハ盛爾染而於己勢多流、又菅公の御歌に東風吹はにほひおこせよ梅の花と詠しさせ給ふ。又源信綱、俗間に物をかりて返さぬを「横にねる」といふは「おこす」といふの裏なるへしとの給へり

○くるゝといふ事を【神代卷】養と有、人に物をあたふる也（出羽にて。けると云（くれろ也、「くれ」の反「け」なればなり）又。けとうらいともいふ。案に、くるゝとは自語か。但有下を略して「クダサレ」又略して「クダレ」又略して「クレ」となりたる詞か（他より我にあたふる也）【徒然草】に、よき友三有、一には物くるゝ友と有。又【十訓抄】に云、むかし無縁なる法師、人の許にて物こひけるに、東おもてに居たる人はあたへず、西おもてにあるひ

女の詞に「をいし」と云。これ又「をぞい」の詞とひとしく表裏の違とやいはん

○すてると云事を、東國にて。うつちやると云。關西にて。ほかすといふ（東國にて。ほうるといひ、越州にて。ほぎなげると云は投やる事なり）【伊勢物語】に「ぬきすを打やりて」と有。此ぬきすは女の手洗ふ所の竹にてあみたる簀のこを云。打やりてを東國に「うちやる」とつめて云也。又ほかすは渤海・拾といふ三字の頭字を一字づゝ取ていふとぞ。又放下すにて、禪家の語也ともいふ

○負ふと云事を、東國にて。せうと云（背負ふのちどみたることば也）長崎又四國にて。かるふと云。東武にては荷を負ふて賃銀を取ものを「かる」と云。又物を荷ふ番といふ物を、泉州堺にては。かることいふ。又淺草御藏前にて。小揚といふ物は、大坂にて。中仕と云にひとし

○東へ西へといふ事を、肥前にて。東さなへ・西さなへと云案に、邊といふ事を、薩摩にて。さまといふ。東さなへは東さまへの轉したる詞にて、東の邊と云事なるべし。又江戸にて日のくれかたを「日くれさま」と云は、日の暮る有様の略言なり。賑かき・寂しさなどの「さ」も有様ならんか。

とは時々物をとらせければ

「を」をこなひをつとめて物のほしければ西をぞたのむくるゝ方には

とよめりけるとぞ。又芭蕉翁あるとしの十五夜に
「米くるゝ友をこよひの月の客

○なに事じやといふ事を、上總にて。あんだちふと云。會津にて。あんちふだびつちふだと云。あんだは何ぢや也。

「ちふ」は何々と云言をつとめて、何々「ちふ」とも、何々「とふ」とも、何々「てふ」とも、上代よりいひし言なり。

戀すてふなど歌によめるも、戀すといふ詞なり。長門又は土州の山家にて、何ちふと云。又事ぢやと云を、京近邊西國にては「何の事ぢや」とつめて云。尾州邊にて「何の事ぢや」と直にいひ、東國にては「何の事だ」とはねて云。

是等のはねるとつめるの相違は風土のならはし也

○たのみなきといふ詞のかはりに、上總にて。ろかいのな

いと云。案に櫓櫃は俱に舟の具也。曾禰好忠の「ゆらの戸をわたる舟人かちをたえ行衛もしらぬ」と詠せし歌考合すべし

○ある時にと云事を、長崎にて。あるばつせんと云

○くたびれといふ事を(草臥とは山伏の入峰修行より起れる詞也、と貝原の説也)畿内にてしんど云(「しんろ」の轉語にや。「しんろ」は辛苦なり)伊勢にて。さんなうきけた。又ひどうきけたと云。薩摩にて。だつたと云。東國にて。かつたるいと云。又ぢちたとも云。徂來翁の「こうしたり」とは困の字なり。田舎人は「ぢちたり」といふといへり。又肥前の佐賀にて。ぬたのごとしといふ。

○打擲すといふ事を、肥前の平戸にて。とらすといふ。同國佐賀にては。つくにうにやせと云。「つくにう」とは天窓の事をいふ也。豊前にて。くれつけると云。肥後にて。きいつくといふ。良基公「神葉日記」云、神人をはらひうちはりしかば、と有。しからば人を打を、はるともいふ。但杖棒などにて打を、たぐふつといふは諸國通していふか。「はる」といふは拳などにて打事成へし。

○ゆるやかに坐する事を、京大坂にて。じやうらくむといふ。關東にて。あぐらかくと云。又ろくに居る共いふ。大和及伊賀伊勢遠江にて。あづくみと云。南部にて。をたびらかくと云。加賀にて。あいぐちかくと云。越前にて。あぐしと云。肥前及薩摩にて。いたぐらみといふ。肥後にて。いたぐらめ

といふ案に、じやうらくとは藏六也、龜の首尾手足の六を藏に似たれはかく云。然らばじやうらは轉語か。【和漢三才圖會】常樂とも見えたり。又あぐらと云。「ア」は脚也「クラ」は坐也。【日本紀】跣坐讀で「うちあぐみる」と云か如し。又胡床俗にいふ床几也。これより起たる名なりや。又ろくといふは直の字に當か。物を直に置事を「ろくに置」といひ、直ならぬ人を「ろくでなし」と云。琉玖人の「アンジキ」と云も、ろくに居る事をいふと也。

○かりそめと云詞のかはりに、畿内にて。あじやらと云。東國にては大抵の事ならぬを云。考るに其意をなじ○あとかたもなしといふ事を、關西關東共に。とてつものいふと云。下野にて。とつべいもないと云。遠州にて。しやうくもないと云。【性理大全】塗轍とある是歟。又江戸にて。とつけないといふは轉語なるべし。

○やをら(そつといふ心、又少しのこゝろも有ことば也)西國および常陸にて。やうらと云(そろくといふ事に用ひていふ)【源氏橋姫卷】に云。「ひめ君御視をやをら引よせて」と有。尾州近國にて。こそくと云。伊豫にて。ほし

(1) 如ノ振假名「こと」ニ字無シ

くといふ

○急にといふ事を、豫州にて。あたぐにと云。【古文】遽又あはて又あはつなど云は「あはたし」也。あたぐにもあはたししの轉したる詞にや

○目さむるといふ事を、薩摩及肥前にて。をぞむと云(尾州にては、をそるゝと云事を「おぞむ」と云)

○明日・明後日といふ事を、播州赤穂にて。あすてり・あさつて照といふ(この所鹽濱なれば日和よかれと祝していふなるへし。土佐にて。きのふり・ゆふべりと云も是に同じきか)

○雨降らんとしして日和になりたるを、畿内近國にて。日なをるといふ。東國にて。俄ひよりと云

○日和の定らぬを、尾張にて。一兩日和と云。筑紫にて。一石日和と云

今按に、尾州にて鈍々したる日和と云を、金子の貳歩々々にとりなして、一兩の天氣と云。又一こく日和といふは、雨ふらんや、ふるまいやといふを、筑紫にて降うと云ふるまいごとと云。【十六夜日記】阿佛の短歌に「今はたぐくがにあがる魚のごとかちをたえたる船

の如、などよめるにて「こと」は如し也。如々を米穀などの五

斗五斗になぞらへて、一石日和と云。又天正文祿の頃會呂里新左衛門と云者有。泉州堺の住にて轉師也。細工の名譽を得たり。刀の鞘口にそろりと納るをもつて異名とす。太閤秀吉公朝鮮征伐のをりから、一首の落首をぞたてける

太閤が一石米を買ひかねてけふもごとかいあすも御渡海

又江戸に一石橋と云有。【江戸砂子】に後藤氏の兩家かの橋の前後に有。故に一石橋と名くと有。これ皆同日の談なり

○羞明といふ事を、中國にて。まほそしと云。江戸にて。まほしいと云。東奥にて。まじぼひと云。美濃尾張邊にて。か

はゆひと云。土佐にて兒童など。ばいひといふ(「ば」の濁音は「ま」の清音にかよふ也)

○あたらしいといふ事を、相模にて。にひしいと云。たとへは新宅を「にひ家」といふ。總州野州をなじ。上野にて。にひ家と云も是又同し詞也(古代の言なり)

○うつぶくと云事を、肥後にて。くるほくといふ○律義なる人を、中國にて。まてな人と云。畿内及東國に

(2) まじぼひノ振假名「イ」ノ字無シ
(3) かはゆひノ振假名「イ」ノ字無シ

- (1) 尾花にて
- (2) 云小田原
- (3) 玉たれ

て。またうと云。案に「またな人」又「またうど」共に全人と云事也。【萬葉】「全手」と有は左右の手の事にて諸手とも書よし、同抄に見えたり。これは別なり。

○太義なといふ事を、薩摩にて。だりがていと云。常陸にて。ほりないと云。上總下總にて。こわいと云。仙臺にて。うさねはくと云。

○なぜと云事を、薩摩にて。なじかいと云。古き歌に「大和かい西はあじかを關東べい都こさんすいせをりやります」

西土にて「あじかを」と云も「なじかい」といふにひとし。總州及東奥にて。あぜといふ。江戸にて。なぜといふ。京にて。なぜにと清ていふ。案に、なぜとは胡也。とがめたる言葉也。【萬葉】に「あぜそもこひよしるきまさめ」と詠り。古き詞なり。

○脇へ退といふ事を、上總邊下野にて。ちやがれといふ。へちやがれはあかしやしや庭のきりくすをなし所にねまりてぞなく。

下野の方言を詠たる歌也とて古くいひつたへたり。はあと「ははや」也。すべて東國にていふ詞也。かしやしやは「か

(1) めてらし

には、時代の流言詞といふものひたもの出来て、古きは皆かはり行に、田舎の人はかたくなにて、むかしをあらためぬ也。此頃は田舎人も都に來りて時の詞を習つて行て、田舎詞もよきにかはりたりといふは、あしきにかはりたるなるべし。

○互に人を雇ひつ、やとはれつする事を、武州及上總にて。えいにすると云。下總邊にて。いひにするといふ。今案に、これはいにしへ「ゆひする」といへる詞の轉したる成べし。俊賴朝臣の歌に

此里にゆいするひとのなきやらんみふしたつまで早苗とらねは

○たづねるといふ事を、播磨及出雲邊、又土佐にて。とめると云。京加茂の南堤の下に西念寺といふ有。西行法師此寺に暫く住す。庭に梅あり。愛翫ひて

へとめこかし梅さかりなる我宿をうときも人の折にこそよれ

此歌の「とめこかし」は、求めこよかし也。尋る同意也【萬葉】尋とあり

○めてたきと云詞のかはりに、長崎にて。けいくわんと云。

しましや」也。ねまるは居ると云ことにて奥羽又は加賀なとにて云。尤古代の詞也。出羽の尾花澤⁽¹⁾て、はせを翁の發句にもきこえたり。又【舉白集】云、小田原と云所の宿にとまる。明れば玉だれの小瓶に酒少し入て棕めくもの御前にとてさしいづ。あるしのおとこにやあらん。けふはめてたきせちに候。一盃けしめされ候へかし。とあいたちなくいふも顔まほられぬへし。しどけなき事打語て、今しばしねまり申べいを、それがしが旦那のえらまからんとて立ぬる。彼かふるまひにつけて(下略)此文章を見る時は、相州邊にても「ねまる」といふ詞を遣ひたるとおもはる。むかしはすべて通語にや

○しらぬといふ事を、上總にて。いちやしらぬと云。上總の國人の云、いちやは一社也。其故は上古當國に鎮坐の神靈のうちに一社其祠る所の地を今時知るものなし。よつて國俗、物のしらざる事を「しらなひ」といふとそ。予が云、是妄説なり。いちやはいさ不知なり。邊土は其國かぎりの地音にして、却て古代の詞遺れり。然るに方言郷談にも漢字を主とするの誤より、あらぬ説も出来る也。徂來翁の云、いにしへの詞は多く田舎に残れり。都會の地

今按に、けいくわんとは慶歡と書にや。又めてたきといふに品有、散れはこそいと櫻はめてたけれといふ歌の「めてたき」は愛の字也。花を愛したるの心也と、宵柏老人の説也。めでる・めづるなとよむ同し心也。又珍の字「めづらし」とよむは、めでらしの轉語にや

○嫁といふ事を、出羽及信濃にて。むかされと云。薩摩にて。御前むかひと云。案に「むかされ」は迎えらるゝのちとみたる詞なるべし

○夕を、東國の詞に「よんべ」と云。今案に、【遊仙屈】宿「ヨベ」「ヨンベ」と訓ず。又【萬葉】「大伴、郎女が歌にへあまさはりつねする君は久かたのよんべの雨にこりにけるんかも

【土佐日記】舟子のうたふうたに、よんべのうなひもかなひもがなと有。又今夕を「ゆふべ」といふは勿論の事にて、昨夜の事をよんべと云。萬葉の歌并土佐日記に云よんべも昨夜の事とぞ聞ゆる。又一昨夜の事を、きのふの晩といふは是か非歟。又人の寝る事を「をよる」といふは御夜にて、「をひんなる」は御晝なるにや。黄昏は誰彼也。曉更⁽¹⁾は彼誰也。其さだからぬ所をいふ也

○他人を馳走する事を、上總にて。ほとめくといふ

○醜き女を諷する詞に、西國にて。ぶつそうづらと云。東國にて。腹立顔を。ぶつてうづらと云。【袖中錦】云。胡國の婦人黄色の物を以て面に塗る、これを佛粧といふと有。又佛頂面とは面ふくらして螺髪を見るがことしと云たとへ也ともいふ。又東國の俗、人に對するに和せざるを。ぶにんさうといふは【金剛經】に「無人相」とあり。此事なりとぞ

(1) 雨々ノ振
假名「さ
トアリ」

○おめきさけぶと云詞のかはりに、九州及四國にて。おらぶと云【神代卷】哭聲と有。いたくこゑをはかりに泣をおらぶと云と聞えたり。【平家物語】をめかせ給へと有は「うめく」といふにひとしき事にや。東國にておめきさめくといふは、おめきさけぶの轉語か。雨々と泣なといふ心ならん

○咳をせくと關東にていふを、關西にて。せきをせたぐる」といふ。播磨邊にて。咳をたぐる」といふ。阿波にては。せきをこづく」と云。中國にて。咳をこつる」といふ。【神代卷】にいざなぎの尊たぐりす、金山彦の神となると云云。又東國にて。咳ばらひ」と又「しやぶきする」といふは、咳嗽のちとみたる詞にて通稱也

てほとびにけりと有

○なぶる（手にてなれふるゝなり）關西にて。いらふと云。東國にて。いぢる」と又「いびるといふ。西國にて。あつかふ」といふ

○ざれたはふるゝ事を、上方にて。ほとえると云。關東にて。をどけると云。又「うけるといふ」と又「そばへるといふ。陸奥にて。あだけるといふ。【源氏】おどけたる人こそたゞ世のもてなしに隨ひと有【春曙抄】そばへとはざればこりたる也と有

○さうじや・かうじやと云を、安藝にて。さあつく・もうつくといふ

(1) けわかう
へなる
(2) 消ぬかう
へなる

○物に驚くことを、東國にて。たまけると云。下總にて。ちめうしたと云。津輕にて。動轉したと云。出雲にて。をびへると云。又「肝をつぶすと云。びつくりしたなどいふ詞は、諸國の通語也。土佐の西境にては。たまけるといふ。上土佐中土佐には此稱なし。薩摩にては。たまがると云。案に、東國にていふ「たまける」は【源氏】に魂消ると有。「ける」は消也。「けめがうへなるふじの初雪」とよめるは、消ぬがうへなる也

○めいわくといふ事を、上野にて。さぶけさんがいといふ

○道路のぬかりを、關西にて。しるいと云。東國にて。ぬかりといふ

へあぜおこす苗代水のほと見えて道のぬかりのかはくまなし

又道のすべるを、常陸にて。なめり道といふ。案に、是に似たる事有。俗に「猿すべり」と云有。歌に「猿滑」とよめり

へあし曳の山のかけちのさるなめりすへらかにても世をわたためや

深山に猿すべりといふ木有。百日紅に同して葉粗厚く、四時不凋、花さかず。此木を酒家にて榕木とす。又寺院にて撞鐘の撞木に用ゆ。又百日紅は夏秋に花さき冬に到て葉凋む木也。同名にして少異也

○跨といふ事を、東國にて。あごむと云。跨を「あとこ

ゆる」といふ足迹のまたがりこゆると云意なりとぞ。又「あごむ」は「あとこゆる」の轉語也

○水にものを浸す事を、關西にて。ぼとばかすと云。東國にて。ひやかすと云。【伊勢物語】かれいひの上に泪をとし

○養生といふを、但馬にて。やうすけるといふ

○正直といふを、播磨にて。うちぬきといふ

○いつはりうそといふを、房總にて。うそをかたると云。常陸下野邊にて。ちくとも、ちくらくとも云。尾張にては謀計なる事すべて深きたくみを「ちくらく」と云。江戸尾張邊及上野にて。万八ともいふ（近年はやりことばなり）九州にて。すうごとと云。又彌助といふ（はやり詞か）又。千三ともいふとぞ。按に、千の偽の内に實三ともあらんかといふ意にや。万八といへる流言も是に似たる事なるべし。又

いすかなどいふ。是はうそ鳥の蟻なればかく云にや。いすかといふ鳥はくちばしの合ぬ故、口の合ざるにたとへたるか。【萬葉】「乎曾と有は今云字會也

○やくたいもなしといふを、奥の南部にて。ぎがないといふ

○いかやうにもといふを、伊豫にて。どうばりと云。土佐にては。どうまれ・かうまれなといふ。案に、土佐にて「どうまれ・かうまれ」と云は「どうもあれ・かうもあれ」なり。豫州にていふ「どうばり」は、是も「どうまれ」の轉語也。東國にて。なでう。あでうなどいふは「いかやうな」といふ意也。【紫日記】なでう女のまじふみ、とあり

○是ほどいふ詞のかはりに、西國にて。是しこ。彼しこと云。伊勢にて。これほどき。あれほどきと云。肥久留米にて。是しころ。あれしころと云。東國にて。是しき。あれしきと云

○はなはだしきといふ詞のかはりに、尾張にて。りうとと云。又。きうととも云。「りうと」といふ語は、物を振廻し、或は物を打時、或は走る時など、猶豫なくけはしき事を「りうく」と云語有。其如くはけしくゆるかせにせざる事に用ゆる詞なり。上古よりの自語と見えたり。たとへば「フハ」の語を「浮和々々」と書て正字の様に用ゆる事妄説なり。強て文字を施時は、和語も漢語のやうになり行やせん

○物を借るといふ事を、甲斐國にて。いらうと云。案に、東國には物を借ると云時。かりいらひと云詞有。同じ心ばへなるべし。たゞ。いらうとばかりは唱へず。又京都にて。借つてこいといふは、江戸にていふ借てこい也。京にて買ふてこいといふは、江戸には買つてこい也。西國にていろはぬといふは、かまはぬと云意也。土州などにていろはぬといふも、物に手をふれずかまはぬと云にをなし意なるべし

ねきといふ。根際ねぎの略なるべし。土州にて。いつきに。ねきといふは、すぐに近所をいふ也

○外の事を、西國にて。あだと云。常陸及奥州にて。とはと云。上總房州にて。とでといふ。【日本紀】外と有（上世の語にや）「とは」とは外端にて、そとのはしといふ意歟。「はし」は「はな」ともいふ也

○物に饅かひの生したるを、上總にて。かもじれると云。案に、饅かひの和名「かも」と云は羚羊かみの皮を敷物にする故に名づく。關東にて「かもしか」と云是なり。冬瓜かぼちゃといふ物も、冬に到れば白毛を生ず。故にかもうりといふ。物の饅も白毛を生ず。よつて「かもじれる」といふ

○焦臭こくしを、京にて。かんこくさしと云（紙臭なり）東武にて。きなくさいと云（木にてはないにほひ、と云ころ）尾張遠江邊にて。かこくさいと云（京にをなし）近江にて。やぐさいと云。和泉にて。かこびくさいといふ。奥州にて。ひなくさいと云。津輕にて。ふなくさいと云。薩摩にて。かなくさいと云。土佐にて。けふらぐさいと云

○おるかにあさましきを、京大坂にて。あんた又 あんだら共云。伊勢にて。あんかう又 せいふと云。越中にて。だらけ

し。東國にても「いろふ。いらはぬ」などの詞あれ共「いちる。いちらぬ」と云方多し。尾州にていちるの語は物を頼みて催促する心に用る也

○ぎしむ 畿内の語也。關東にて。りきむといふに當る言也。上總にて。ぎしやばると云。仙臺にて。ぎづむと云。これ皆をなじ心歟。ぎしやばるは義者振の轉にや。又義者「張」といふ事なりや

○直ちやうにといふ事を、大坂及尾州邊又は土佐にて。いつきにといふ。其意は休まずして一息に物をする事也。關東にて。すぐさまといふも是にひとし

○他と連立行を、東國にて。同志どうしに行といふ（一所にいかふともいふ）播磨にて。つんのふて行と云。又誘さそて行を、尾州にて。をこづらるゝと云。又いざかつせと云も人を誘詞也。

【日本紀】誘と有。又いざかつせは「いざ」は發語也。さそふ也。東國にて。さ。御出みで。「さ。いかう」と云詞にあたる。

「いざ」とも又「さ」とばかりも唱ふる也。「いぬる」はかへるなり。「いなふ」は歸らん也。「いんでは」歸りて也。如此の詞は諸國かそへ盡しかたし

○際さい（そばと云に同じ心か）畿内また尾張邊播州邊にても。

と云。因幡にて。だらすと云。信濃にて。だほうと云。奥州にて。ぐだまと云。豐州にて。をうかましと云。尾州にて。をいさと云。俗に馬鹿と云は【史記】秦趙高たか故事ごともとづけり

へ鹿しかをさして馬と云人有ければかもをもおしとおもふ也けり。又。あほうは秦阿房宮號に出たる詞也とぞ。又。たわけとは田分たわけ也といふ。（未詳）【日本紀】結婚けつこんと有。たはふれけの略語也。又潘はんと書【萬葉】をなじ。嬌亂者きやうらんをいふと見えたり

○月水つきみづを、畿内の方言に。手桶てづく番と云（水に付、といふ秀句）美濃及尾張伊勢邊に。たやと云（待室の略也といふ）江戸にて。さしあひ又 さはりと云。仙臺にて。八左衛門といふ（はやり詞なるべし）

○物事ものごと輕卒けいそつに騒さわしき事を、東國にて。ひやうきんと云。西國にては、をどけたる事を「ひやうきん」といふ

○残りなくと云詞のかはりに、尾州にて。こつべりと云。東武にて。つぱり又。すつぱりなどの語と同じ意也。匹如ひつじやうの末訓まつくんより出たる詞と聞及たり。東國にて。すきとなし又すつきりないなどいふもをなしころ也

○たび／＼といふ事を、伊勢及駿河相撲にて。さんたいと云。東武にて再々といふに似たり

○ねんごろなる事を、下總にて。おふな／＼といふ。信州にて。おなごらといふ。他のもとへわざ／＼行なといふ事也。懇なる心也。【源氏】おふな／＼おほしいたづく、とあり。

(1) なそへな
(2) なと／＼も

【伊勢物語】にあふな／＼思ひはすべしなぞへなく。など、ちよめり

○いろ／＼といふ事を、肥前佐賀にて。ぐせことといふ

(3) いじかる
(4) ぎがる

○居るといふ事を、日向及北陸道又下野邊にて。ねまるといふ。畿内にて。いしかるといふ。關東又は泉州境邊にて。へたばると云。伊豆にて。きかると云。但馬にて。へこたれると云。長崎にて。をらすと云。土州にて。いざると云

○八道(わらべの地上に大路小路の形を書て、錢を投てあらそひをなすたはふれ也)京の小兒。むさしと云。大坂にて。ろくと云。泉州及尾張上野陸奥にて。六道と云。相撲又は上總にて。江戸と云。江戸の町々にたとへて云。信濃にて。八小路といふ。越後にて。六道路といふ。奥の津輕に。をえどと云。江戸にて。きすと云。江戸田舎にて。十六といふ○十六むさし京江戸共に。十六むさしと云。中國にて。むさ

こたふ)越後にて。やいと云。越前にて。やつといふ。陸奥にて。ないと云

案に、國々のこたふる詞大いに同しくして少く異也といへとも、各轉語なるべし。有が中に「を」といへるは諸國にて、下輩にこたふる語なるに、九州にては上さまの人に對してかくの如く答る所も有也。俗間に應の字を書もあれど「を」とは和訓なれば、唯々書べきよし、先哲も沙汰し侍る。

【漢書】唯唯恭應 之詞有。【枕草子】に、を」と目うち引てと有

(1) 丈艸
(2) 大坂屋平
三郎、伊
南甚助

へを／＼といへとた／＼くや雪の門 去來

○助語(ことばのをはりにつくことなり)京師にて「ナ」、八潮大原邊にて「ニヤ」、橋本邊にて「ノヨ」、大和にて「ナヨ」、播磨にて「ノヤ」、播磨にて「ノ」、石見にて「ケニ」、因幡にて「ケン」、但馬にて「ガア」、紀伊及豐後にて「ニ」、豊前にて「メセ」、西國及中國にて「ドモ」「テヤ」、土佐にて「ナア」「ノチ」「ネヤ」、尾參遠駿甲信にて「ズ」、武藏にて「ケ」、上總にて「サ」、下總にて「ナサイ」、安房にて「サア」、上下野州にて「ムシ」、越後にて「ナ」、加賀にて「ナ」、陸奥にて「サア」、出羽上にて「ベ」、同國庄内にて「チ

(3) 「ナヤ」
横線無し

しと云。上野下野邊にて。十六さすがりと云。陸奥にて。辨慶むさしと云。信濃にて。さすがりと云

○石投 江戸にて。手玉といふ。東國にて。石なんご 又なつこともいふ。信州輕井澤邊にて。はんねいばなと云。出羽にて。だまと云。越前にて。な／＼つこと云。伊勢にて。をのせと云。中國及薩摩にて。石なごといふ

さよ 西上人

○かくれんぼ(小兒のたはふれ也)出雲にて。かくれんごと云。相撲にて。かくれかんじやうと云。鎌倉にて。かくれんぼと云。仙臺にて。かくれかじかといふ

○鬼わたし 江戸にて。鬼わたとしと云。京にて。つかまえほと云。大坂にて。むかへほといふ。東國及出雲邊又肥、長崎にて。鬼ごとと云。奥、仙臺にて。鬼々と云。津輕にて。おくりごと云。常陸にて。鬼のさらと云

○他の呼に答る語 關東にて。あいと云。畿内にて。はいと云。近江にて。ねいと云。長門邊にて。あつと云。薩摩にて。を」と云。肥前にて。ないといふ。土佐にて。ゑいといふ(又ゑつともいふ。奴僕のだぐひは。を」とも。やつとも

ヤ、同國秋田にて「サイ」、關東にて「ベイ」、美濃にて「ヂヤ」、○畿内近國の助語に。さかひと云詞有。關東にて。からといふ詞にあたる也(「から」と云詞「故」といふに同し。吹からに秋の草木のと詠るも吹ゆへに也)

二篇 近刻
三篇

安永四乙未正月

江都書林

須原屋 市兵衛
同 善五郎

物類稱呼卷之五終

物類稱呼諸國方言索引

索引篇

目次

一、五十音索引	一五〇
二、地名別索引	一四八

३

五十音順索引

P

[illegible]

[illegible][illegible]

94

[illegible]

7i.

[illegible]

印あゐいい眉
んんん
らので見
籠ろうこは豆

うさき 吉 急 鹹 浮 浮 浮 浮 遊 魚
ざき 利 ぐ 磨 身 身 身 身 女
ねは 子 子 子 子 子 子 子 子
くみ 樹 子 子 子 子 子 子 子

ううう 氏 氏 氏 氏 氏 氏 氏 氏
ちちち ちちち ちちち ちちち ちちち ちちち ちちち ちちち
やめめ ねねね ねねね ねねね ねねね ねねね ねねね ねねね
るきろ 子子子 子子子 子子子 子子子 子子子 子子子 子子子

海馬 馬 馬 馬 馬 馬 馬 馬
の商 瓜 瓜 瓜 瓜 瓜 瓜 瓜
かけ草 只 只 只 只 只 只 只

う瓜 うう うう ト う 海 う 海 う 海 う 海 う
んる ぼり り ら 田 楊 楊 楊 楊 楊 楊 楊
きめ うれ すし 祭 枝 枝 枝 枝 枝 枝 枝

えんか かんか かんか かんか かんか かんか かんか かんか
ううう ちちち ちちち ちちち ちちち ちちち ちちち ちちち
ばうさ りざ りざ りざ りざ りざ りざ りざ

大 終 終 終 終 終 終 終 終
刀 刀 刀 刀 刀 刀 刀 刀
自 目 目 目 目 目 目 目 目

機 惠 恵 恵 恵 恵 恵 恵 恵
すく ぎに する い 魚
多 曾 い り れ る

えんか かんか かんか かんか かんか かんか かんか かんか
ううう ちちち ちちち ちちち ちちち ちちち ちちち ちちち
ばうさ りざ りざ りざ りざ りざ りざ りざ

大 終 終 終 終 終 終 終 終
刀 刀 刀 刀 刀 刀 刀 刀
自 目 目 目 目 目 目 目 目

八

[illegible][illegible]

か	が	か	か	かう	かう	高カウ	高カウ	ガ	合ガ	か	寄ガ	香カウ	紙カウ	強ガ	か	香カウ	か	か	か	かう	恒カウ	な
ゝ	ゞ		を	うらいごせう	うらいぎく	麗ライ	麗ライ	う	う	は	居ウ			う	だ	う	う	う	う	う	わんぼく	たの
え	い			せう	く	鳥ラス	わし	ら	飯ン	き	蟲ナ	橙ト	手デ	盗タウ	煎	さん	や	な	ば	規キ	の	
び	も	ム	か																			
七	五	六	四	四	一	二	三	七	七	五	八	五	六	七	六	七	九	四	五	五	七	
一	下	上	上	下	上	下	上	下	上	上	下	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	
(四)	(三)	(一)	(三)	(三)	(三)	(二)	(三)	(四)	(三)	(三)	(五)	(三)	(四)	(四)	(四)	(四)	(五)	(三)	(三)	(三)	(五)	
(四ウ)	(六ウ)	(二ウ)	(八オ)	(五ウ)	(六オ)	(五ウ)	(元ウ)	(元ウ)	(元ウ)	(六ウ)	(六ウ)	(三ウ)	(三ウ)	(四ウ)	(四ウ)	(元ウ)	(元ウ)	(六ウ)	(六ウ)	(二オ)	(二オ)	

か	か	片	が	か	堅 ^{カタ}	か	か	か	風 ^{カゼ}	か	數	春	何 ^{ナニ}	か	か	か	か	河 ^{カハ}	杜 ^ツ
た	た	くち	た	た	香 ^{カウ}	たい	そ	せ			すの	し	首 ^ユ	かし	まし	し	じ	父 ^フ	
ぐ	く	い	わ	口	子 ^ゴ	り	食 ^{タビ}	ぶ	か		み	日	う	烏 ^ウ	や	事	き	鹿 ^{ジカ}	魚 ^{イサナ}
る	り	わ	し	し	リ	り	た	り											
六八、下	五四、下	二六、上	二六、上	三七、上	五五、上	四四、上	一二、上	三四、下	二四、下	一、上	六七、下	二七、上	四二、下	四二、下	八八、上	八八、上	七八、下	三七、下	二九、上
(四、二ウ)	(三、六オ)	(三、五オ)	(三、五オ)	(三、元オ)	(三、六ウ)	(三、六ウ)	(一、三オ)	(三、六オ)	(三、二オ)	(一、ウ)	(四、六ウ)	(三、七オ)	(三、三ウ)	(三、三ウ)	(五、三ウ)	(五、三ウ)	(四、三ウ)	(四、三ウ)	(二、六オ)

1. **Introduction**
 2. **Methodology**
 3. **Results**
 4. **Discussion**
 5. **Conclusion**

かなへび	かなやま	かにくさ	かにこ	かにびしこ	かねたき	かねとんぼ	かねぼうく	かねはいも	かねいらしい	川をこぜ	かはかめ	かはかんじ	かはきじ	かはぐも	かはごみ	かはざうり	かば	魚	かは	川竹のなかれの身	河太郎	がはたらう	川童	かはたらう
三四、下(三、五ウ)	二九、下(三、九ウ)	五二、上(三、三オ)	六三、上(四、四ウ)	三一、下(三、三オ)	二四、上(三、三オ)	二三、下(三、三ウ)	三六、上(三、七ウ)	三八、上(三、七ウ)	三八、下(三、五ウ)	五〇、下(三、三ウ)	八一、上(五、四オ)	二八、下(三、六オ)	三一、上(三、二ウ)	四六、下(三、八オ)	一七、上(三、五オ)	一七、上(三、五ウ)	三八、下(三、五ウ)	六九、下(四、二ウ)	一七、下(三、五ウ)	一二、下(二、三ウ)	八、下(二、九ウ)	一六、下(三、四オ)	一六、下(三、四オ)	五〇、下(三、三ウ)

三三三

[illegible]

一四

[illegible][illegible]

く	く	く	く	鳥ク	く	く	く	く	ク	ぐ	く	栗ク	ク	坐ク	九	く	く	蜘蛛ク	く	く	馬ク	く				
ろ	ろ	ろ	ろ	類	ろ	れ	つ	る	る	る	る	る	る	る	九	よう	も	蜘蛛モ	み	ま	だ	び				
は	は	は	は	つ	ぶ	ろ	け	る	る	る	る	る	る	る	る	の	き	の	が	だ	び	び				
へ	ぎ	メ	ま	魚	し	ぎ	ろ	ろ	レ	ム	リ	芋	リ	ラ	星	つ	り	蟹	し	き	蜂	ば				
一、 下	五三、 下	三七、 上	五七、 下	二二、 上	一三、 下	五六、 上	三七、 上	八五、 上	八五、 上	八五、 上	六〇、 下	四二、 上	八七、 下	四二、 上	五、 上	八六、 下	八六、 下	八二、 上	四八、 下	三一、 下	三一、 下	六八、 下	二九、 下	三四、 下	一二、 下	
一、 二	三、 五	三、 五	三、 九	三、 一〇	一、 四	三、 六	三、 六	五、 八	五、 九	四、 八	四、 一	三、 二	五、 二	三、 三	一、 五	一、 五	一、 五	三、 五	三、 二	三、 三	三、 三	四、 一〇	三、 九	二、 五	一、 三	
オ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	ウ	オ	オ	ウ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ

げんのしやうこ
四八、上（三、一〇オ）

コ

小鯉ライ 揚 八四、下（五、ハオ）
小いすき 二一、上（二、九オ）
小いすき 七〇、下（四、二三ウ）
小いすき 二六、上（三、五ウ）

[illegible]

[illegible][illegible]

[illegible]

じ さい も ち	し こ た ま	し ご く だ ま	し ご く だ ま	じ こ う ぼ う	じ こ う ぼ う	し け く	液 シ ぐ ぐ	し ぐ ぐ	薺 シ か	し か ら る	し か ら れ ん	し か み ぐ さ	じ が ば ち	蠟 シ か つ マ	し か み か	し 鹿	紫 シ 苑	し を に	十六 む さ し	十六 さ す が り
七 四、 下	八 一、 下	七 八、 下	七 八、 下	七 一、 上	五 九、 上	三 八、 下	三 八、 下	八 一、 下	五 五、 上	八 〇、 上	八 〇、 上	四 七、 上	三 四、 下	三 四、 下	六 一、 上	四 四、 上	六 六、 下	六 六、 下	九 四、 上	九 四、 下
(四、 八 オ)	(五、 五 オ)	(五、 一 ウ)	(五、 一 ウ)	(四、 二 ウ)	(三、 三 オ)	(二、 三 ウ)	(二、 三 ウ)	(五、 五 オ)	(三、 一 ウ)	(五、 三 オ)	(五、 三 オ)	(三、 八 ウ)	(二、 六 オ)	(二、 三 ウ)	(四、 二 オ)	(三、 七 ウ)	(四、 八 ウ)	(四、 五 オ)	(五、 五 オ)	(五、 九 オ)

芝	四	柴	し	し	じ	信	し	四	四	し	七	籬	し	し	舌	し	下	規	し	四
方	の	の	の	な	濃	と	斗	斗	斗	つ	の	の	た	た	た	た	を	し	し	三
の	ま	ま	ま	み	み	み	こ	こ	こ	が	が	が	が	が	が	が	が	が	が	の
び	仕	き	れ	の	み	郎	り	樽	が	け	け	し	草	み	み	め	れ	け	び	星
三	五	六	五	六	一	三	六	六	六	四	五	四	六	五	二	五	四	三	二	一
一	九	二	一	二	三	九	八	八	八	八	五	八	六	六	二	六	七	四	三	一
四	八	二	一	二	三	三	上	上	上	上	上	下	下	下	上	下	上	上	上	上
上	下	下	下	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上
(一)	(二)	(三)	(四)	(五)	(六)	(七)	(八)	(九)	(一〇)	(一一)	(一二)	(一三)	(一四)	(一五)	(一六)	(一七)	(一八)	(一九)	(二〇)	(二一)
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ

し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し
ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま
ふ	は	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う
ぐ	ぜ	り	を	り	ほ	貝	み	ぼ	ま	き	い	ば	は	が	ま	が	や	竈	り	わ
二	六	二	四	三	六	三	三	三	三	五	三	二	三	六	五	三	二	二	四	九
八	二	八	下	上	上	下	下	下	下	下	下	上	上	上	上	上	上	上	上	上
(四)	(二)	(三)	(一)	(二)	(三)	(四)	(五)	(六)	(七)	(八)	(九)	(一〇)	(一一)	(一二)	(一三)	(一四)	(一五)	(一六)	(一七)	(一八)
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ

少	じ	正	小	じ	漏	定	じ	丈	床	正	奴	下	霜	し	霜	注	し	嶋	嶋	し
や	や	や	や	や	や	や	や	や	や	や	や	や	や	や	や	や	や	や	や	や
う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う
微	れ	く	直	路	斗	坊	菊	ぎ	几	坊	下	總	月	も	も	も	も	も	も	も
一	八	九	三	六	五	八	五	六	八	三	一	一	二	五	三	六	七	三	三	三
七	〇	一	八	九	九	六	三	二	六	三	一	一	二	二	六	四	四	〇	〇	〇
下	上	下	下	下	下	下	下	下	下	上	上	下	上	上	上	上	上	上	上	上
(一)	(二)	(三)	(四)	(五)	(六)	(七)	(八)	(九)	(一〇)	(一一)	(一二)	(一三)	(一四)	(一五)	(一六)	(一七)	(一八)	(一九)	(二〇)	(二一)
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ

じ	出	し	じ	舍	し	蛇	蛇	鳥	沙	白	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し
ゆ	つ	な	ん	ん	ん	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
い	銭	す	く	り	利	み	げ	花	花	花	花	花	花	花	花	花	花	花	花	花
七	六	七	五	四	九	三	四	二	四	四	四	三	六	六	一	三	八	一	一	一
九	二	九	〇	〇	〇	四	六	八	八	八	八	七	二	五	〇	六	六	三	七	七
下	下	下	上	上	上	下	下	上	上	上	上	下	上	上	上	上	上	上	上	上
(五)	(四)	(三)	(二)	(一)	(二)	(三)	(四)	(五)	(六)	(七)	(八)	(九)	(一〇)	(一一)	(一二)	(一三)	(一四)	(一五)	(一六)	(一七)
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ

し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し
る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る
こ	こ	こ	こ	こ	こ	こ	こ	こ	こ	こ	こ	こ	こ	こ	こ	こ	こ	こ	こ	こ
餅	い	餅	餅	餅	餅	餅	餅	餅	餅	餅	餅	餅	餅	餅	餅	餅	餅	餅	餅	餅
七	九	七	一	三	四	八	八	一	八	六	二	一	二	四	一	七	七	六	五	五
五	〇	六	〇	一	七	〇	〇	一	〇	三	九	一	四	二	七	九	三	七	〇	〇
上	下	上	上	下	上	下	下	下	下	上	上	上	上	上	下	下	下	下	下	下
(四)	(五)	(四)	(三)	(二)	(一)	(二)	(三)	(四)	(五)	(六)	(七)	(八)	(九)	(一〇)	(一一)	(一二)	(一三)	(一四)	(一五)	(一六)
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ

す	す	酢	辛	し	新	し	新	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し
い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い
(助語)	(助語)	(助語)	(助語)	(助語)	(助語)	(助語)	(助語)	(助語)	(助語)	(助語)	(助語)	(助語)	(助語)	(助語)	(助語)	(助語)	(助語)	(助語)	(助語)	(助語)
二	九	六	八	八	二	七	七	五	四	四	七	一	一	三	四	五	八	四	三	七
二	五	四	六	六	九	四	四	一	七	七	二	一	一	三	五	九	八	二	〇	六
下	上	下	上	下	上	下	下	下	下	下	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上
(二)	(三)	(四)	(五)	(六)	(七)	(八)	(九)	(一〇)	(一一)	(一二)	(一三)	(一四)	(一五)	(一六)	(一七)	(一八)	(一九)	(二〇)	(二一)	(二二)
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ

二四

す	李 ^{スミ}	す	す	す	蜜 ^{スミ}	す	炭 ^{スミ}	炭 ^{スミ}	す	蜜 ^{スミ}	酢 ^{スホン}	す	す	す	す	す	す	す	す	す	す	居 ^ス	洲 ^ス
も			む	み	み	み	か	ふ	ふ	ふ	ぼ	ぼ	ぼ	べ	べ	ひ	ひ	ひ	び	び	る	る	走 ^{バシ}
ム	め	め	め	め	め	め	め	め	め	め	め	め	め	め	め	め	め	め	め	め	め	め	め
四六、下	五八、下	三八、下	五八、下	五二、下	五二、上	六五、上	六四、上	六四、上	五二、上	五二、上	三一、上	六九、下	二六、上	一三、下	六九、上	四三、下	二七、上	六九、下	二一、上	六九、下	二一、上	九四、上	二一、上
(三、ハ)	(三、ウ)	(三、ウ)	(三、ウ)	(三、ウ)	(三、ウ)	(四、ウ)	(四、ウ)	(四、ウ)	(三、ウ)	(三、ウ)	(三、ウ)	(四、ウ)	(三、ウ)	(三、ウ)	(四、ウ)	(三、ウ)	(四、ウ)	(三、ウ)	(四、ウ)	(三、ウ)	(四、ウ)	(五、ウ)	(二、ウ)

二五

ぜ	千	迷	ゼ	煎	ゼ	ゼ	ゼ	ゼ	大	剪	ゼ	ゼ	ゼ	ゼ	善	ゼ	ゼ	膳	煎	ゼ
ん			ん	ん	ん	ん	ん	ん	ン	ン	ン	ン	ン	ン	ン	ン	ン	ン	ン	ン
も			ぼ	餅	ぶ	び	び	き	な	刀	ん	だ	い	く	煮	こ	ん			れ
ん	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ
一	九	四	七	七	四	七	七	六	六	四	五	八	六	四	七	四	六	九	一	一
二	一	四	七	六	二	五	五	〇	四	七	二	八	〇	三	四	三	三	三	一	一
上	下	上	上	上	下	上	上	下	上	上	上	上	上	下	下	下	上	上	下	下
(	五	(	(	(	(	(	(	(	(	(	(	(	(	(	(	(	(	(	(	(
三	六	三	四	四	三	四	六	一	四	三	三	五	一	四	二	四	五	七	二	三
ウ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	オ	オ

たうもろこし	だうまめ	たうほ	たうちが	田う	蜀う	たう	唐う	番う	たう	唐う	大	多	たい	たい	だい	待	だい	大	臺	龍	萊
う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う
こ	め	う	さ	に	き	び	す	す	す	す	す	す	す	す	す	す	す	す	す	す	す
四〇、下	四三、上	二二、下	七八、下	四三、上	三一、下	四〇、下	四〇、下	一八、上	四四、上	二四、上	四二、上	五一、上	三二、下	六七、上	五三、下	六八、下	七八、下	九三、下	三八、上	八六、下	九、上
(三、一ウ)	(三、四ウ)	(三、二オ)	(四、一ウ)	(三、四ウ)	(三、三オ)	(三、一ウ)	(三、一ウ)	(三、六オ)	(三、五ウ)	(三、三オ)	(三、三オウ)	(三、三オ)	(三、三ウ)	(四、九オ)	(三、五オ)	(四、一ウ)	(五、一ウ)	(五、一オ)	(三、一ウ)	(四、五ウ)	(一、九ウ)

[illegible]

[illegible][illegible]

つん	連	錦	綿	つ	羊	ぶ	沙	つ	ぶ	氷	つ	つ	類	類	露	つ	つ	つ	妻	つ	つ	壺
の	立	荔	紫	る	ツル	ツル	ツリ	り	ら	ツ	つ	つ	類	類	露	つ	つ	つ	妻	つ	つ	壺
ふ	荔	紫	紫	る	ツル	ツル	ツリ	り	ら	ツ	つ	つ	類	類	露	つ	つ	つ	妻	つ	つ	壺
て	枝	兒	兒	る	ツル	ツル	ツリ	り	ら	ツ	つ	つ	類	類	露	つ	つ	つ	妻	つ	つ	壺
行	行	枝	兒	る	ツル	ツル	ツリ	り	ら	ツ	つ	つ	類	類	露	つ	つ	つ	妻	つ	つ	壺
九	九	四	五	五	四	八	四	四	八	三	七	六	七	七	三	四	一	四	五	五	五	五
二	二	五	一	七	八	三	八	八	三	三	九	二	九	九	三	九	八	九	六	三	三	二
下	下	下	下	上	下	下	下	下	下	下	上	下	下	下	下	上	下	上	上	上	上	下
(五)	(五)	(三)	(三)	(三)	(三)	(五)	(三)	(三)	(三)	(一)	(五)	(四)	(五)	(五)	(一)	(三)	(三)	(二)	(三)	(三)	(三)	(三)
(七)	(七)	(七)	(七)	(六)	(六)	(六)	(二)	(二)	(二)	(四)	(二)	(三)	(二)	(二)	(四)	(二)	(七)	(二)	(三)	(三)	(三)	(四)
オ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	オ	オ	オ	オ

[illegible]

[illegible][illegible]

な ら が ま	五七、上 (三、八ウ)
な ら こ う	五七、上 (三、九オ)
ナ ラ 良 茶	六七、上 (四、九オ)
な ら ち や が ゆ	七四、上 (四、七オ)
な ら ち や め し	七四、上 (四、七ウ)
な ら び	八〇、上 (五、三オ)
ナ リ ひ さ ご	六五、下 (四、七オ)
な る	二二、下 (三、二ウ)
汝	八二、下 (五、五ウ)
な ん き ん	四五、上 (三、六オ)
な ん き ん う り	四五、上 (三、六ウ)
な ん き ん ま め	四三、下 (三、四ウ)
な ん せ ば ぢ う か い ど ん 丸	八五、下 (三、九オ)
何 ン ち ふ	八五、下 (三、九オ)
何 ン ち や	八五、下 (五、九オ)
南 天 燭	五三、下 (三、五オ)
な ん と し や う か い な 七 九	八五、下 (五、二ウ)
何 ン の コ ツ	八五、下 (五、九ウ)
何 ン の 事 で や	八五、下 (五、九ウ)
何 ン の 事 だ	八五、下 (五、九ウ)
な ん ば あ け づ	七〇、上 (四、三オ)
な ん ば ん	三六、上 (三、七ウ)
な ん ば ん	四四、下 (三、五ウ)
玉 蜀 黍	四〇、下 (三、一ウ)
な ん ば ん た う の き び 四 〇	四〇、下 (三、一ウ)

[illegible]

謀	焙	は	は	は	は	の	野	の	暖	の	の	の	の	の	ノ	ノ	鑿	の	の	の	野	野	野	の
計	爐	は	い	い	は	の	ん	ろ	レ	の	ら	ら	ら	ら	ヨ	ヤ	方	の	の	の	野	野	野	の
		い	と	い	は		こ	ま	さ	の	め	め	め	め	(助言)	(助言)	方	の	の	の	の	の	の	の
		む	む	む	む		つ	分	籠	の	り	り	り	り	り	り	方	の	の	の	の	の	の	の
		し	し	し	し			キ	籠	の	り	り	り	り	り	り	方	の	の	の	の	の	の	の
九	六	一	三	五	九	三	八	六	七	六	一	四	四	一	九	九	八	六	八	五	一	六	二	六
一	五	〇	七	九	四	〇	八	四	二	九	四	三	三	一	五	五	五	二	五	三	六	一	二	二
下	下	上	下	上	下	上	上	下	上	下	上	上	上	下	上	上	上	上	上	下	上	上	上	上
(五	(四	(一	(三	(五	(三	(五	(五	(四	(四	(四	(三	(三	(三	(二	(五	(五	(五	(四	(五	(三	(二	(二	(四	(三
五	七	二	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元
ウ)	ウ)	オ)	オ)	ウ)	ウ)	ウ)	ウ)	ウ)	ウ)	ウ)	ウ)	ウ)	ウ)	オ)	オ)	オ)	ウ)	ウ)	ウ)	ウ)	ウ)	ウ)	ウ)	ウ)

[illegible]

腹 ^{ハラ}	は ^ハ	櫻 ^{オウノヤ}	は ^ハ	春 ^{ハル}	ハ	飯 ^イ	ば ^バ	ば ^バ	は ^ハ	區 ^ク	ば ^バ	番 ^{バン}	蕃 ^{バン}	坂 ^ハ	は ^ハ	は ^ハ	はん ^{ハン}	番 ^{バン}	半 ^{ハン}	梭 ^ヒ
立 ^{タテ}	は ^ハ	り ^リ	み ^ミ	志 ^シ	ワ	器 ^キ	ん ^ン	ん ^ン	ん ^ン	ざ ^ザ	う ^ウ	う ^ウ	鳥 ^{トリ}	薯 ^{ショ}	郎 ^{ロウ}	い ^イ	の ^ノ	の ^ノ	の ^ノ	ヒ
顔 ^{ガン}	な ^ナ	ぎ ^ギ	す ^ス	る ^ル	サ	ン	ご ^ゴ	藏 ^{ゾウ}	う ^ウ	う ^ウ	う ^ウ	う ^ウ	う ^ウ	う ^ウ	う ^ウ	う ^ウ	う ^ウ	う ^ウ	う ^ウ	う ^ウ
九〇、上 ^(五、四オ)	二七、上 ^(三、六ウ)	五八、上 ^(三、二オ)	二四、上 ^(三、三オ)	八六、上 ^(五、二ウ)	三六、上 ^(二、六オ)	六二、上 ^(四、二ウ)	七二、下 ^(四、六オ)	四二、下 ^(三、三ウ)	六一、下 ^(四、二ウ)	六八、下 ^(四、二ウ)	六二、上 ^(四、三ウ)	一九、下 ^(三、八オ)	四二、下 ^(三、四ウ)	一二、上 ^(二、三ウ)	九四、下 ^(五、九オ)	五八、上 ^(三、二オ)	五八、上 ^(三、二オ)	一、上 ^(二、一オ)	四八、上 ^(三、二オ)	六一、下 ^(四、三オ)

日 ヒ のく れ か た	非 ヒ び な ん か づ ら	日 ヒ な ん 南	ひ ヒ な く さ い	日 ヒ な を る	ひ ヒ と よ 妻	ひ ヒ と も じ	ひ ヒ と で	ひ ヒ と と て	ひ ヒ と つ あ ゆ	ひ ヒ と つ の ほ し	ひ ヒ ど う き け た	他 ヒ ト	ひ ヒ で り 草	ひ ヒ で ん じ	ひ ヒ づ み	ひ ヒ つ く り し た	ひ ヒ つ つ こ	ひ ヒ つ じ ぐ さ	ヒ ヒ ツ ヂ	ひ ヒ ち り こ	ひ ヒ た つ す	浸 ヒ タ ス
八 四 、 下 （ 五 、 八 ウ ）	一 二 、 上 （ 一 、 三 オ ）	五 五 、 下 （ 三 、 七 ウ ）	九 三 、 上 （ 五 、 八 オ ）	八 七 、 上 （ 五 、 二 オ ）	四 一 、 下 （ 三 、 三 オ ）	四 〇 、 下 （ 三 、 四 オ ）	三 三 、 上 （ 三 、 四 オ ）	一 一 、 上 （ 一 、 一 オ ）	一 一 、 下 （ 一 、 一 ウ ）	八 六 、 上 （ 五 、 九 ウ ）	八 二 、 上 （ 五 、 五 ウ ）	一 二 、 上 （ 一 、 二 ウ ）	五 三 、 上 （ 三 、 四 ウ ）	六 八 、 下 （ 四 、 一 ウ ）	四 〇 、 下 （ 三 、 一 ウ ）	五 〇 、 下 （ 三 、 二 ノ 上 ウ ）	二 四 、 上 （ 三 、 三 オ ）	九 一 、 上 （ 五 、 五 ウ ）	三 七 、 下 （ 三 、 三 オ ）	三 八 、 上 （ 二 、 四 ウ ）	八 〇 、 上 （ 五 、 三 ウ ）	九 〇 、 下 （ 五 、 五 オ ）

ふ	ぶ	ぶ	富フ	ぶ	ふ	福フ	鶺鴒フ	袋	ぶ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ぶ	河フ	鱸フ	ふ	ふ	ふ	び
た	し	や	士	さ		わ			く	く	く	く	く	く	く	あ				う	う		ん
つ	か	か	南	ぬ	ど	し			ら	ば	と	で	へ	ご	う					り	づ	フ	な
	す	ぶ							り	ぎ	ぎ	ら	ち	う	ん	で	る	く	鰯	魚	か	う	う
八〇	八三	一三		八三	六二	七四	二〇	六九	一三	二五	二五	六九	七四	七四	三八	三八	六四	二五	二四	二四	六八	七一	二五
上	下	上	下	下	下	上	上	下	下	上	下	上	下	下	上	上	下	下	下	上	上	上	下
五	五	二	二	五	四	四	三	四	一	二	二	四	四	四	三	三	四	三	三	四	四	四	三
三	七	四	一	七	四	七	八	二	四	四	四	二	六	六	三	三	五	三	三	二	二	二	四
ウ	オ	オ	ウ	オ	オ	ウ	オ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	ウ	ウ	オ	オ	オ	オ

可 ^{ベキ}	へぎもち	へけい	へこ	べ	へこ	へこたれる	臍 ^ツ	へたばる	へちはん雪	へちはん	絲 ^チ	べつかうさう	べつかうのくし	べつしてになる	別當	べつとう	紅 ^ニ	へがりごち	蛇 ^ヒ	へびあさがほ	へびぢやわん	へびのでまくら	陰 ^ヘ
七九、上	七四、下	六六、下	六六、上	七一、下	七一、上	九四、上	九四、上	一三、上	九四、上	三四、下	四五、上	四八、下	六七、上	七九、下	五、下	三八、上	五九、上	一一、下	一四、下	三四、上	三七、上	四八、下	一三、下
(五、二オ)	(四、ハオ)	(四、ハウ)	(四、ハオ)	(五、オ)	(三、ウ)	(四、五オ)	(五、元オ)	(一、二四オ)	(五、元オ)	(一、四オ)	(三、六ウ)	(三、〇ウ)	(四、九オ)	(五、三オ)	(一、六オ)	(三、三オ)	(三、二オ)	(一、ウ)	(二、二オ)	(三、五オ)	(三、九オ)	(三、〇ウ)	(一、二四ウ)

[illegible][illegible]

[illegible][illegible][illegible][illegible][illegible][illegible]

藥 ヤク	や	や	湯 ヤ	や	家	や	や	や	糲 キ	や	や	や	や	や	や	養	や	や	や	諸 モ	も	毛 モ
ぐ	く	ぐ	く	ぐ	ぐ	ぐ	ぐ	ぐ	ぐ	ぐ	ぐ	ぐ	ぐ	ぐ	ぐ	ぐ	ぐ	ぐ	ぐ	ろ	呂 ロ	呂 ロ
う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	う	こ	古 コ	古 コ
な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	し	鈴 スズ	鈴 スズ
六四、下	四、下	四六、下	六五、上	六五、下	七四、上	七四、下	九一、上	九一、下	七六、上	七六、下	八六、上	八六、下	四七、上	四七、下	八六、上	八六、下	九一、上	九一、下	五、上	一八、下	四〇、下	三〇、上
(四、六オ)	(一、五オ)	(三、八オ)	(四、七ウ)	(五、六ウ)	(二、三オ)	(五、七ウ)	(五、六オ)	(五、七ウ)	(四、九ウ)	(五、二オ)	(一、九オ)	(五、一ウ)	(三、八ウ)	(四、六オ)	(五、二ウ)	(五、一ウ)	(一、五オ)	(五、九ウ)	(三、二ウ)	(一、六ウ)	(三、一ウ)	(二、三オ)

や	柳	や	や	や	や	や	や	ハッ	ハッ	や	や	屋	や	や	や	彌	や	夜	や	や	ハッ				
は	に		ど	と	ど	ど	つ	つ	手	が		ち	ぞ	お	す		じ		じ	ご	小				
ら	る	鮎	な	り	ふ	り	か	た	と	木	ら	は	臺	う	こ	ら	で	助	み	食	め	路			
七二、	八一、	二九、	六九、	三八、	一四、	三三、	三八、	五二、	五五、	六六、	四二、	九四、	九四、	五八、	六〇、	一〇、	一四、	二五、	三八、	九一、	三四、	七三、	七四、	八、	九四、
下	下	下	下	上	下	上	下	下	上	上	上	下	下	上	上	上	下	上	上	下	上	上	上	上	上
(四、	(五、	(三、	(四、	(二、	(三、	(三、	(二、	(三、	(三、	(四、	(三、	(五、	(一、	(二、	(四、	(一、	(二、	(三、	(二、	(五、	(二、	(四、	(四、	(一、	(五、
五ウ)	五オ)	元ウ)	二オ)	三オ)	二オ)	三ウ)	三ウ)	五オ)	六ウ)	七ウ)	三オ)	九ウ)	四ウ)	二オ)	一オ)	二ウ)	二オ)	三オ)	二オ)	六オ)	三オ)	六ウ)	七オ)	八ウ)	元オ)

[illegible]

め	め	め	め	め	め	目	丁	雌	め	め	目	目	緋	飯	飯	め	め	飯	飯	目	め
で	て	て	め	た	た		斑 ^マ		だい	セ	摺 ^{スリ}	眼 ^シ	兒 ^ロ	盛	櫃 ^{ビツ}	し	じ	賣	さ	ざ	
る	ふ	た	ら	り	き	高	魚 ^カ	鷹	び	そ	鱸 ^{ナマス}	白				ぎ	か	る	む	い	
八 九、下 (五、三ウ)	八 九、下 (五、三ウ)	三 五、下 (二、七オ)	八 九、上 (五、三ウ)	八 九、下 (五、三ウ)	二 四、上 (二、三ウ)	二 三、下 (二、三オ)	二 四、上 (二、三ウ)	三 二、下 (二、三ウ)	二 五、上 (二、四オ)	二 七、上 (二、六ウ)	九 五、上 (一、二オ)	八 一、下 (五、四ウ)	二 五、上 (二、四ウ)	一 九、上 (二、七オ)	六 四、上 (四、五ウ)	六 四、上 (四、五ウ)	二 五、下 (三、四オ)	二 五、上 (三、四オ)	七 二、下 (四、五ウ)	八 七、上 (五、二オ)	八 一、上 (五、四オ)

も	も	購 ^ス	も	木	木	木	木	藻 ^モ	も	も	藻 ^モ	め	め	め	め	め	目 ^メ	め	め	乳 ^メ	め	め	
だ	た			ぐ		く				う	つ	ん	ば	ん	ぞ	う	じ	は	り	ば	め		
ま	せ		じ	王	蓮	ら	筆	だ	蟹	か	に	く	魚 ^ウ	ば	ば	な	ぎ	こ	張 ^{ガル}	さ	母 ^ト	け	ど
二四、 下	五九、 下	二〇、 上	六二、 下	五八、 上	五四、 上	五一、 上	四九、 下	三一、 下	一〇、 上	七八、 下	九一、 上	二三、 上	二二、 下	二四、 上	二七、 上	二四、 上	二二、 下	四八、 下	二四、 上	七、 下	二四、 上	四、 下	
(三、 三ウ)	(三、 三オ)	(三、 ハウ)	(四、 三ウ)	(三、 二〇オ)	(三、 五ウ)	(三、 六オ)	(三、 二ウ)	(三、 三オウ)	(一、 二〇ウ)	(五、 一ウ)	(五、 五ウ)	(三、 二ウ)	(三、 二オウ)	(三、 三ウ)	(三、 六ウ)	(三、 三オ)	(三、 二ウ)	(三、 二〇ウ)	(三、 三ウ)	(一、 ハオ)	(三、 三オ)	(一、 五オ)	

[illegible]

硫	ゆゑ	ゆゑ	ゆゑ	ゆゑ	故	ゆ	タ
わ	る	る	も	(助)	ふ	ベ	ツ
う	に	い	こ	じ	べ	リ	ツ
ぎ	黄	坐	こ	語			
	する	する					
六六、下	八六、上	七五、上	七五、上	七二、上	九五、下	八七、上	八九、下
(四、ハウ)	(五、オウ)	(四、ハウ)	(四、ハウ)	(四、ハウ)	(三、二オウ)	(三、二オウ)	(五、三オウ)

[illegible]

ヨ	夜	呼	よ	米	よ	よ	よ	四	よ	四	四	よ	よ	與
	夜	呼	ひ	米	ど	て	ッ	ッ	つ	ッ	ッ	た	た	物
	答		と						ば			か	か	次
	る		よ	ね	ろ	こ	岐	マ	ら	會	口	ぼ	か	と
ベ	舟	語							ひ	ッ				
八	七	九	八	四	一	五		八	一	四	四	一	一	一
九	五	四	〇	〇	〇	八	七	一	一	四	四	〇	〇	九
下	下	下	下	上	上	下	上	下	上	下	下	上	上	下
(五)	(四)	(五)	(五)	(三)	(一)	(三)	(一)	(五)	(二)	(一)	(一)	(二)	(二)	(三)
(三)	(元)	(元)	(三)	一	〇	〇	七	五	二	五	五	二	二	八
ウ)	オ)	ウ)	ウ)	オ)	ウ)	ウ)	ウ)	オ)	ウ)	オ)	オ)	ウ)	オ)	オ)

る	リ	リ	律	リ	リ	リ	リ	リ	リ	蘭	蘭	ら	ら	ら	斑	ら	信
	リ	リ	義	リ	リ	リ	リ	リ	リ	蘭	蘭	ら	ら	ら	斑	ら	信
	や	や	なる	き	う	う	う	う	う	天	天	ま	ま	ま	い	い	天
ル	う	う	は	む	く	ひ	と	と	と	て	て	さ	さ	さ	ば	ば	天
リ	ぶ	ぶ	人	む	く	ひ	と	と	と	竹	菊	う	こ	ぎ	竹	翁	翁
一七、下	五六、上	八七、上	九二、下	九二、上	四六、下	九二、上	四二、下	四二、下	四二、下	五四、上	五三、下	五一、下	六〇、下	二五、上	六八、上	六四、下	一八、上
(二、五ウ)	(一、七ウ)	(一、三ウ)	(五、七ウ)	(五、六ウ)	(三、八ウ)	(五、六ウ)	(三、四ウ)	(三、四ウ)	(三、四ウ)	(三、五ウ)	(三、五ウ)	(三、二ウ)	(四、二ウ)	(二、四ウ)	(四、六ウ)	(四、五ウ)	(二、六ウ)

[illegible]

五〇

六三、 上	六二、 下	八三、 上	八四、 下	五九、 上	六九、 上	六九、 下	六九、 下	六九、 上	六三、 上	二五、 上	五一、 下	八二、 上
(四、 四才ウ)	(四、 四才ウ)	(五、 七ウ)	(五、 七ウ)	(三、 三ウ)	(一、 七ウ)	(四、 二ウ)	(四、 二ウ)	(一、 七ウ)	(四、 四ウ)	(二、 二ウ)	(三、 三才)	(五、 五ウ)

終

關西……一

藝	備後	備後	石見	出雲	雲州	伯耆	因幡	美作	作州	備前	備前	播磨	播磨	播磨	但馬	但馬	丹波	丹波	山陰	山陰
州	福山	後	見	雪	州	耆	幡	作	州	小島	前	赤穂	磨	州	國村岡	馬	後	波	州	陽道
.....																	 おぼろ			
一一三	一一三	一一三	一一三	一一三	一一三	一一三	一一二	一一二	一一二	一一二	一一二	一一二	一一二	一一二	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一

關西

[illegible]

れ庭な泣どとて露つ茶ちたたたただそせぜしし十牛けく
ミンびつんのあ霜とりぎとにごんべんふるげういくばげ房ねは
ぶむだ辨ろないみ
かめ慶慶くいみ

三四、上 (三、五) 一四、下 (二、一) 一五、下 (二、二) 四〇、下 (三、二) 五八、下 (三、二) 六五、下 (四、七) 九〇、下 (五、二) 七八、下 (五、一) 四六、下 (三、八) 九〇、上 (五、二) 五〇、上 (三、一) 七八、下 (五、一) 一七、下 (三、四) 七八、上 (三、一) 二一、上 (二、九) 四、下 (一、四) 七八、下 (五、一) 六二、下 (四、三) 六一、下 (四、二) 六四、下 (四、六) 六七、下 (四、九) 三、下 (一、四) 六七、下 (四、九) 八六、下 (五、二) 五四、上 (三、五) 五〇、上 (三、一) 五〇、上 (三、一) 五七、上 (三、九) 四一、下 (三、二)

わろよよよゆ山や物めま間まほほほほべふふははの
く る め の と せ ち だ
に の が ご わ つ よ か ゆ 引 び ば ぐ か づ ま たら
た と が い か き ま つれ
る う の 君 め わ う も し ご げ る 菜 す た れ り す い め り ち へ け こ

一四、下	(二、二才)
七一、上	(四、二ウ)
三〇、上	(三、二ウ)
二五、上	(二、二ウ)
六九、下	(四、二ウ)
四三、下	(三、五才)
一三、下	(一、二ウ)
八四、下	(五、八才)
六九、下	(四、二ウ)
五九、上	(三、二ウ)
五九、上	(三、二才)
九〇、下	(五、二才)
四一、下	(三、二ウ)
七二、上	(四、二ウ)
一三、上	(一、二才)
六二、下	(四、四才)
一二、上	(一、三才)
八一、下	(五、五才)
四二、上	(三、三才)
六六、下	(四、八ウ)
二五、下	(三、二ウ)
一五、下	(三、三才)
一四、下	(三、一ウ)
四二、上	(三、三才)
八一、下	(五、五才)
六八、上	(四、二才)

[illegible]

地名別索引 畿内、五畿内、京畿、山城、京

[illegible]

攝州西宮海邊

へん び 二八、上 (三、七ウ)

信濃 太はり

三四、上 (三、五ウ)

近江國湖水

せ た 嵐 二、上 (二、ニウ)

こ う し う 四四、下 (三、六ウ)

しほん びほ

三八、下 (三、五ウ)

だ ん し り 四四、下 (三、六ウ)

すまふ とりぐさ

三七、下 (三、五ウ)

武 文 兵 庫 三二、上 (三、三ウ)

そ ぶ ぐ さ

五二、上 (三、三ウ)

あ い す り 五九、下 (三、三ウ)

つ く し び

三六、下 (三、六ウ)

あ い ぶ ら し め そ り 三三、上 (三、三ウ)

ど う ぼ ざ ん

二八、下 (三、六ウ)

い し ぶ ら し め そ り 三三、上 (三、三ウ)

庭 代 鳥

一七、下 (三、五ウ)

い と かつ ら し め そ り 二八、上 (三、三ウ)

は ね こ さ

九四、下 (三、九ウ)

い ば な し め そ り 二八、上 (三、三ウ)

は ね こ さ

一七、下 (三、五ウ)

い ば な し め そ り 二八、上 (三、三ウ)

は ね こ さ

一七、下 (三、五ウ)

い ば な し め そ り 二八、上 (三、三ウ)

は ね こ さ

一七、下 (三、五ウ)

い ば な し め そ り 二八、上 (三、三ウ)

は ね こ さ

一七、下 (三、五ウ)

い ば な し め そ り 二八、上 (三、三ウ)

は ね こ さ

一七、下 (三、五ウ)

い ば な し め そ り 二八、上 (三、三ウ)

は ね こ さ

一七、下 (三、五ウ)

い ば な し め そ り 二八、上 (三、三ウ)

は ね こ さ

一七、下 (三、五ウ)

い ば な し め そ り 二八、上 (三、三ウ)

は ね こ さ

一七、下 (三、五ウ)

い ば な し め そ り 二八、上 (三、三ウ)

は ね こ さ

一七、下 (三、五ウ)

い ば な し め そ り 二八、上 (三、三ウ)

は ね こ さ

一七、下 (三、五ウ)

い ば な し め そ り 二八、上 (三、三ウ)

は ね こ さ

一七、下 (三、五ウ)

い ば な し め そ り 二八、上 (三、三ウ)

は ね こ さ

一七、下 (三、五ウ)

い ば な し め そ り 二八、上 (三、三ウ)

は ね こ さ

一七、下 (三、五ウ)

あ づ く み 八六、上 (五、六ウ)

き が せ

六四、上 (四、五ウ)

あ れ ぼ ど き 九二、上 (五、六ウ)

ご くら い

五九、上 (三、三ウ)

あ れ ぼ ど き 九二、上 (五、六ウ)

ご くら い

五九、上 (三、三ウ)

あ れ ぼ ど き 九二、上 (五、六ウ)

ご くら い

五九、上 (三、三ウ)

あ れ ぼ ど き 九二、上 (五、六ウ)

ご くら い

五九、上 (三、三ウ)

あ れ ぼ ど き 九二、上 (五、六ウ)

ご くら い

五九、上 (三、三ウ)

あ れ ぼ ど き 九二、上 (五、六ウ)

ご くら い

五九、上 (三、三ウ)

あ れ ぼ ど き 九二、上 (五、六ウ)

ご くら い

五九、上 (三、三ウ)

あ づ く み 八六、上 (五、六ウ)

き が せ

六四、上 (四、五ウ)

あ れ ぼ ど き 九二、上 (五、六ウ)

ご くら い

五九、上 (三、三ウ)

あ れ ぼ ど き 九二、上 (五、六ウ)

ご くら い

五九、上 (三、三ウ)

あ れ ぼ ど き 九二、上 (五、六ウ)

ご くら い

五九、上 (三、三ウ)

あ れ ぼ ど き 九二、上 (五、六ウ)

ご くら い

五九、上 (三、三ウ)

あ れ ぼ ど き 九二、上 (五、六ウ)

ご くら い

五九、上 (三、三ウ)

あ れ ぼ ど き 九二、上 (五、六ウ)

ご くら い

五九、上 (三、三ウ)

あ れ ぼ ど き 九二、上 (五、六ウ)

ご くら い

五九、上 (三、三ウ)

な た ま め	四三、下 (三、五オ)	あ が い・こ が い	八三、上 (五、六ウ)	勢 州 長 島	う て か へ り ご し	六八、上 (四、二オ)	伊 勢 山 田	八、上 (一、九オ)	世 世 女 に や	四、下 (一、五オ)	伊 勢 松 坂	四、下 (一、五オ)	小 路 ち	伊 勢 ノ 國 鳥 羽	二、上 (一、二オ)	あ を ぎ た	あ ぶ ら ま じ	一、下 (一、二オ)	あ ら は へ	一、下 (一、二オ)	を く れ ま じ	二、上 (一、二オ)	お ぼ せ	一、下 (一、二オ)	神 貝 よ	二、上 (一、二オ)	雁 わ た し	二、上 (一、二オ)
二 ば ん ご	四〇、下 (三、一ウ)	ほ う じ う	六九、上 (四、二オ)		う て か へ り ご し	六八、上 (四、二オ)																						
は ま す い め	二〇、下 (三、八ウ)																											
く ろ は へ	一、下 (一、二オ)	星 の 出 入	二、上 (一、二オ)	紀 州	あ そ 妻 び	六、下 (四、二ウ)	幻 げん そ	一〇、上 (一、二オ)	だ う ほ う	と ま き	六、下 (四、二ウ)	ち つ か は	二、上 (一、二オ)	み や ま が す み	五、上 (三、五オ)	あ を ぎ た	う り ね	四、上 (三、七ウ)	う り ね	九、上 (五、二オ)	熊 野	四、上 (三、七ウ)	う り ね	四、上 (三、七ウ)	中 國	一、下 (一、一ウ)	あ を ぎ た	一、下 (一、一ウ)
あ ぎ な し	五〇、下 (三、三オ)	う は ら が い	三、上 (一、二ウ)	う て か へ り ご し	お く り ま ぜ	一、下 (一、一ウ)	大 を し	七、下 (一、一ウ)	を に 北 ま	か い つ ぶ り	一、上 (一、一ウ)	か は わ た り 餅	七、上 (三、四ウ)	香 か う 橙	五、上 (三、五オ)	あ ぎ な し	あ ふ な こ	六、上 (四、一ウ)	あ ぶ ら ま じ	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)
あ ふ な こ	二九、上 (一、二オ)	う は ら が い	三、上 (一、二ウ)	う て か へ り ご し	お く り ま ぜ	一、下 (一、一ウ)	大 を し	七、下 (一、一ウ)	を に 北 ま	か い つ ぶ り	一、上 (一、一ウ)	か は わ た り 餅	七、上 (三、四ウ)	香 か う 橙	五、上 (三、五オ)	あ ぎ な し	あ ふ な こ	六、上 (四、一ウ)	あ ぶ ら ま じ	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)
あ ふ な こ	二九、上 (一、二オ)	う は ら が い	三、上 (一、二ウ)	う て か へ り ご し	お く り ま ぜ	一、下 (一、一ウ)	大 を し	七、下 (一、一ウ)	を に 北 ま	か い つ ぶ り	一、上 (一、一ウ)	か は わ た り 餅	七、上 (三、四ウ)	香 か う 橙	五、上 (三、五オ)	あ ぎ な し	あ ふ な こ	六、上 (四、一ウ)	あ ぶ ら ま じ	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)
あ ふ な こ	二九、上 (一、二オ)	う は ら が い	三、上 (一、二ウ)	う て か へ り ご し	お く り ま ぜ	一、下 (一、一ウ)	大 を し	七、下 (一、一ウ)	を に 北 ま	か い つ ぶ り	一、上 (一、一ウ)	か は わ た り 餅	七、上 (三、四ウ)	香 か う 橙	五、上 (三、五オ)	あ ぎ な し	あ ふ な こ	六、上 (四、一ウ)	あ ぶ ら ま じ	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)
あ ふ な こ	二九、上 (一、二オ)	う は ら が い	三、上 (一、二ウ)	う て か へ り ご し	お く り ま ぜ	一、下 (一、一ウ)	大 を し	七、下 (一、一ウ)	を に 北 ま	か い つ ぶ り	一、上 (一、一ウ)	か は わ た り 餅	七、上 (三、四ウ)	香 か う 橙	五、上 (三、五オ)	あ ぎ な し	あ ふ な こ	六、上 (四、一ウ)	あ ぶ ら ま じ	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)
あ ふ な こ	二九、上 (一、二オ)	う は ら が い	三、上 (一、二ウ)	う て か へ り ご し	お く り ま ぜ	一、下 (一、一ウ)	大 を し	七、下 (一、一ウ)	を に 北 ま	か い つ ぶ り	一、上 (一、一ウ)	か は わ た り 餅	七、上 (三、四ウ)	香 か う 橙	五、上 (三、五オ)	あ ぎ な し	あ ふ な こ	六、上 (四、一ウ)	あ ぶ ら ま じ	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)
あ ふ な こ	二九、上 (一、二オ)	う は ら が い	三、上 (一、二ウ)	う て か へ り ご し	お く り ま ぜ	一、下 (一、一ウ)	大 を し	七、下 (一、一ウ)	を に 北 ま	か い つ ぶ り	一、上 (一、一ウ)	か は わ た り 餅	七、上 (三、四ウ)	香 か う 橙	五、上 (三、五オ)	あ ぎ な し	あ ふ な こ	六、上 (四、一ウ)	あ ぶ ら ま じ	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)
あ ふ な こ	二九、上 (一、二オ)	う は ら が い	三、上 (一、二ウ)	う て か へ り ご し	お く り ま ぜ	一、下 (一、一ウ)	大 を し	七、下 (一、一ウ)	を に 北 ま	か い つ ぶ り	一、上 (一、一ウ)	か は わ た り 餅	七、上 (三、四ウ)	香 か う 橙	五、上 (三、五オ)	あ ぎ な し	あ ふ な こ	六、上 (四、一ウ)	あ ぶ ら ま じ	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)
あ ふ な こ	二九、上 (一、二オ)	う は ら が い	三、上 (一、二ウ)	う て か へ り ご し	お く り ま ぜ	一、下 (一、一ウ)	大 を し	七、下 (一、一ウ)	を に 北 ま	か い つ ぶ り	一、上 (一、一ウ)	か は わ た り 餅	七、上 (三、四ウ)	香 か う 橙	五、上 (三、五オ)	あ ぎ な し	あ ふ な こ	六、上 (四、一ウ)	あ ぶ ら ま じ	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)
あ ふ な こ	二九、上 (一、二オ)	う は ら が い	三、上 (一、二ウ)	う て か へ り ご し	お く り ま ぜ	一、下 (一、一ウ)	大 を し	七、下 (一、一ウ)	を に 北 ま	か い つ ぶ り	一、上 (一、一ウ)	か は わ た り 餅	七、上 (三、四ウ)	香 か う 橙	五、上 (三、五オ)	あ ぎ な し	あ ふ な こ	六、上 (四、一ウ)	あ ぶ ら ま じ	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)
あ ふ な こ	二九、上 (一、二オ)	う は ら が い	三、上 (一、二ウ)	う て か へ り ご し	お く り ま ぜ	一、下 (一、一ウ)	大 を し	七、下 (一、一ウ)	を に 北 ま	か い つ ぶ り	一、上 (一、一ウ)	か は わ た り 餅	七、上 (三、四ウ)	香 か う 橙	五、上 (三、五オ)	あ ぎ な し	あ ふ な こ	六、上 (四、一ウ)	あ ぶ ら ま じ	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)
あ ふ な こ	二九、上 (一、二オ)	う は ら が い	三、上 (一、二ウ)	う て か へ り ご し	お く り ま ぜ	一、下 (一、一ウ)	大 を し	七、下 (一、一ウ)	を に 北 ま	か い つ ぶ り	一、上 (一、一ウ)	か は わ た り 餅	七、上 (三、四ウ)	香 か う 橙	五、上 (三、五オ)	あ ぎ な し	あ ふ な こ	六、上 (四、一ウ)	あ ぶ ら ま じ	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)
あ ふ な こ	二九、上 (一、二オ)	う は ら が い	三、上 (一、二ウ)	う て か へ り ご し	お く り ま ぜ	一、下 (一、一ウ)	大 を し	七、下 (一、一ウ)	を に 北 ま	か い つ ぶ り	一、上 (一、一ウ)	か は わ た り 餅	七、上 (三、四ウ)	香 か う 橙	五、上 (三、五オ)	あ ぎ な し	あ ふ な こ	六、上 (四、一ウ)	あ ぶ ら ま じ	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)
あ ふ な こ	二九、上 (一、二オ)	う は ら が い	三、上 (一、二ウ)	う て か へ り ご し	お く り ま ぜ	一、下 (一、一ウ)	大 を し	七、下 (一、一ウ)	を に 北 ま	か い つ ぶ り	一、上 (一、一ウ)	か は わ た り 餅	七、上 (三、四ウ)	香 か う 橙	五、上 (三、五オ)	あ ぎ な し	あ ふ な こ	六、上 (四、一ウ)	あ ぶ ら ま じ	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)
あ ふ な こ	二九、上 (一、二オ)	う は ら が い	三、上 (一、二ウ)	う て か へ り ご し	お く り ま ぜ	一、下 (一、一ウ)	大 を し	七、下 (一、一ウ)	を に 北 ま	か い つ ぶ り	一、上 (一、一ウ)	か は わ た り 餅	七、上 (三、四ウ)	香 か う 橙	五、上 (三、五オ)	あ ぎ な し	あ ふ な こ	六、上 (四、一ウ)	あ ぶ ら ま じ	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)
あ ふ な こ	二九、上 (一、二オ)	う は ら が い	三、上 (一、二ウ)	う て か へ り ご し	お く り ま ぜ	一、下 (一、一ウ)	大 を し	七、下 (一、一ウ)	を に 北 ま	か い つ ぶ り	一、上 (一、一ウ)	か は わ た り 餅	七、上 (三、四ウ)	香 か う 橙	五、上 (三、五オ)	あ ぎ な し	あ ふ な こ	六、上 (四、一ウ)	あ ぶ ら ま じ	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)
あ ふ な こ	二九、上 (一、二オ)	う は ら が い	三、上 (一、二ウ)	う て か へ り ご し	お く り ま ぜ	一、下 (一、一ウ)	大 を し	七、下 (一、一ウ)	を に 北 ま	か い つ ぶ り	一、上 (一、一ウ)	か は わ た り 餅	七、上 (三、四ウ)	香 か う 橙	五、上 (三、五オ)	あ ぎ な し	あ ふ な こ	六、上 (四、一ウ)	あ ぶ ら ま じ	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)
あ ふ な こ	二九、上 (一、二オ)	う は ら が い	三、上 (一、二ウ)	う て か へ り ご し	お く り ま ぜ	一、下 (一、一ウ)	大 を し	七、下 (一、一ウ)	を に 北 ま	か い つ ぶ り	一、上 (一、一ウ)	か は わ た り 餅	七、上 (三、四ウ)	香 か う 橙	五、上 (三、五オ)	あ ぎ な し	あ ふ な こ	六、上 (四、一ウ)	あ ぶ ら ま じ	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)
あ ふ な こ	二九、上 (一、二オ)	う は ら が い	三、上 (一、二ウ)	う て か へ り ご し	お く り ま ぜ	一、下 (一、一ウ)	大 を し	七、下 (一、一ウ)	を に 北 ま	か い つ ぶ り	一、上 (一、一ウ)	か は わ た り 餅	七、上 (三、四ウ)	香 か う 橙	五、上 (三、五オ)	あ ぎ な し	あ ふ な こ	六、上 (四、一ウ)	あ ぶ ら ま じ	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)
あ ふ な こ	二九、上 (一、二オ)	う は ら が い	三、上 (一、二ウ)	う て か へ り ご し	お く り ま ぜ	一、下 (一、一ウ)	大 を し	七、下 (一、一ウ)	を に 北 ま	か い つ ぶ り	一、上 (一、一ウ)	か は わ た り 餅	七、上 (三、四ウ)	香 か う 橙	五、上 (三、五オ)	あ ぎ な し	あ ふ な こ	六、上 (四、一ウ)	あ ぶ ら ま じ	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)
あ ふ な こ	二九、上 (一、二オ)	う は ら が い	三、上 (一、二ウ)	う て か へ り ご し	お く り ま ぜ	一、下 (一、一ウ)	大 を し	七、下 (一、一ウ)	を に 北 ま	か い つ ぶ り	一、上 (一、一ウ)	か は わ た り 餅	七、上 (三、四ウ)	香 か う 橙	五、上 (三、五オ)	あ ぎ な し	あ ふ な こ	六、上 (四、一ウ)	あ ぶ ら ま じ	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)
あ ふ な こ	二九、上 (一、二オ)	う は ら が い	三、上 (一、二ウ)	う て か へ り ご し	お く り ま ぜ	一、下 (一、一ウ)	大 を し	七、下 (一、一ウ)	を に 北 ま	か い つ ぶ り	一、上 (一、一ウ)	か は わ た り 餅	七、上 (三、四ウ)	香 か う 橙	五、上 (三、五オ)	あ ぎ な し	あ ふ な こ	六、上 (四、一ウ)	あ ぶ ら ま じ	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)
あ ふ な こ	二九、上 (一、二オ)	う は ら が い	三、上 (一、二ウ)	う て か へ り ご し	お く り ま ぜ	一、下 (一、一ウ)	大 を し	七、下 (一、一ウ)	を に 北 ま	か い つ ぶ り	一、上 (一、一ウ)	か は わ た り 餅	七、上 (三、四ウ)	香 か う 橙	五、上 (三、五オ)	あ ぎ な し	あ ふ な こ	六、上 (四、一ウ)	あ ぶ ら ま じ	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)	あ ま ば を り	七、上 (四、五ウ)
あ ふ な こ	二九、上 (一、二オ)	う は ら が い	三、上 (一、二ウ)	う て か へ り ご し	お く り ま ぜ	一、下 (一、一ウ)	大 を し	七、下 (一、一ウ)	を に 北 ま	か い つ ぶ り	一、上 (一、一ウ)	か は わ た																

へ べり ど ち	へ だ れ 雪 こ こ	へ ふ く り	ひ び の さ ら な ぼ	は が ん ば な 西	な れ の き ば	な な を し	土 用 あ い	ド ム モ	て ん ち く ま め	テ テ の ぼ う	つ つ な し	ち や び ん	ね だ ひ	か づ き	を こ つ る	す ど り	し ら へ	じ ら う	じ や う	し び と は な
一、上 (一、 一ウ)	一、上 (一、 一ウ)	七、下 (四、 二ウ)	六、下 (四、 二ウ)	一、上 (一、 一ウ)	五、下 (三、 三ウ)	一、上 (一、 一ウ)	五、上 (一、 一ウ)	九、上 (五、 二ウ)	六、下 (四、 七ウ)	四、下 (三、 四ウ)	六、下 (四、 九ウ)	二、上 (二、 二ウ)	七、下 (五、 三ウ)	九、上 (五、 四ウ)	一、下 (一、 一ウ)	一、上 (一、 一ウ)	六、下 (四、 四ウ)	四、下 (三、 八ウ)	四、下 (三、 八ウ)	
知 音	ち お い ど ろ こ	所 法 則	丹 波	の か メ つ	山 陽 道	し く み	山 陰 道	れ ん ぎ	や す ら	む さ し	む ぐ ろ も ち	麥 藁 鯛	ま て な 人	松 な ば	ほ し の 入 り ご ち	ほ い た う	ほ い た う	ほ い た う	ほ い た う	
七、下 (五、 二ウ)	五、下 (三、 二ウ)	六、下 (四、 四ウ)	七、上 (五、 二ウ)	六、下 (四、 五ウ)	六、上 (四、 三ウ)	四、上 (一、 四ウ)	五、上 (一、 五ウ)	六、上 (四、 五ウ)	九、上 (五、 九ウ)	二、下 (三、 三ウ)	一、上 (一、 一ウ)	八、下 (五、 二ウ)	八、下 (五、 三ウ)	五、下 (三、 三ウ)	六、下 (四、 五ウ)	一、上 (一、 一ウ)	六、下 (四、 二ウ)	一、下 (一、 三ウ)	一、下 (一、 三ウ)	
妙 見 ひ い ど	但 馬 國 村 岡	や う す け る	み そ た れ る	へ こ た れ る	ひ い ご	ざ ふ す い	き や う も ど き	河 鹿	ガ ア ろ	お ど ろ	ち い ん 女 房	知 い ん 音	あ ほ う 鳥	あ ほ う 鳥	春 志	秋 ざ し	お げ ら ざ し	丹 波 國 桑 田 郡 大 原 社	ひ ん せ う	ち い ん 女 房
一、下 (一、 八ウ)	九、下 (五、 五ウ)	七、下 (四、 七ウ)	九、上 (五、 九ウ)	七、下 (三、 七ウ)	七、上 (四、 六ウ)	四、下 (三、 二ウ)	三、下 (二、 二ウ)	三、下 (二、 二ウ)	九、上 (五、 九ウ)	五、上 (一、 五ウ)	七、下 (五、 二ウ)	六、下 (四、 四ウ)	一、上 (一、 六ウ)	六、下 (四、 四ウ)	三、上 (二、 六ウ)	三、上 (二、 六ウ)	三、上 (二、 六ウ)	三、上 (二、 六ウ)	七、下 (五、 二ウ)	七、下 (五、 二ウ)

備前小島

いぞく 三一、下（三、三才）
 作柄
 ほ　う　し　四四、下（三、六才）
 美作

備前

[illegible]

因幡

うぐ

な	二、
る	下
こ	(三、二カ)
やうらうぐさ	四七、上
山にんじん	四六、上
	(三、セウ)

•

さあつ　　く
もしう　　く
九一、上　　（五、一五ウ）
六二、下　　（四、四オ）
九一、上　　（五、一五ウ）

周防

えんかういもば
えんかう
えんかう
ひぐらし
まいく

五〇、下(三、三ノ上ウ)
五〇、上(三、三ノ上ウ)
一六、下(三、四オ)
五六、下(三、八オ)
三三、下(三、四ウ)

石見

ま が め 三一、上 三、三ウ

備後

こがいのき
何ちふ
べつしてになる
五七、下 (三、一九ウ)
八五、下 (五、九オ)
七九、下 (五、三オ)

—

四國

藝州

あ	あ	あ
ま	ふ	ふ
ば	ら	こ
を	め	こ
り		
七二、	三〇、	六一、
上	上	上
四、	三、	四、
五	三	二
ウ	オ	カ

[illegible]

か	か	か	か	か	か	か	か	か	き	き	ぐ	く	く	く	ぐ	ぐ	ぐ	け	幸	こ	こ	さ	し	し	し	し	じ	す	せ
ご	ぶ	だ	だ	だ	だ	だ	だ	だ	の	ち	の	だ	だ	だ	だ	だ	だ	ふ	たら	じ	る	る	の	と	と	と	と	い	ん
め	か	か	か	か	か	か	か	か	ち	ち	ち	し	し	し	し	し	し	き	定	う	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま	け	ば
一七、下	二四、下	一六、下	一五、上	四九、上	六九、上	八七、上	二八、上	三七、下	三七、下	三七、下	三七、下	三四、上	三四、上	三八、上	四六、上	一六、下	九三、上	六〇、上	六〇、上	四六、上	七三、上	五六、下	六二、上	四六、下	三八、下	三七、下	三〇、上	四六、下	六四、上
(二、五ウ)	(二、四ウ)	(二、四ウ)	(二、二ウ)	(四、二ウ)	(二、二ウ)	(五、二ウ)	(三、七ウ)	(三、元ウ)	(三、元ウ)	(三、元ウ)	(三、元ウ)	(二、五ウ)	(二、五ウ)	(三、五ウ)	(二、四ウ)	(二、四ウ)	(二、四ウ)	(一、一ウ)	(四、一ウ)	(三、七ウ)	(四、六ウ)	(三、六ウ)	(四、三ウ)	(三、八ウ)	(二、三ウ)	(二、元ウ)	(三、八ウ)	(三、八ウ)	(四、五ウ)

[illegible]地名別索引 西國

わ	ろ	れ	よ	與	ゆ	山	や	も	め	目	み	ほ	善	ほ	へ	ふ	ふ	ふ	ふ	ひ	ひ
か	く	る	め	物	の	か	ぶ	う	は	そ	だ	く	う	う	と	と	く	く	く	う	う
な	う	き	と	と	こ	の	じ	ら	さ	白	鳥	れ	薩	り	こ	い	ら	り	り	う	う
二	七	六	一	一	七	五	五	八	一	二	四	六	四	七	九	四	六	三	三	九	
五	〇	四	四	九	二	二	二	六	〇	〇	〇	五	五	八	〇	二	二	五	四	三	
上	下	上	下	下	上	上	下	上	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	
(一、二〇ウ)	(四、三三ウ)	(四、五ウ)	(一、六ウ)	(二、八ウ)	(四、五ウ)	(三、三ウ)	(三、五ウ)	(三、〇ウ)	(二、四ウ)	(二、八ウ)	(一、四ウ)	(四、二ウ)	(四、二ウ)	(五、一ウ)	(三、二ウ)	(四、二ウ)	(三、五ウ)	(三、二ウ)	(三、二ウ)	(五、六ウ)	

川	が	片	か	お	桶	を	あ	あ	あ	あ	の	海	あ	わ	ち	よ	わ	わ	わ
は	は	は	い	の	の	か	ま	ま	ま	ま	う	う	か	か	い	い	く	く	く
た	た	た	ら	わ	入	へ	が	い	い	い	そ	坊	を	を	い	い	ひ	ひ	ひ
一	一	二	二	九	六	三	三	六	一	五	二	三	八	八	八	八	三	三	三
六	六	二	二	〇	八	〇	〇	九	三	〇	四	幸	上	上	上	上	上	上	上
下	下	上	上	下	下	下	下	上	下	下	下	下	上	上	上	上	上	上	上
(一、四ウ)	(二、四ウ)	(三、五ウ)	(三、五ウ)	(四、〇ウ)	(四、〇ウ)	(三、二ウ)	(三、二ウ)	(三、二ウ)	(二、四ウ)	(二、四ウ)	(三、二ウ)	(三、二ウ)	(五、二ウ)	(五、七ウ)	(五、七ウ)	(五、七ウ)	(五、七ウ)	(五、七ウ)	(三、二ウ)

彌	も	む	む	松	ほ	ほ	ふ	ふ	ひ	比	ば	ば	な	で	つ	ち	ち	た	千	す	す	じ	か	川
も	み	し	し	な	と	と	ら	く	く	古	う	う	ん	の	の	ね	か	ち	ち	ぼ	ぼ	う	う	の
助	い	な	な	ら	き	き	わ	う	さ	郎	う	う	し	し	し	ひ	き	き	三	三	し	ご	餅	餅
九	八	七	七	五	五	八	四	二	七	三	六	六	五	二	二	二	七	四	九	二	九	五	七	一
一	一	〇	〇	九	五	二	〇	二	六	三	六	六	九	三	三	三	九	三	一	六	一	五	五	六
下	上	上	上	下	下	下	上	下	下	上	下	上	下	下	下	上	下	下	上	下	下	下	下	下
(五、六ウ)	(五、四ウ)	(四、二ウ)	(四、二ウ)	(三、二ウ)	(三、二ウ)	(三、二ウ)	(三、二ウ)	(三、二ウ)	(二、四ウ)	(一、三ウ)	(一、七ウ)	(一、七ウ)	(二、二ウ)	(二、二ウ)	(二、二ウ)	(二、二ウ)	(三、二ウ)	(三、二ウ)	(三、二ウ)	(三、二ウ)	(三、二ウ)	(三、二ウ)	(三、二ウ)	(三、二ウ)

九州

わ	ろ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ
く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く
な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な
二	六	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
八	八	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
下	上	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下
(四、二〇ウ)	(四、二〇ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)

し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し
ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ
な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上
(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)

は	は	は	は	は	は	は	は	は	は	は	は	は	は	は	は	は	は	は	は	は	は	は	は	は
ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら
ご	ご	ご	ご	ご	ご	ご	ご	ご	ご	ご	ご	ご	ご	ご	ご	ご	ご	ご	ご	ご	ご	ご	ご	ご
七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七
五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五
上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上
(四、八ウ)	(四、八ウ)	(四、八ウ)	(四、八ウ)	(四、八ウ)	(四、八ウ)	(四、八ウ)	(四、八ウ)	(四、八ウ)	(四、八ウ)	(四、八ウ)	(四、八ウ)	(四、八ウ)	(四、八ウ)	(四、八ウ)	(四、八ウ)	(四、八ウ)	(四、八ウ)	(四、八ウ)	(四、八ウ)	(四、八ウ)	(四、八ウ)	(四、八ウ)	(四、八ウ)	(四、八ウ)

[illegible][illegible]

[illegible]

[illegible]

山	なまこ	三、四、上	(一、五才)
や	らう	六、四、下	(四、六才)
四	ッ口	四、下	(一、五才)
六	道路	九、四、上	(五、九才)
越後糸魚川			
あ	さば	二、二、下	(三、二才)
い	ぢみ	二、三、下	(三、三才)
越後長岡			
を	これん	七、下	(一、八才)
じ	なみ	一、二、下	(一、三才)
よ	つか	三、五、上	(一、二才)
よ	つか	四、下	(一、五才)
越後高岡			
を	これん	七、下	(一、八才)
越後高田			
つ	りさせ	三、六、下	(三、六才)
ぼ	り	四、二、上	(三、三才)
佐渡			
き	みうを	二、三、上	(三、三才)
さ	かむかひ	二、二、下	(三、二才)
し	りう	二、三、上	(三、二才)
嶋	まはり	三、〇、上	(三、二才)
た	つのをろしご	三、三、上	(三、四才)
ち	んめう	四、五、下	(三、七才)

東國

[illegible][illegible][illegible]

と　と　て　て　つ　つ　つ　つ　つ　長　た　だ　た　た　た　大　そ　そ　そ　せ　せ　せ　暖　せ　須　す
う　う　　ん　こ　ら　く　く　が　ま　ぼ　　う　　ら　　な　　ん　　き　ば　　っ
ぐ　が　　ぎ　ぬ　け　い　い　げ　さ　　ろ　こ　し　　ま　　ぼ　　れ　ら　　ほ
は　ん　か　　ね　き　ぎ　も　しも　い　吏　る　し　ぼ　ご　し　こ　め　た　え　だ　う　ない　ひ　う　利　り

三四、下	四四、下	一四、下	八二、上	六九、上	六二、下	六六、下	四二、上	四四、下	四四、上	八二、上	一二、上	九一、上	六七、下	六七、下	六八、下	四〇、下	四三、上	八二、上	七四、下	五八、下	七七、上	二〇、下	九〇、上	八四、下	一一、下	三一、上
(三、六才)	(三、六才)	(一、一才)	(五、五才)	(四、二才)	(四、三才)	(四、八才)	(三、三才)	(三、六才)	(三、六才)	(五、五才)	(一、三才)	(五、一五才)	(四、九才)	(四、九才)	(四、一〇才)	(三、六才)	(三、四才)	(五、五才)	(四、一八才)	(三、二〇才)	(四、三才)	(二、八才)	(五、四才)	(五、八才)	(一、三才)	(三、三才)

ひ ひ び び は 腹 は は は は は は の め ぬ 俄^{には} 何^ン な な な な 長 ど と と と 同^{どう}
 や な ん ち だ く が ろ び か ひ の ま で つ ろ う う 志^し
 う や づ の き や す ざ り む あ ま じ こ り り だ め ひ う こ も う ら く く 行^く
 き ん う ら く き や す ざ り む あ ま じ こ り り だ め ひ う こ も う ら く く 行^く

九二、下 (五、七才)
八〇、下 (五、四才)
四一、上 (三、二才)
一五、上 (二、二才)
八〇、下 (五、四才)
四四、上 (三、三才)
九一、下 (五、六才)
一一、上 (二、二才)
六一、下 (四、三才)
八五、下 (五、九才)
八七、上 (五、二才)
九〇、下 (五、四才)
一四、下 (三、二才)
三、下 (二、三才)
六七、下 (四、九才)
八八、上 (五、三才)
八一、下 (五、五才)
五〇、上 (四、二才)
七一、下 (四、四才)
五五、上 (三、七才)
三〇、上 (二、七才)
一三、上 (二、四才)
五八、上 (三、三才)
六二、下 (四、四才)
五五、下 (三、七才)
四三、下 (三、五才)
九三、下 (五、八才)

せ	な	六、下 (一、七ウ)
東海道筋		
をじやれ	一〇、上 (一、二ウ)	
ごまのはい	一一、下 (一、三ウ)	
じまふとりぐさ	一二、下 (一、三ウ)	
たこをのぼす	五二、上 (三、三ウ)	
	六八、上 (四、二ウ)	
美濃		
あをはち	五九、下 (三、二ウ)	
いとかつら	五二、上 (三、二ウ)	
かゝはゆひ	八七、下 (五、二ウ)	
がくさう	四七、下 (三、九ウ)	
かみなりてふ	三五、下 (三、七ウ)	
こ	五九、下 (三、二ウ)	
こ	二四、上 (三、三ウ)	
そ	五八、下 (三、二ウ)	
たゝきぐ	四二、上 (三、三ウ)	
た	五二、上 (三、三ウ)	
た	九三、下 (五、八ウ)	
ぼ	九五、下 (五、二ウ)	
ま	四二、上 (三、三ウ)	
は	七一、下 (五、五ウ)	
も	一〇、上 (一、二ウ)	
ゆ	七二、上 (四、五ウ)	
り	五六、上 (三、七ウ)	
や		
う		
ぶ		
美濃加納		
山めぐり	三、下 (一、三ウ)	

た	ち	ぢ	ぢ	と	鍋	れ	の	の	ば	ふ	べ	ま	万	水	水	め	山	や	ゆ	り	り	六	あ
くら	の	の	と	と	づ	づ	の	の	の	ん	ん	う	ん	ん	ん	う	だ	ん	か	う	う	う	し
や	く	ち	ち	ち	る	き	の	の	の	く	く	ば	な	な	魚	ぎ	ご	わ	す	ぶ	ぶ	道	げ
九三、下	九一、下	四二、下	四一、上	五〇、上	五〇、上	九三、上	五七、下	四三、上	四二、下	四一、上	一三、下	四九、上	七、下	九一、下	二三、上	五〇、下	二一、下	五八、上	七八、下	八三、下	九二、上	五六、上	四三、上
(五、八〇)	(五、五ウ)	(三、四〇)	(三、二〇)	(三、三〇上ウ)	(三、三〇上ウ)	(五、二七ウ)	(三、九ウ)	(三、四ウ)	(三、四ウ)	(五、一ウ)	(二、二〇ウ)	(三、二〇ウ)	(二、八〇)	(五、六〇)	(三、二ウ)	(三、三〇)	(三、二〇)	(三、二〇)	(五、二〇)	(五、七〇)	(五、六ウ)	(三、七ウ)	(五、九〇)

遠江國天龍の川上

[illegible]

あをぎた	あぶらまじ	あらはへ	いそもの
二、上 (一、二オ)	一、下 (一、二オ)	七、上 (五、一オ)	三、上 (三、三ウ)
すずめの魚	すみだ鳥	つなほ	つなほ
二九、上 (二、九ウ)	一九、上 (二、七オ)	三三、上 (三、三ウ)	二六、下 (二、六オ)
なご	てつべん	つなほ	つなほ
五〇、上 (三、二ノ上ウ)	七七、上 (四、三ウ)	三三、上 (三、三ウ)	二六、下 (二、六オ)
にどなり	ねすみばな	ひでり草	ひやうたんご
四三、下 (三、五オ)	五三、上 (三、四ウ)	一七、上 (三、四ウ)	一七、上 (三、五オ)
ひやうたんご	ひでり草	まつかは	まつかは
四二、上 (三、三オ)	二二、下 (二、二オ)	五三、上 (三、四ウ)	七三、上 (四、六オ)
萬年草	やうびる	ゆゑる	ゆゑる
七三、上 (四、六オ)	七五、上 (三、六ウ)	一七、下 (三、六オ)	二八、下 (三、六ウ)
かざちまい	かざちまい	しびと	しびと
一七、下 (三、六オ)	三三、下 (三、四ウ)	四九、上 (三、二オ)	四九、上 (三、二オ)
伊豆	伊豆	伊豆	伊豆

[illegible]

伊豆の熱海 あたみ
うみぐちなは 二八、上（三、二七ウ）

伊豆大嶋 楊枝 三一、上(三、二ウ)

坂東

暖 ぬる き	ぜ	す	し	十	さ	ぎ	寒 かん	か	か	か	か	が	を	を	奥 おく	ふ	い	土 ち	あ	あ	筆	か
を	ぐ	ゆ	十六	い	や	う	紅 かう	か	か	か	が	を	を	を	奥 おく	ふ	い	土 ち	あ	あ	筆	か
せ	さ	ん	さ	い	う	う	紅 かう	か	か	か	が	を	を	を	奥 おく	ふ	い	土 ち	あ	あ	筆	か
く	う	ま	く	ち	ん	ん	梅 はい	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	花	ぎ
九〇、上	七八、下	九二、下	四四、下	四〇、下	三九、上	七六、上	五七、下	九五、下	九三、上	三一、下	六一、上	七八、上	六一、下	九一、上	二二、上	八一、下	三一、上	三七、下	八六、上	九四、下	五一、上	五九、上
(五、四ウ)	(五、一ウ)	(五、七ウ)	(三、六ウ)	(三、二ウ)	(三、三ウ)	(四、元ウ)	(三、元ウ)	(五、二ウ)	(五、七ウ)	(二、二ウ)	(四、二ウ)	(五、一ウ)	(四、二ウ)	(五、五ウ)	(二、二ウ)	(五、五ウ)	(三、三ウ)	(三、元ウ)	(五、二ウ)	(五、元ウ)	(三、三ウ)	(三、二ウ)

[illegible]

へ	べ	辨	ま	水	水	み	や	や	や	ふ	や	ろ	り	ろ	く	た	ぢ	ね	へ
へ	べ	辨	ま	水	水	み	や	や	や	ふ	や	ろ	り	ろ	く	た	ぢ	ね	へ
た	べ					づ	す	つ	か	う	い	き	き	に	ろ	を	だ	あ	あ
ば	る					ら	で	と	じ	い	い	む	む	居	め	な	ん	さ	さ
																が	ご	が	が
																す	ろ	ほ	ほ
九四、上	三四、上	一三、上	五〇、上	七六、上	四〇、下	三八、上	八一、下	五三、下	八〇、下	九二、下	八六、上	四二、下	六八、上	二九、上	四七、上	三八、上	二九、上	三八、上	三八、上
（五、九）	（三、五）	（一、四）	（二、三）	（四、九）	（一、四）	（二、三）	（五、五）	（三、五）	（五、七）	（五、七）	（五、二）	（三、三）	（四、二）	（三、九）	（三、九）	（三、九）	（三、九）	（三、九）	（三、九）
（五、九）	（三、五）	（一、四）	（二、三）	（四、九）	（一、四）	（二、三）	（五、五）	（三、五）	（五、七）	（五、七）	（五、二）	（三、三）	（四、二）	（三、九）	（三、九）	（三、九）	（三、九）	（三、九）	（三、九）

相模

いぬひやう	いぼくひ	いぼく	いぼ	い	江	ゑ	か
四三、下	三七、下	三七、下	九四、上	五三、下	五三、上	六三、上	九四、下
(三、五オ)	(二、元オ)	(二、元オ)	(五、元オ)	(三、四ウ)	(三、四オ)	(四、四オ)	(五、元ウ)

三六

[illegible]

三七

[illegible]

くつはッゼミ	くわんよこ	けいしど	小いはし	小いわし	こうだいご	こだ	小だ	鯛	こびたい	サいまめ	さいが	さらい	じさいも	しはれ	しはれ	せれ	ぜん	ぜん	ぜん	そでいし	たこのみ	だふさ	だふさ
三七、上、下	二七、上	二七、上	二六、上	二六、上	七三、上	六八、上	三二、下	二六、上	一三、下	九八、上	四三、下	一一、下	一一、下	七四、下	五七、上	五七、下	四四、上	四四、下	六五、上	四四、上	一三、下	一三、上	一四、上
(二、六ウ)	(二、六ウ)	(二、六ウ)	(二、五ウ)	(二、五ウ)	(四、六ウ)	(四、六ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(二、三ウ)	(五、三ウ)	(三、四ウ)	(一、二ウ)	(一、二ウ)	(四、六ウ)	(三、六ウ)	(三、六ウ)	(三、五ウ)	(三、五ウ)	(四、六ウ)	(三、五ウ)	(二、四ウ)	(二、四ウ)	(二、四ウ)
ちどくふ	ちんや	ちんや	くのぼ	くのぼ	で	で	と	な	な	れん	れん	れん	れん	のふ	のふ	は	は	は	番の	ひが	ひが	平	ふ
ちんや	ちんや	ちんや	くのぼ	くのぼ	で	で	と	な	な	れん	れん	れん	れん	のふ	のふ	は	は	は	番の	ひが	ひが	平	ふ
ちんや	ちんや	ちんや	くのぼ	くのぼ	で	で	と	な	な	れん	れん	れん	れん	のふ	のふ	は	は	は	番の	ひが	ひが	平	ふ
ちんや	ちんや	ちんや	くのぼ	くのぼ	で	で	と	な	な	れん	れん	れん	れん	のふ	のふ	は	は	は	番の	ひが	ひが	平	ふ
五八、下	三五、下	三八、下	七〇、上	七〇、上	六八、上	六四、上	九三、上	七八、下	六四、下	八二、上	八二、上	五八、上	五七、下	六二、上	三八、上	四九、上	五三、下	七二、下	一、上	四六、上	四一、下	二二、上	四一、下
(三、七ウ)	(三、七ウ)	(三、七ウ)	(四、二ウ)	(四、二ウ)	(四、二ウ)	(四、二ウ)	(五、七ウ)	(五、七ウ)	(五、七ウ)	(三、五ウ)	(三、五ウ)	(三、五ウ)	(三、五ウ)	(三、五ウ)	(三、五ウ)	(三、五ウ)	(三、五ウ)	(三、五ウ)	(一、一ウ)	(一、一ウ)	(一、一ウ)	(二、二ウ)	(二、二ウ)
ほたん	ほたん	ほたん	ま	ま	ま	ま	み	み	み	み	み	み	み	め	め	も	や	や	や	や	山	よ	よ
ほたん	ほたん	ほたん	ま	ま	ま	ま	み	み	み	み	み	み	み	め	め	も	や	や	や	や	山	よ	よ
ほたん	ほたん	ほたん	ま	ま	ま	ま	み	み	み	み	み	み	み	め	め	も	や	や	や	や	山	よ	よ
ほたん	ほたん	ほたん	ま	ま	ま	ま	み	み	み	み	み	み	み	め	め	も	や	や	や	や	山	よ	よ
三、下	三、下	三、下	九〇、上	九〇、上	四、上	四、上	三八、下	一七、上	七二、上	二〇、下	八一、上	八一、上	五五、下	五一、下	四四、下	四四、下	一四、上	一四、上	一四、上	一四、上	二〇、上	六二、上	八五、下
(一、四ウ)	(一、四ウ)	(一、四ウ)	(二、四ウ)	(二、四ウ)	(二、四ウ)	(二、四ウ)	(三、七ウ)	(一、七ウ)	(二、七ウ)	(二、七ウ)	(二、七ウ)	(二、七ウ)	(二、七ウ)	(二、七ウ)	(二、七ウ)	(二、七ウ)	(一、四ウ)	(一、四ウ)	(一、四ウ)	(一、四ウ)	(二、四ウ)	(二、四ウ)	(二、四ウ)
とうぐ	とうぐ	とうぐ	ま	ま	ま	ま	み	み	み	み	み	み	み	め	め	も	や	や	や	や	山	よ	よ
とうぐ	とうぐ	とうぐ	ま	ま	ま	ま	み	み	み	み	み	み	み	め	め	も	や	や	や	や	山	よ	よ
とうぐ	とうぐ	とうぐ	ま	ま	ま	ま	み	み	み	み	み	み	み	め	め	も	や	や	や	や	山	よ	よ
とうぐ	とうぐ	とうぐ	ま	ま	ま	ま	み	み	み	み	み	み	み	め	め	も	や	や	や	や	山	よ	よ
二、上	二、上	二、上	九〇、上	九〇、上	四、上	四、上	三八、下	一七、上	七二、上	二〇、下	八一、上	八一、上	五五、下	五一、下	四四、下	四四、下	一四、上	一四、上	一四、上	一四、上	二〇、上	六二、上	八五、下
(二、六ウ)	(二、六ウ)	(二、六ウ)	(二、四ウ)	(二、四ウ)	(二、四ウ)	(二、四ウ)	(三、七ウ)	(一、七ウ)	(二、七ウ)	(二、七ウ)	(二、七ウ)	(二、七ウ)	(二、七ウ)	(二、七ウ)	(二、七ウ)	(二、七ウ)	(一、四ウ)	(一、四ウ)	(一、四ウ)	(一、四ウ)	(二、四ウ)	(二、四ウ)	(二、四ウ)
上総、東上総	上総、東上総	上総、東上総	ま	ま	ま	ま	み	み	み	み	み	み	み	め	め	も	や	や	や	や	山	よ	よ
上総、東上総	上総、東上総	上総、東上総	ま																				

地名別索引 上総、東上総

四一

[illegible]

な	で	そ	せん	すし	鮓	こ	く	か	か	あ	あ	も	へ	は	の	れ	な	づ	サ	を	へ	出羽ノ秋田
て	つ	そ	ん	し	鮓	こ	く	か	か	あ	あ	も	へ	は	の	れ	な	づ	サ	を	へ	
ふ	か	く	く	し	鮓	こ	く	か	か	あ	あ	も	へ	は	の	れ	な	づ	サ	を	へ	
い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	
九	三	七	二	六	五	九	七	四	五	二	九	三	三	八	八	七	八	九	七	七	七	
五	五	八	二	二	八	五	二	九	七	二	一	八	五	五	五	五	五	五	五	五	五	
上	下	上	下	下	上	上	上	下	下	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	
(一)	(二)	(三)	(四)	(五)	(六)	(七)	(八)	(九)	(一〇)	(一一)	(一二)	(一三)	(一四)	(一五)	(一六)	(一七)	(一八)	(一九)	(二〇)	(二一)	(二二)	
し	十	さ	ご	け	か	が	お	終	を	う	い	あ	か	六	も	ま	辨	ひ	は	に	な	
が	文	い	ま	し	い	い	く	晦	を	う	い	あ	か	六	も	ま	辨	ひ	は	に	な	
ま	字	ん	ぎ	れ	い	い	く	晦	を	う	い	あ	か	六	も	ま	辨	ひ	は	に	な	
三	四	六	五	三	三	三	九	九	八	三	八	六	六	九	四	九	三	二	五	四	五	
下	下	下	下	上	上	上	下	上	上	下	上	下	下	上	下	上	上	上	上	上	上	
(一)	(二)	(三)	(四)	(五)	(六)	(七)	(八)	(九)	(一〇)	(一一)	(一二)	(一三)	(一四)	(一五)	(一六)	(一七)	(一八)	(一九)	(二〇)	(二一)	(二二)	
よ	ま	千	ふ	び	ひ	ひ	な	と	動	唐	て	つ	つ	ち	だ	だ	た	せ	す	し	し	
ま	す	さ	な	り	ら	や	ま	ら	う	い	こ	こ	こ	ん	ら	ら	ち	め	か	ま	つ	
き	ぎ	い	い	物	め	か	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	し	
七	六	九	五	七	四	七	二	三	三	九	四	七	七	七	七	七	四	六	四	四	五	
二	四	三	一	六	三	九	六	七	五	一	二	九	九	九	九	九	四	〇	四	四	五	
上	上	上	上	上	下	下	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	
(四)	(五)	(六)	(七)	(八)	(九)	(一〇)	(一一)	(一二)	(一三)	(一四)	(一五)	(一六)	(一七)	(一八)	(一九)	(二〇)	(二一)	(二二)	(二三)	(二四)	(二五)	

北海	かくふつ	二八、下(三、ハウ)	松前千砂野の演	さ い き	四四、上(三、五ウ)	琉玖	ア ン シ キ	八六、下(五、二ウ)
松前	しまうり	四五、下(三、セオ)	朝鮮	さく	六三、下(四、五オ)	福建	ち よ く	六三、下(四、五オ)
や か	かん	八、下(二、九オ)	薩	四〇、上(三、一オ)				
			善	ほち				

昭和八年九月十日印刷
昭和八年九月廿日發行

物類稱呼
定價貳圓

著作者 吉澤 義則

發行者 東京市京橋區銀座西二ノ一
立命館出版部
竹上孝太郎

印刷者 東京市京橋區京橋二ノ十三
佐々木恒太郎

東京印刷株式會社印刷
小器製本所製本



發行所 東京市京橋區銀座西二ノ一
京都市寺町廣小路
立命館出版部

電話 東京 五六一〇六番
電報 東京 七五三六二番

吉澤 義則 著 **國語說鈴**

吉澤博士は國語國文學界の最高權威として其の研究の斯界に寄與せる多大の貢獻は枚舉にいとまがない。本書敎むるところ國語國文學の全般に亘り其研究諸論はつきせぬ興趣の泉をなし、全篇にわたり高雅なる著者の全風貌を彷彿せしめてゐる。

價 三、八〇
送料 二二

吉澤 義則 著 **國語史概説**

本書は國語學の一部門としてその歴史的研究の方面を支持つた我國最初の研究書にして國語の音韻、語彙、語法等の上に如何なる變遷を経て現代に至れるかを明かにしたものである。

價 一、五〇
送料 一〇

吉澤 義則 撰 **徒然草** 諸抄大成

古來幾多の諸抄により異説多く解説多岐に分れ是非定まらず今諸抄大成により、現代の諸説をも網羅して正解を與ふ。徒然草解義の最高權威であり解釋の最後のものたるを斷言す。

價 五、三〇
税 二二

吉澤 義則 著 **異本徒然草**

本書は久原文庫藏曜本をそのよゝ活字に改め傍に光廣本を以つて校合し、上欄に延徳寫本及び正徹自筆本を抄録して本文との異同を示せり。上巻は延徳本、正徹本及び神宮文庫藏正徹本傳寫本の識語を、又下巻に光廣本、正徹本及び神宮文庫本の各識語を収め、巻頭に詳細なる索引を附せり。

價 一、二〇
送料 一二